

# HP OpenView Performance Insight

HP-UX、Linux、Solaris、Windows オペレーティングシステム用

ソフトウェアバージョン : 5.30

---

## Sybase データベースのインストールおよび アップグレードガイド

Manufacturing Part Number: J5223-99042

ドキュメントリリース日 : 2007 年 10 月

ソフトウェアリリース日 : 2007 年 10 月



## ご注意

### 保証

HP 製品およびサービスに対する保証は、当該製品およびサービスに付属の保証規定に明示的に記載されているものに限られます。本書のいかなる内容も、新たな保証を追加するものではありません。HP は、本書中の技術的あるいは校正上の誤り、省略に対して責任を負わないものとします。

本書に含まれる情報は、予告なく変更されることがあります。

### 権利の制限

本製品は機密コンピュータソフトウェアです。所有、使用、または複製には、HP から有効な使用許諾を得る必要があります。FAR 12.211 および 12.212 に従って、商業用コンピュータソフトウェア、コンピュータソフトウェアドキュメント、および商業用製品の技術データは、ベンダ標準の商業用ライセンスのもとで、米国政府にライセンスが付与されます。

### 著作権

© Copyright 2007 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

### 商標

Windows® および Windows Server™ 2003 は、Microsoft® Corp. の米国登録商標です。

UNIX® は、The Open Group の登録商標です。

Java™ は、Sun Microsystems, Inc. の米国商標です。

## ドキュメントの更新

本書のタイトルページには、以下の識別情報が記載されています。

- ソフトウェアバージョン番号 (ソフトウェアバージョンを示します)
- ドキュメントリリース日 (ドキュメントが更新されると変更されます)
- ソフトウェアリリース日 (該当バージョンのソフトウェアのリリース日を示します)

最近の更新があるかどうかの確認、または最新版のドキュメントを使用しているかどうかの確認を行うには、以下の **Web** ページをご覧ください。

**[http://ovweb.external.hp.com/lpe/doc\\_serv/](http://ovweb.external.hp.com/lpe/doc_serv/)**

該当する製品サポートサービスをご契約になれば、更新版または新しい版を受け取ることもできます。詳細については、**HP** にお問い合わせください。

## サポート

以下の HP ソフトウェアサポートサイトにアクセスすることができます。

**<http://support.openview.hp.com/support.jsp>**

HP のオンラインソフトウェアサポートでは、対話形式の技術サポートツールに効率的にアクセスできます。サポートサイトでは次のことが可能です。

- 関心のあるドキュメントを検索する
- サポートケースおよび改善要求を登録 / トラッキングする
- ソフトウェアパッチをダウンロードする
- サポート契約を管理する
- HP サポートの問い合わせ先を調べる
- 利用可能なサービスに関する情報を確認する
- 他のお客様とのディスカッションに参加する
- ソフトウェアトレーニングの検索および登録を行う

サポートの多くでは、HP Passport へのユーザー登録とサインインが必要です。多くの場合、サポート契約も必要です。

アクセスレベルおよび HP Passport に関する詳細は、以下の Web ページをご覧ください。

**[http://support.openview.hp.com/new\\_access\\_levels.jsp](http://support.openview.hp.com/new_access_levels.jsp)**

# 目次

1	OVPI のインストールについて	9
	運用環境	9
	スタンドアロン OVPI 環境	9
	分散 OVPI 環境	11
	機能の分散	11
	サーバーの分散	11
	スタンドアロン環境か分散環境かの選択	15
	質問事項	15
	OVPI コンポーネント	17
	OVPI データベース	17
	OVPI パフォーマンスマネージャ	17
	OVPI Web アクセスサーバー	18
	OVPI クライアント	18
	OVPI クライアントのみのインストール	20
	リモートポラー	20
	OVPI の共存	21
	OVPI のインストールの概要	22
	システムの役割による一般的なインストール	23
	スタンドアロン環境システムの役割	23
	分散環境システムの役割	23
	サポートされる OVPI 構成	26
	インストールメディア	27

2	インストールの前提条件	29
	ライセンスが付与されたインストールに <b>Evaluation</b> を変換する	29
	インストール前の作業	30
	国際化とローカライズの計画	38
	db3 モジュールのインストール (Red Hat Linux システムの場合のみ)	39
	インストールの前提条件のチェックリスト	40
	メモリーおよび記憶領域の要件	42
	インストールパラメータ値	43
3	Sybase Adaptive Server Enterprise 15 のインストール	47
	Sybase のインストールの前提条件	47
	UNIX システムでのみ適用される前提条件	52
	SAM ユーティリティを使用した HP-UX カーネルの再構成	52
	コマンド行を使用した HP-UX カーネルの再構成	55
	Solaris のカーネルの再構成	56
	Red Hat Linux のカーネルの再構成	57
	Sybase インストールでの raw パーティションと UNIX ファイルシステムの使用	58
	raw パーティションと UNIX ファイルシステムとの比較	60
	raw パーティションの設定	60
	Solaris の raw パーティションの設定	61
	HP-UX の raw パーティションの設定	63
	Sybase のインストールパラメータ値	74
	UNIX システムへの Sybase 15.0.2 のインストール	77
	Windows システムへの Sybase 15.0.2 のインストール	83
	インストール後の作業	87
	Sybase の開始と停止	88
	Sybase の開始	88
	Sybase の停止	89
	Sybase のインストールに失敗したときのトラブルシューティング	90
4	スタンドアロンサーバーへの OVPI のインストール	91
	OVPI インストールプログラムの起動	91
	次の手順	95

<b>5</b>	<b>分散環境での OVPI のインストール</b> .....	117
	インストールプログラムの起動 .....	117
	次の手順 .....	120
	中央サーバーへの OVPI のインストール .....	121
	サテライトサーバーへの OVPI のインストール.....	121
	Web アクセスサーバーのインストール.....	146
	OVPI クライアントのみのインストール.....	153
	リモートポワーコンポーネントのインストール.....	156
	OVPI クライアントのみのインストール.....	160
<b>6</b>	<b>インストール後の作業</b> .....	161
	サービスパックの適用.....	161
	分散システムでの共通キャラクタセットの使用.....	161
	証明書管理アプリケーションのルート権限 .....	162
	設定作業の実行.....	162
	システムのバックアップ.....	164
	OVPI の稼動とデータ収集の確認.....	164
	OVPI の開始と停止.....	165
	OVPI のインストールのトラブルシューティング .....	166
	OVPI のログファイル .....	166
	Windows の場合のみ : NNM の統合 .....	166
<b>7</b>	<b>OVPI のアンインストール</b> .....	167
	OVPI のアンインストールで事前に必要な作業 .....	167
	OVPI のアンインストール手順 .....	168
	OVPI の手動アンインストール (Windows システムの場合).....	170
	OVPI のアンインストール後の作業 .....	172
	OVPI のインストール先ディレクトリの削除 .....	172
	不要なディレクトリの削除 .....	173
	.ovpi ディレクトリの削除 .....	173
	RDBMS のアンインストール .....	174

8	Sybase RDBMS のアンインストール	175
	Windows にインストールした Adaptive Server 15.0.2 のアンインストール	175
	UNIX にインストールした Adaptive Server 15.0.2 のアンインストール	177
9	Sybase 15.0.2 へのアップグレード	179
	HP-UX、Linux、および Solaris システムでの Sybase のアップグレード	179
	Windows システムでの Sybase のアップグレード	189
	Sybase 11.9 から 15.0.2 へのアップグレード	189
	Sybase 15.0.1 から 15.0.2 へのアップグレード	195
10	OVPI 5.30 へのアップグレード	197
	アップグレード前の作業	198
	ウィザードを使用したアップグレード	199
	レポートバックのアップグレード	205
	リモートポーターのアップグレード	206
	アップグレード後の作業	206
11	Sybase インタフェースファイル	207
	UNIX システムでの Sybase インタフェースファイルの作成	208
	Windows システムでの Sybase インタフェースファイルの作成	211
	索引	217



# 1 OVPI のインストールについて

このマニュアルでは、ユーザーの最適な運用環境に HP OpenView Performance Insight (OVPI) 5.30 をインストールする方法について説明します。

OVPI 5.30 は、Sybase Adaptive Server Enterprise バージョン 15 のみをサポートしています。これよりも古いバージョンを使用している場合は、アップグレードが必要です。アップグレード方法については、第 9 章「[Sybase 15.0.2 へのアップグレード](#)」で説明します。

## 運用環境

OVPI は、スタンドアロン運用環境または分散運用環境としてインストールできます。この項では、2 つの実装についてと、どちらを選択するかについて説明します。

OVPI では、1 台のスタンドアロンシステムから開始して、必要に応じて追加できるモジュール式のクライアントサーバーアーキテクチャを使用しています。複数のリモートクライアントをインストールして 1 台のデータベースサーバーの管理下に置くことも、必要な数のデータベースサーバーをネットワークに設置して分散 OVPI 環境を構築することもできます。

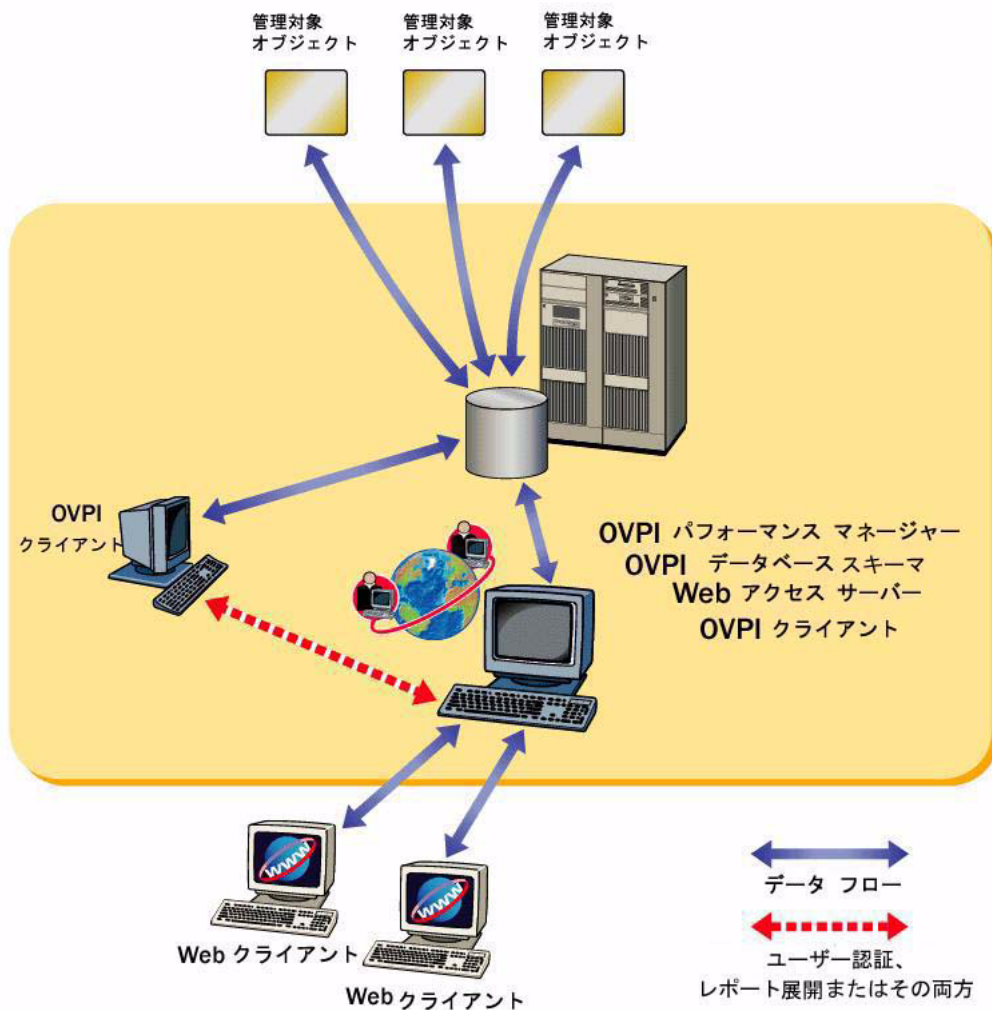
## スタンドアロン OVPI 環境

1 つの建物内または 1 つのユーザーグループに対してネットワークのパフォーマンスを監視する場合、またはネットワーク上の管理対象オブジェクトの数がおよそ 20,000 未満の場合は、スタンドアロンの OVPI 環境を構築します。

スタンドアロン構成では、すべての OVPI コンポーネントが 1つのシステムにインストールされます。このシステムでは、管理対象オブジェクトのポーリング、パフォーマンスデータの収集と処理、OVPI Web サイトのホスティング、パフォーマンスレポートの作成、OVPI クライアントの実行が可能です。

このタイプの環境は、OVPI 機能を分散させる環境に比べて、実装、連携、維持するコンポーネントの数が少ないため、管理が簡単で管理コストが安く済みます。

次の図はスタンドアロン OVPI 環境を示しています。



## 分散 OVPI 環境

大企業では、1つのシステムでは処理能力やディスク領域が不足して、OVPIでネットワークを最適に監視できない場合があります。そのため、負荷分散が必要なことがあります。

OVPI コンポーネントを複数のシステムにインストールしてネットワーク全体の構成を構築している環境を「分散 OVPI 環境」と呼びます。OVPI の各コンポーネントは物理的に異なる複数のシステムにインストールされますが、コンポーネント全体は1つのシステムとして動作します。

監視を必要とするネットワークは規模が大きく地理的に分散していることが多いため、OVPI は分散環境にも対応できるように設計されています。さまざまなコンポーネントを環境全体に機能的に配置することで、ネットワークの負荷を軽減し、システムのパフォーマンスを最適化することができます。

分散 OVPI 環境では、環境内のすべてのシステムに、サービスパック (パッチレベル) も含めて同じバージョンの OVPI をインストールする必要があります。

### 機能の分散

分散可能な OVPI の機能は次のとおりです。

- データ収集
- データ管理 (処理と要約)
- データレポート

3つの機能はすべて統合されており、物理的な場所は統合に影響しません。

リソース利用の費用対効果を最大化するには、各機能を別々のプラットフォームで実行することです。たとえば、データを収集するリモートポーリングシステムとして Windows オペレーティングシステムが稼動する PC を使用し、データを保存し処理するデータベースサーバーとして UNIX マシンを使用します。

### サーバーの分散

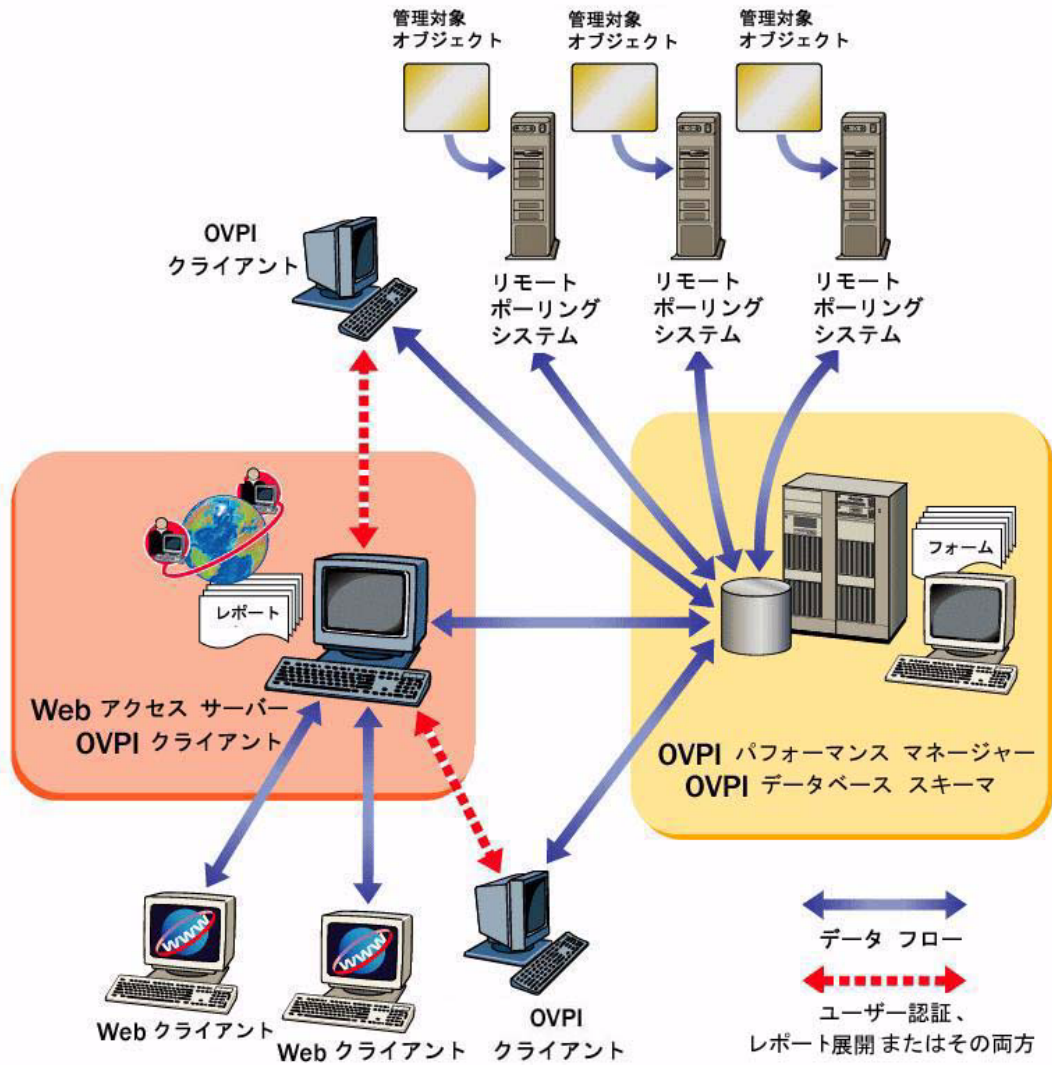
分散 OVPI 環境では、環境内におけるメインの処理およびレポートのプラットフォームは中央データベースサーバーで、ネットワーク全体のユーザーがアクセスできます。通常、設置される中央データベースサーバーは1台のみで、大量のディスク領域やメモリー、高い処理能力を必要とします。

逆に、分散環境には任意の数の**サテライトデータベースサーバー**を置くことができます。各サテライトデータベースサーバーは、データ収集および初期データ処理の役割を果たします。各サテライトデータベースサーバーからのデータは、中央データベースサーバーにアップロードされ、そこで他のデータと結合されます。

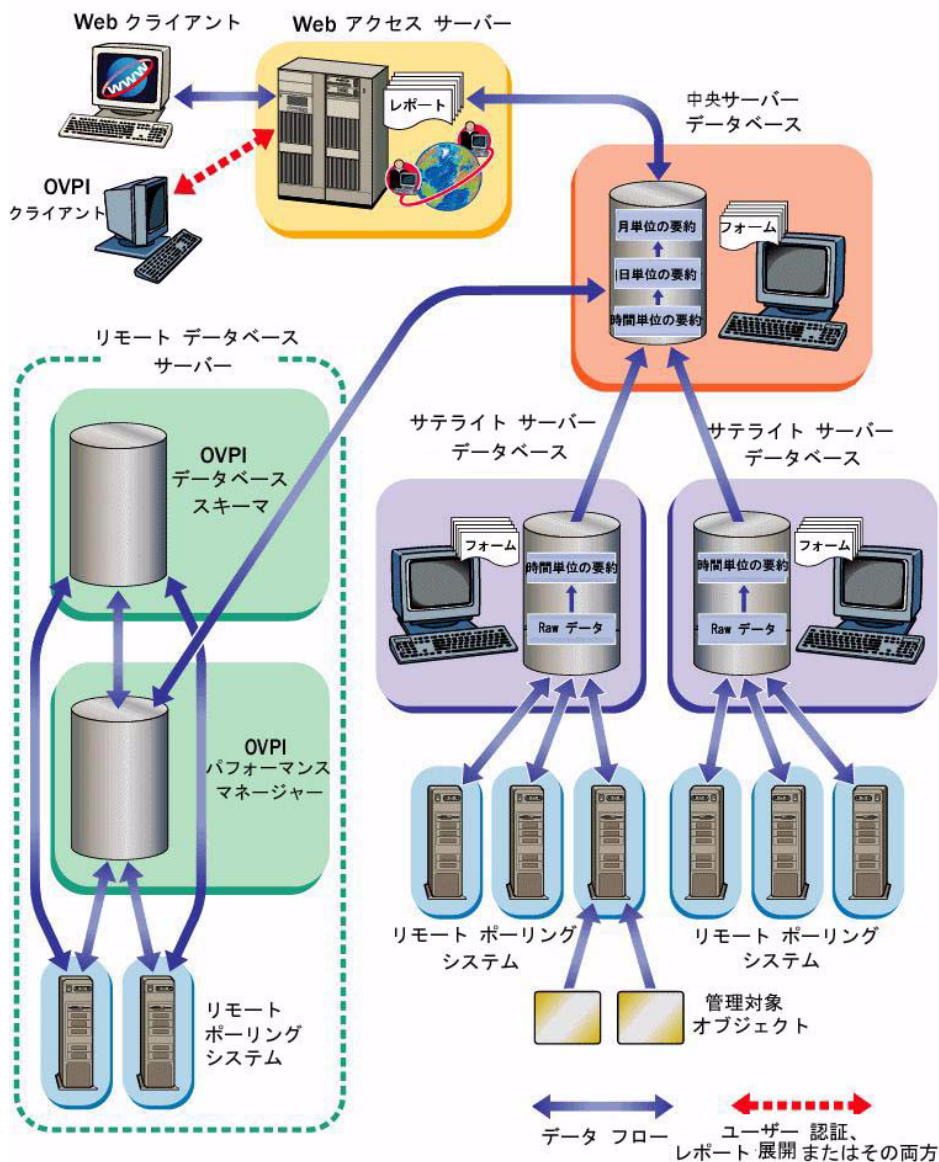
データ収集はネットワークに大きな負荷がかかる処理で、**OVPI**において時間に依存する数少ない処理の**1**つです。分散環境では、ポーリングのトラフィックを局所化し遅延を最小化するために、ポーリング対象のデバイスの近くにリモートポーリングシステムを設置するのが通常です。各ポーリングシステムは複数デバイスのポーリングを実行し、親のサテライトデータベースサーバー（通常はその地域の拠点）と通信します。

また、通常は分散環境に設置する**Web** アクセスサーバーは**1**台のみで、専用のシステムにインストールし、アクセス可能な**Web** ベースのクライアントワークステーションおよび**OVPI** クライアントワークステーションから送られてくるレポート要求を処理します。

次の図は単純な分散**OVPI** 環境の例で、中央データベースサーバーが**Web** ホスティングおよびリモートポーリング以外の全機能を処理しています。



次の図はより複雑な分散 OVPI 環境で、地理的に分散した大規模なネットワークでパフォーマンスを向上しています。この例では、複数のサテライトデータベースサーバーが各地域でサービスを提供しています。



収集されたパフォーマンスデータは各サテライトサーバーでコンパイルされ、中央データベースサーバーにアップロードされます。

各サテライトサーバーは、完全なデータ集約およびレポート生成を実行する完全にスタンドアロンのシステムとして機能します。さらに、データの一部を中央データベースサーバーにコピーします。このため、サテライトサーバーにおいて局所的なレポートを表示できると共に、中央データベースサーバーでネットワーク全体のレポートも利用することができます。

## スタンドアロン環境か分散環境かの選択

分散 OVPI 環境を導入する理由やタイミングを検討中なら、この項の説明が役に立ちます。

以下の条件のいずれかに当てはまる場合は、分散 OVPI 環境によってパフォーマンスの向上が期待できます。

- 地理的に分散している大規模なネットワークを使用していて、各地域についてそれぞれ独自のレポートが必要な場合
- 1つのポーリングシステムで処理できる量（一般的にポーリングおよび要約対象のオブジェクト数 **20,000**）を超える管理対象オブジェクトがある場合この制限は、ポーリング間隔（ポーリングの時間が増えるとポーリングできるインスタンスの数が増える）、生成される子コレクタの数（同時に実行する数が増えるとシステムの色度が上がる）、ネットワーク遅延時間、デバイス遅延時間など、多くの要因に影響されます。

### 質問事項

処理負荷の分散というメリットのほか、地理的、組織的、または機能的な要因も分散環境を検討する対象となります。以下の質問事項は必要性を判断するときに役立ちます。

- 管理対象オブジェクトの数。十分な処理能力が確保されているかを検証します。

OVPI がレポートする必要のあるオブジェクトの数は、必要なシステムの数に直接影響します。最低 1 台ずつ各種システムを用意する必要がありますが、分散環境をまったく必要としない場合もあります。HP の営業担当者がシステム要件を決めるお手伝いをします。

- 管理対象デバイスの位置。ネットワーク管理インフラストラクチャの速度を検証します。

管理対象デバイスが地理的に分散している場合は、リモートポーリングシステムが必要になります。一般的なケースとしてデータ収集が **SNMP** を使用して行われる場合、デバイスの近くにリモートポーラーを導入すると、パケットの移動距離を短くすることができます。このため、ポーリング応答時間が長くなり、データ収集の信頼性とパフォーマンスが改善されます。

- サテライトデータベースサーバーでのレポートの必要性。ユーザーの種類と各種ユーザーの作業内容を検証します。

複数のサテライトデータベースサーバーを設置しなければならないほどネットワークが大きい場合は、各サテライトデータベースサーバーに、ユーザーグループの作業対象であるデバイスグループを割り当てるかを検討します。

たとえば、ネットワークが複数の地域に分散している場合は、各地域に1つずつサテライトデータベースサーバーを配置するとよいでしょう。各地のユーザーがその地域に固有のレポートを表示したいかどうか、またその場合、レポートシステムへのアクセスをローカルにするかどうかを検討します。このような場合には、各サテライトサーバーは完全なデータ処理サイクルを実行する必要があり、**Web** アクセスサーバーもインストールする必要があります。その場合、サテライトデータベースサーバーにかかる処理負荷は大きくなりますが、地域的に存在するユーザーと中央に配置した **Web** アクセスサーバー間のネットワークトラフィックは軽減されます。

- 中央データベースサーバーでの準リアルタイムレポートの必要性。ユーザーの種類と各種ユーザーの作業内容を検証します。

収集したデータをサテライトデータベースサーバーで時間単位まで処理してから、中央データベースサーバーにコピーする方法が、データの集約や転送に関して最も効率の良い構成です。

この構成の利点は、中央データベースサーバーの処理負荷を減らすことができるだけでなく、サテライトデータベースサーバーと中央データベースサーバーとの間のネットワークトラフィックも軽減できることです。ただし、中央データベースサーバーは詳細なレポートが利用できなくなります。準リアルタイムレポートなどの一部のレポートを表示するには、最も精度の高い割合データが必要です。もしデータが中央データベースサーバーにないときは、これらのレポートを削除した方がよい場合があります。



# OVPI コンポーネント

OVPI は以下のコンポーネントで構成されています。

## OVPI データベース

OVPI データベースは RDBMS と OVPI データベーススキーマで構成されています。OVPI のインストールを開始するには、まず OVPI 運用環境用のデータベースサーバーを作成する必要があります。データベースサーバーの作成では以下のことを行います。

- OVPI でサポートされている RDBMS をシステムにインストールするか、サポートされている既存の RDBMS を OVPI で必要なバージョンにアップグレードします。

OVPI バージョン 5.30 は RDBMS をサポートしています。

RDBMS をインストールすると、OVPI データベースインスタンスが作成されます。これは OVPI によって収集、処理、およびレポートされるパフォーマンスデータの指定リポジトリです。データベースインスタンスの初期状態は空です。

- OVPI データベーススキーマのインストールによって、パフォーマンスデータを保存するテーブルおよびデータ間の関係を定めるインデックスが作成されます。データベーススキーマをインストールすると、OVPI はテーブルを作成し、テーブルのいくつか(時間範囲テーブル、データベースに関する情報テーブルなど)にデータを設定します。また、デバイスファイルを追加し、OVPI データベースインスタンスを調整します。

## OVPI パフォーマンスマネージャ

OVPI パフォーマンスマネージャ (HP OpenView Performance Manager とは別の製品) には、収集したパフォーマンスデータの保存、処理、およびレポート用のツールが付属しています。OVPI パフォーマンスマネージャは、OVPI データベースのデータ集約と要約を実行し、期限が切れたデータを除外します。OVPI パフォーマンスマネージャには全機能を装備した管理コンソールが付属しており、OVPI 環境を管理するためのツールとなります。さらに、OVPI クライアントに Web サービスを提供する Web アプリケーション、OVPI 管理サーバーも付属しています。

OVPI パフォーマンスマネージャは環境内の複数のシステムにインストールできませんが、インストール先のシステムはデータベースサーバーか、既存のリモートデータベースサーバーに接続しているシステムでなければなりません。

もっとも一般的な方式は、OVPI パフォーマンスマネージャをデータベースサーバーシステムにインストールする方法です。RDBMS および OVPI パフォーマンスマネージャは CPU およびディスクを大量に使用するため、専用のシステムにインストールするのが理想的です。

データベースサーバーにリモートでアクセスするシステムに OVPI パフォーマンスマネージャをインストールすることもできます。これが有利になるのは、データベースを中央管理で制御しながら、データベースファームを使っている場合、またはインストールでデータベースのライセンスが問題となる場合（購入済みの RDMS を使用するなど）です。このような場合は、OVPI をインストールする前に、OVPI をサポートするリモートデータベースをセットアップする必要があります。

## OVPI Web アクセスサーバー

システムに OVPI Web アクセスサーバーをインストールすると、OVPI Web サイトに対するホストが作成されます。このホストは、認証サービスおよび構成サービス、Web ベースのレポートユーティリティ、OVPI クライアント コンポーネントを使用したユーザー管理ユーティリティを提供します。OVPI Web アクセスサーバーは大量のメモリーと CPU を必要とするため、地域でのレポート出力以外の目的ではデータベースサーバーにはインストールしません。

## OVPI クライアント

OVPI クライアントは、レポートの作成、表示、および配布、さらに管理作業のような機能のために OVPI とユーザー間のインタフェースを提供します。OVPI クライアントは、OVPI グラフィカルユーザーインタフェースを使用して利用できます。ほとんどはコマンド行ユーティリティでも利用できます。

OVPI クライアントは、OVPI Web アクセスサーバーに接続可能なネットワーク接続されたシステムにグループとして（別の OVPI コンポーネントの有無に関係なく）インストールされます。

OVPI クライアントは次の機能を提供します。

- **レポートビルダ** : OVPI データベースのデータに基づき、複数の表とグラフを使用してパフォーマンスレポートを作成し、カスタマイズできます。
- **レポートビューア** : パフォーマンスレポートを対話形式で表示、変更、保存、印刷できます。
- **管理コンソール** : 以下のコンポーネントを使用して管理作業を実行できます。
  - **カタログマネージャ** : OVPI データベースのデータをもとに OVPI レポートおよびリンクカタログを管理します。
  - **データベースチューナー (Sybase システムの場合のみ)** : 全体的なデータスループットを向上させるデータベース構成パラメータを設定します。
  - **MIB ブラウザ** : SMI に準拠した SNMP MIB の分析、照会、トラブルシューティングを行います。
  - **SNMP 検出** : ノードセットが OVPI システムから接続可能かどうか、また、ノードセットが SNMP をサポートしているかどうかを判定します。SNMP 検出によって検出されたノードは OVPI ノードデータベースに追加されます。
  - **タイプ検出** : 検出したノードのデバイスタイプ (たとえばルーター、ハブ、スイッチ) を調べます。
  - **パッケージマネージャ** : パッケージのインストール、Web アクセスサーバーへのレポートの配布、タイプ検出、およびパッケージのアンインストールを実行します。
  - **オブジェクトマネージャ** : システム上の管理対象オブジェクトのプロパティを表示、変更および削除します。
  - **システムマネージャ** : 他のシステムにインストールした OVPI に対する参照を、追加、変更、削除します。
  - **グループマネージャ** : ポーリンググループを作成し、管理します。
  - **ポーリングポリシーマネージャ** : ポーリングポリシーの管理、ノードのインポートおよび管理、ポーリンググループの管理を行います。
  - **テーブルマネージャ** : データベースの監視、データおよびプロパティテーブルの表示、個別のテーブルまたはすべてのテーブルのデフォルト値の設定を行います。

## OVPI クライアントのみのインストール

他の OVPI コンポーネントとは別に、OVPI クライアントのみをインストールすることができます。これを「クライアントのみ」のインストールと呼びます。クライアントのみのインストールは、ローカルのワークステーションで作業し、OVPI Web アクセスサーバーにリモートでアクセスするユーザーに対して、特定のレポート機能と管理機能を提供します。

ただし、クライアントのみのインストールでは、管理コンソールの全機能が使えるわけではないことに注意してください。次のコンポーネントは、管理コンソールの [ ツール ] メニューからは利用できません。

- カタログマネージャ
- MIB ブラウザ
- SNMP 検出
- タイプ検出
- パッケージマネージャ
- コピーポリシーマネージャ

さらに、ユーザーは新しいデータテーブルまたはプロパティテーブルを登録することも、収集データをデータベースに自動的に追加することもできません。管理コンソールの全機能を有効にするには、OVPI パフォーマンスマネージャをインストールする必要があります。

## リモートポーター

ネットワーク上の 1 つまたは複数のノードからデータを収集する処理、および OVPI データベースサーバーにデータを格納する処理をポーリングといいます。OVPI のポーリング機能は、およそ 20,000 の管理対象オブジェクト (パフォーマンスを監視するネットワークデバイスまたはインタフェース) を処理することができます。

ポーリング機能を処理するソフトウェアは、OVPI パフォーマンスマネージャをインストールすると自動的にインストールされます。このソフトウェアは、自動でデータベースサーバーから直接ノードをポーリングすることができます。

管理対象オブジェクトが 20,000 を超える場合や、地理的な理由でリモートポーリングシステムを別途、ポーリング対象のデバイスの近く (特定の地域やユーザーグループなど) に設置したい場合があります。

その場合、各リモートポーリングシステムに **OVPI** リモートポーラーコンポーネントをインストールする必要があります。各リモートポーリングシステムはポーリング機能専用となります。リモートポーラーには **OVPI** データベースがなく、データに対する処理を一切行いません。パフォーマンスデータの収集およびデータベースサーバーへのアップロードのみを行います。

各データベースサーバーは任意の数のリモートポーリングシステムをサポートできます。

## OVPI の共存

次の OpenView 製品は OVPI 5.30 と共存することができます。

- NNM 7.5x
- HP Performance Agent 4.70
- HP Operations agent 7x, 8x

# OVPI のインストールの概要

OVPI のインストールと設定に必要な主な作業は次のとおりです。

- **インストール要件の確認**

RDBMS および OVPI をインストールする前に、ハードウェア、ソフトウェア、機能の各要件を決定します (9 ページの「[OVPI のインストールについて](#)」を参照してください)。

事前の作業がすべて完了していることを確認するには、40 ページの「[インストールの前提条件のチェックリスト](#)」を参照してください。

- **Sybase RDBMS のインストール**

事前の作業を完了し、47 ページの「[Sybase Adaptive Server Enterprise 15 のインストール](#)」の説明に従って、RDBMS をインストールします。

- **OVPI コンポーネントのインストール**

スタンドアロン環境では、第 4 章「[スタンドアロンサーバーへの OVPI のインストール](#)」の手順に従います。

分散環境では、第 5 章「[分散環境での OVPI のインストール](#)」の手順に従います。

パフォーマンスレポートはインストールによって異なるため、レポートパックのインストールはインストール前の設定処理の一部になっています。インストール前の設定の詳細については、『[HP OpenView Performance Insight 管理ガイド](#)』で説明しています。

- **OVPI の設定**

OVPI 5.30 のインストールが正常に終了したら、第 6 章「[インストール後の作業](#)」のインストール後の作業をすべて実行し、OVPI の設定を行います。設定処理の詳細については、『[HP OpenView Performance Insight 管理ガイド](#)』を参照してください。

- **RDBMS のアップグレード**

OVPI 5.30 は Sybase バージョン 15.0.2 のみをサポートしています。これよりも古いバージョンを使用している場合は、アップグレードが必要です。アップグレードの手順については、第 9 章「[Sybase 15.0.2 へのアップグレード](#)」で説明しています。

- **OVPI のアップグレード**

古いバージョンの OVPI を使用している場合は、バージョン 5.30 にアップグレードします。アップグレードの手順については、第 10 章「OVPI 5.30 へのアップグレード」で説明しています。

## システムの役割による一般的なインストール

適切な運用環境（スタンドアロン環境または分散環境）が決まったら、それに従って OVPI コンポーネントをインストールします。

環境において個々のシステムが担う役割（サテライトデータベースサーバー、リモートポラー、Web クライアントなど）によって、どの OVPI コンポーネントをインストールする必要があるかが決まります。システムの役割を決めるには、そのシステムが実行するタスクの種類を理解する必要があります。

### スタンドアロン環境システムの役割

スタンドアロンシステムとは、すべてのデータ処理タスクを実行する単一のシステムのことです。スタンドアロンシステムはすべての役割を実行するため、すべての OVPI コンポーネントをインストールする必要があります。データ収集はデータベースサーバーから実行されるため、スタンドアロンシステムには個別のリモートポーリングシステムは必要ありません。

### 分散環境システムの役割

分散環境では、システムは次の特殊な役割を実行します。

- **リモートポーリングシステム**：データ収集を実行します。
- **サテライトデータベースサーバー**：以下の処理を実行します。
  - 未処理のデータから割合データへの変換処理
  - 割合データから時間単位データへの要約

通常、サテライトデータベースサーバーは、時間単位以上の頻度で収集されたデータの処理を実行することはありません。一部集約されたデータは中央データベースサーバーにコピーされ、そこで集約が完了します。

- **中央データベースサーバー** : 1 つまたは複数のサテライトサーバーから一部処理済のデータを受信し、時間単位以上のデータ処理を担当し、最終段階までデータを処理します。中央データベースサーバーは、日単位、月単位、および予測データの要約を実行します。
- **リモートデータベースサーバー** (省略可) : 特殊な付加的役割を実行します。
- **Web アクセスサーバー** : OVPI Web サイトをホストし、OVPI クライアントから出されるレポート要求、レポート表示、レポート作成の各タスクを処理します。
- **OVPI クライアント** : レポートの表示と作成、さらに多くのシステム管理タスクを実行する複数のアプリケーションで構成されます。



次の表に、通常インストールする OVPI コンポーネントを環境の種類と役割別に示します。

システムの役割	RDBMS	OVPI データ ベース スキーマ	OVPI パフォーマンス マネージャ	Web アクセス サーバー	OVPI クライ アント	リモート ポーター
<b>スタンドアロン環境</b>						
中央データベース サーバー	X	X	X (ポーリング 機能を含む)	X (OVPIクラ イアント を含む)	該当なし	該当なし
<b>分散環境</b>						
中央データベース サーバー	X	X	X	X (省略可)	X (WAS が ない場合)	
サテライトデータ ベースサーバー	X	X	X	X (省略可)	X (省略可)	
リモートデータ ベースサーバー	X	X				
Web アクセス サーバー				X (OVPIクラ イアント を含む)		
リモートポーリング システム						X
<b>クライアントのみ</b>						
OVPI クライアント					X	

## サポートされる OVPI 構成

オペレーティングシステム	RDBMS	OVPI コンポーネント
<b>HP-UX 11.11</b> <b>HP-UX 11.23 PA-RISC</b> <b>HP-UX 11.23 Itanium</b>	Sybase Adaptive Server Enterprise 15	すべて
<b>Solaris 9 および 10</b>	Sybase Adaptive Server Enterprise 15	すべて
<b>Red Hat Enterprise Linux AS 4.0 x86 (SP3)</b>	Sybase Adaptive Server Enterprise 15	すべて
<b>Windows 2003 Server x86 Standard Edition</b> <b>Windows 2003 Server x86 (Enterprise/ Datacenter)</b>	Sybase Adaptive Server Enterprise 15	すべて
<b>Windows XP</b>	サポートされていませ ん	Web アクセス サーバーのみ

# インストールメディア

OVPI の現バージョンには次のインストールメディアが含まれています。

- **OVPI 5.30 インストール DVD (RDBMS インストールおよびマニュアルを含む)**
- **レポートバック CD**



OVPI は、スペースを含む DEPOT パスによるインストールはサポートしていません。

たとえば、`/my space/DVDROM` というパスには「`my space`」という名前のフォルダーが含まれていますが、

このパスを使ってインストールしたりアップグレードしたりすることはできません。



## 2 インストールの前提条件

インストール前に、『HP OpenView Performance Insight リリースノート』に目を通しておくことを強くお勧めします。リリースノートでは、新機能、バグ修正、OVPI への直前の変更、そのリリースで利用可能なレポートパックのリストについて説明しています。

### ライセンスが付与されたインストールに Evaluation を変換する

すでに **Evaluation** の **PI 5.20** バージョンをダウンロードしてインストールしている場合、そのインストール済みのバージョンをライセンスが付与されたインストールに変換するには、次の手順を実行します。

- 1 PI GUI と Web ブラウザをすべて閉じます。
- 2 PI 5.20 製品 DVD を CD-ROM ドライブに挿入します。
- 3 製品ソフトウェアの「設定」コマンドファイルを検索します。
- 4 コマンド行から、以下のように入力します。 `setup -noeval`
- 5 PI Installation GUI が表示された場合は、これを閉じます。
- 6 OVPI HTTP Server を再起動します。

注：これは再インストールの手順ではありません。**Evaluation** のバージョンは製品バージョンと同じですが、レポートには **Evaluation** バージョンに「無許可ソフトウェア」ウォーターマークが表示され、ヘルプのバージョン情報は製品バージョンと異なります。インストーラは、インストール済みのバージョンのウォーターマークを変更します。

# インストール前の作業

RDBMS または OVPI コンポーネントをインストールする前に、次の作業を指定の順に完了する必要があります。

## タスク 1: オペレーティングシステムソフトウェアの更新

オペレーティングシステムソフトウェアに必要なパッチをすべてインストールします。必要なパッチの最新の一覧については **HP** の営業担当者にお問い合わせください。

- 1 パッチのリリースレベルを確認します。

オペレーティングシステムが適切なリリースレベルであることを確認します。**RDBMS** をインストールする前に、オペレーティングシステムのパッチをインストールする必要があります。

### Windows システムの場合

- a Windows エクスプローラの [ヘルプ] メニューから [バージョン情報] を選択します。
- b バージョンの行に記載されているサービスパックの番号を見つけます。次の例では、*xxxx* がビルド番号であり *n* がサービスパックの番号です。

Version 5.0 (Build *xxxx*: Service Pack *n*)

Windows 2003 では Service Pack 1 が必要です。

### HP-UX システムの場合

次のコマンドを入力します。

```
/usr/sbin/swlist -l product | fgrep PH
```

### Solaris システムの場合

次のコマンドを入力します。

```
showrev -p
```

Solaris に必要なパッチは次のとおりです。

Solaris 10      Solaris 10 Recommended Patch Cluster (2006 年 9 月 7 日)

Solaris 9      Solaris 9 Recommended Patch Cluster (2005 年 10 月 14 日)

## Red Hat Linux システムの場合

次のコマンドを入力します。

```
rpm -q -a
```

システムがそのリリースの現在のパッチレベルではない場合は、続行する前に必要なパッチをダウンロードしてインストールしてください。

- 2 HP-UX 固有のパッチをインストールします。

HP-UX11.11 の場合 :

**GOLDAPPS11i B.11.11.0612.459 HP-UX 11i v1 用アプリケーション  
パッチ (2006 年 12 月)**

**GOLDBASE11i B.11.11.0612.459 HP-UX 11i v1 用基本パッチ  
(2006 年 12 月)**

HP-UX11.23 (PA および IA) の場合 :

**QPKAPPS B.11.23.0706.064 HP-UX 11i v2 用 Quality Pack デボ  
(2007 年 6 月)**

**QPKBASE B.11.23.0706.064 HP-UX 11i v2 用 Quality Pack デボ  
(2007 年 6 月)**

HP-UX11.31 (IA) の場合 :

**QPKBASE B.11.31.0709.312a HP-UX 11i v3 用 Quality Pack デボ  
(2007 年 9 月)**

**QPKBASE B.11.31.0709.312a HP-UX 11i v3 用 Quality Pack デボ  
(2007 年 9 月)**

パッチは <http://www1.itrc.hp.com/> からダウンロードできます。

- 3 Red Hat Linux 固有のパッチをインストールします。

Linux (RHEL4) の場合 : Update 3

## タスク 2: 実行中の Java 用パッチの確認

OVPI には Java 1.4.2.13 が含まれており、OVPI のインストール時に自動的にシステムにロードされます。ただし、お使いのオペレーティングシステムで必要なパッチを適用しないと、Java が正常に実行されない可能性があります。

Sybase データベースまたは OVPI をインストールする前に、すべてのオペレーティングシステムパッチをインストールする必要があります。このマニュアルの印刷時点でテストが完了している必要なパッチを掲載しています。必要なパッチの最新の一覧については HP の営業担当者にお問い合わせください。

### インストールされているパッチの確認

システムにインストールされているパッチを確認するには、次のコマンドを入力します。

HP-UX システムの場合：

```
/usr/sbin/swlist -l product | fgrep PH
```

Solaris システムの場合：

```
showrev -p
```

Windows システムの場合：

- a Windows エクスプローラの [ ヘルプ ] メニューから [ バージョン情報 ] を選択します。
- b バージョンの行に記載されているサービスパックの番号を見つけます。次の例では、*xxxx* がビルド番号であり *n* がサービスパックの番号です。  
Version 5.0 (Build *xxxx*: Service Pack *n*)

### 必要な Java パッチ

お使いのオペレーティングシステム用の最新の Java 関連パッチを検索するには、以下の URL にアクセスしてください。

HP-UX システムの場合：<http://www.hp.com/products1/unix/java/patches/index.html> ( 英語 )

Solaris システムの場合：<http://java.sun.com/j2se/1.4/download.html> ( 「Solaris OS Patches」 の項 )

Windows システムの場合：<http://windowsupdate.microsoft.com>



URL は予告なく変更されることがあります。

### タスク 3: (HP-UX の場合のみ) HP-UX Measurement Interface for 11i 製品のインストール

新しい OVPI 監視機能では、OVPI システムのステータスを適切に監視できるように、HP-UX Measurement Interface for 11i 製品をインストールする必要があります。HP-UX Measurement Interface for 11i パッケージは、HP-UX Mission Critical Operating Environment (MC-OE) と HP-UX Enterprise Operating Environment のメディアにバンドルされて配布されます。HP-UX アプリケーションリリース配布メディアからも入手できます。

/opt/perf/lib/libnums.sl があれば、必要なファイルはお使いのシステムにインストールされています。

GlancePlus または OpenView Performance Agent がインストールされた HP-UX システムは OVPI 監視機能が必要とするファイルを持っているため、前提となる製品を追加でシステムにインストールする必要はありません。

### タスク 4: ネットワーク接続性のためのポート識別

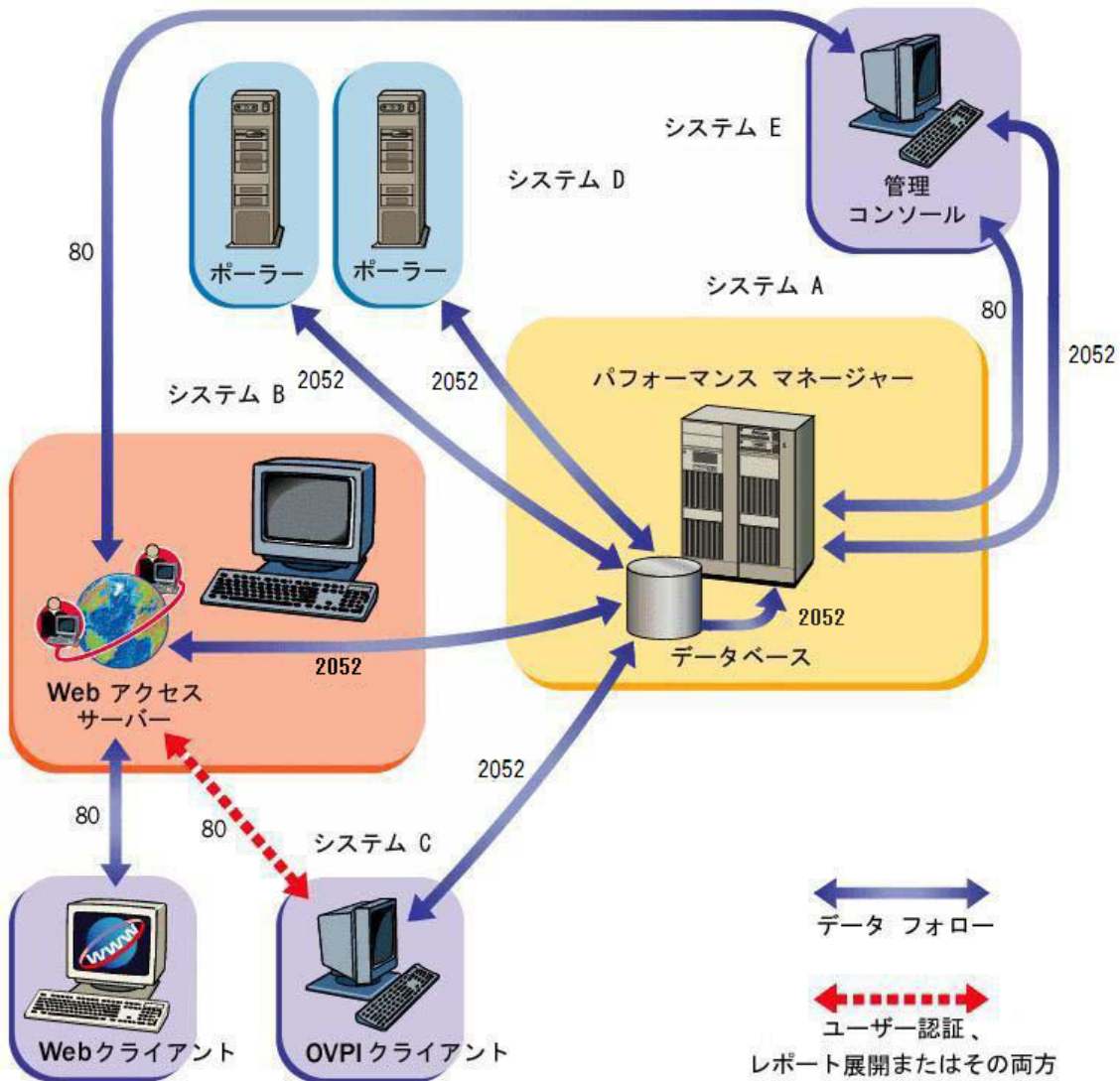
OVPI のシステム間はポートによって接続されます。OVPI は以下のデフォルトのポート番号を使用します。

OVPI コンポーネント	デフォルトのポート番号
Sybase RDBMS	5000 (Windows システム) 2052 (UNIX システム)
Web アクセスサーバー (デフォルトでポート 80 を使用する管理サーバーも含まれます。他の Web サーバーがポート 80 で実行されている場合は、OVPI 用にポート 8080 など他のポートを使用します。)	80 (SSL 非対応) 443 (SSL 対応)
管理コンソール	80



ファイアウォールソフトウェアを使用している場合は、ファイアウォールで OVPI ポートを開く必要があります。手順については、ファイアウォールのマニュアルを参照してください。

次の例は、デフォルトのポート番号を使用した OVPI の構成を示しています。



## ポーリングおよび SNMP の接続性

ネットワークからデータを収集するシステムは、中間的なファイアウォールを介してネットワークデバイスに接続する必要があります。リモートポーラーシステムとポーリング対象デバイスはファイアウォールの外側に配置し、リモートポーラーはファイアウォールを介してデータベースサーバーに接続することをお勧めします。こうすることでファイアウォールを介する接続の数が減ります。

サテライトデータベースサーバーが複数のポーリングシステムを管理する場合は、各ポーリングシステムがポーリングするデバイスを分割するための特殊なポーリングポリシーを作成する必要があります。ポーリングポリシーの作成の詳細については、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。

## クライアントの接続性

Web ブラウザを使用してレポートを表示するには、システムと Web アクセスサーバー間の HTTP 接続が必要です。

レポートビューアまたはレポートビルダアプリケーションを使用するには、クライアントシステムと Web アクセスサーバーシステム、適切なポート上のデータベースサーバー間の接続性が必要です。クライアントをインストールする場合は、Web アクセスサーバーの参照ページで指定したのと同じ Web アクセスサーバーとポート番号を指定します。Web アクセスサーバーのインストールの詳細については、146 ページの「[Web アクセスサーバーのインストール](#)」を参照してください。

## タスク 5: Web アクセスの計画

- 1 サポートされている Web ブラウザを使用していることを確認します。

Web ユーザーは次のいずれかの Web ブラウザに接続できる必要があります。

- Microsoft Internet Explorer 5.5 以降
- Mozilla Firefox 1.5 以降

- 2 Java スクリプトが有効になっていることを確認します。

Web ブラウザでは Java スクリプトが有効になっている必要があります。そうでないと、Web アクセスサーバーアプリケーションのナビゲーションフレームを参照できません。

Java スクリプトを有効にするには、Web ブラウザによって以下のいずれかを実行します。

#### Internet Explorer の場合

- a ブラウザの [ツール] メニューから [インターネットオプション] を選択します。[インターネットオプション] ダイアログボックスが開きます。
- b [セキュリティ] タブを選択します。Web コンテンツのゾーンで [インターネット] をクリックし、[レベルのカスタマイズ] をクリックします。[セキュリティの設定] ダイアログボックスが開きます。
- c 設定の一覧を下へスクロールし、スクリプトの設定を探します。[アクティブスクリプト] の下の [有効にする] を選択します。
- d [セキュリティの設定] ダイアログボックスの [OK] をクリックします。
- e [インターネットオプション] ダイアログボックスの [OK] をクリックします。

#### Mozilla Firefox の場合

- a ブラウザの [ツール] メニューから [オプション] を選択します。  
[オプション] ダイアログボックスが開きます。
- b [コンテンツ] タブを選択し、[JavaScript を有効にする] チェックボックスをオンにします。
- c [オプション] ダイアログボックスの [OK] をクリックします。

### タスク 6: SNMPv3 ノード用 SNMP セキュリティパックのインストール

SNMPv3 ノードからデータを収集する場合は、SNMP Research International, Inc. から入手できる SNMP セキュリティパック製品をインストールする必要があります。詳細については、次の SNMP の Web サイトにアクセスしてください。

**<http://www.snmp.com>**

オペレーティングシステムに合わせて以下のバージョンをインストールしてください。

- Windows システムの場合 : バージョン 16.1.0.35
- UNIX システムの場合 : バージョン 16.1.0.19


インストールに続いて SNMPv3 ノードを設定する必要があります。設定の詳細については、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。

## タスク 7: Network Node Manager との統合

- 1 HP OpenView Network Node Manager (NNM) バージョン 7.5 以降を実行していることを確認します。

お使いのシステムですでに NNM バージョン 7.5 を実行している場合は、OVPI のインストールが可能です。OVPI と NNM でコンポーネントを共有することで、OVPI MIB ブラウザおよび収集ウィザードツールが機能するようになります。これらのツールは古いバージョンの NNM では機能しません。

OVPI をインストールする前に、NNM をバージョン 7.5 以降にアップグレードすることをお勧めします。

 NNM 6.4 より前のバージョンの NNM では、OVPI のインストールができません。

- 2 OVPI をインストールする前に NNM プロセスを停止します。

インストール中のエラー発生を回避するため、OVPI をインストールする前に NNM プロセスを停止します。以下の手順に従ってください。

### Windows システムの場合

- a Windows のタスクバー上の [スタート] ボタンから、[プログラム] → [HP OpenView] → [Network Node Manager 管理] とクリックし、[NNM サービス - 停止] を選択します。
- b NNM プロセスが停止されていることを確認します。Windows のタスクバー上の [スタート] ボタンから、[プログラム] → [HP OpenView] → [Network Node Manager 管理] とクリックし、[NNM サービス - ステータス] を選択します。
- c [サービス] ウィンドウを閉じます。ウィンドウを閉じないと、OVPI サービスのインストールに失敗します。

### UNIX システムの場合

- a コマンドプロンプトから以下のように入力します。  
**ovstop -c**

- b NNM プロセスが停止されていることを確認します。コマンドプロンプトから以下のように入力します。

```
ovstatus -c
```

#### タスク 8: Compaq Insight Manager サービスの停止 (HP Compaq システムの場合のみ)

Compaq システムに OVPI をインストールする場合は、Compaq Insight Manager サービスを停止する必要があります。

#### タスク 9: (Windows システムの場合のみ) HP 独自のメモリー管理デバイスの無効化

お使いの環境に HP 独自のメモリー管理サービスを稼働している Windows システムがあるときは、サービスマネージャを使用してそれらのサービスを「無効」にする必要があります。無効にするサービスは以下のとおりです。

- HpComponent
- HPEventLog
- HPFpcSvc
- HpLerSvc
- HPSdnSvc

#### タスク 10: (UNIX システムの場合のみ) サポートされているデスクトップを使用しているかの確認

OVPI は、Common Desktop Environment (CDE) をサポートしています。OVPI は OpenWindows をサポートしていません。

## 国際化とローカライズの計画

OVPI では、国際化をサポートしています。OVPI は、サポートされているオペレーティングシステムのどの言語バージョンにもインストールできます。データベースサポートは Sybase 向けに国際化されています。

OVPI バージョン 5.30 は、英語、簡体字中国語、日本語でのみ提供されています。

## db3 モジュールのインストール (Red Hat Linux システムの場合のみ)

Red Hat Linux システムに OVPI クライアントアプリケーションをインストールする場合は、Linux システムをインストールするときに db3 モジュール (rpm) もインストールする必要があります。このモジュールは Red Hat インストール CD にバンドルされていますが、自動的にインストールされません。OVPI を使用するには、db3 モジュールのインストールが必要です。

# インストールの前提条件のチェックリスト

- このリリースの『Performance Insight リリースノート』に目を通してある。
- スタンドアロン環境と分散環境のどちらを使用するかを決定してある。 9 ページの「[運用環境](#)」を参照してください。
- 必要なインストールメディアがすべてそろっている。 27 ページの「[インストールメディア](#)」を参照してください。
- サポートされているシステム構成(オペレーティングシステムと RDBMS)を使用している。 30 ページの「[インストール前の作業](#)」を参照してください。
- 各システムにインストールする OVPI コンポーネントを確認してある。 23 ページの「[システムの役割による一般的なインストール](#)」および 30 ページの「[インストール前の作業](#)」を参照してください。
- オペレーティングシステムに必要なパッチをインストールしてある。 30 ページの「[オペレーティングシステムソフトウェアの更新](#)」を参照してください。
- ネットワークおよびクライアント接続性のためのポート番号を確認してある。 33 ページの「[ネットワーク接続性のためのポート識別](#)」を参照してください。
- Web クライアントでサポートされているブラウザを使用していることを確認し、ブラウザで Java スクリプトを有効にしてある。 35 ページの「[Web アクセスの計画](#)」を参照してください。
- 必要に応じて、SNMP セキュリティパックをインストールしてある。 36 ページの「[SNMPv3 ノード用 SNMP セキュリティパックのインストール](#)」を参照してください。
- NNMを実行しているシステムにOVPIをインストールする場合は、適切なバージョンの NNM を使用していることを確認し、NNM プロセスを停止している。 37 ページの「[Network Node Manager との統合](#)」を参照してください。
- Red Hat Linux システムにインストールする場合は、db3 モジュールがインストールしてある。 31 ページの「[Red Hat Linux 固有のパッチをインストールします。](#)」を参照してください。



- Compaq システムにインストールする場合は、Compaq Insight Manager サービスを停止してある。 38 ページの「[Compaq Insight Manager サービスの停止 \(HP Compaq システムの場合のみ\)](#)」を参照してください。
- HP 独自のメモリー管理サービスを Windows で実行している場合は、それらのサービスを無効にしてある。 38 ページの「[\(Windows システムの場合のみ\) HP 独自のメモリー管理デバイスの無効化](#)」を参照してください。
- UNIX ユーザーの場合は、サポートされているデスクトップを使用している。 38 ページの「[\(UNIX システムの場合のみ\) サポートされているデスクトップを使用しているかの確認](#)」を参照してください。

## メモリーおよび記憶領域の要件

次の表に、OVPI コンポーネントに必要な最低限のディスク容量をオペレーティングシステム別に示します。

コンポーネント	HP-UX	Solaris	Windows	Linux
OVPI データベーススキーマ	2500MB	2100MB	2500MB	2000MB
OVPI パフォーマンスマネージャ	840MB	400MB	340MB	400MB
Web アクセスサーバー	810MB	420MB	340MB	400MB
OVPI クライアント	800MB	340MB	1700MB	320MB
リモートポーター	835MB	200MB	130MB	200MB
完全スタンドアロン	2500MB	2200MB	2100MB	2100MB

次の表に、OVPI に必要な最低限のメモリー容量と推奨されるメモリー容量を示します。この要件はもとのシステムサイズでの推奨要件に基づいており、ポーリング要件によって変更される可能性があります。

コンポーネント	最低	推奨
OVPI データベーススキーマ	512MB	1GB
OVPI パフォーマンスマネージャ (OVPI データベーススキーマを含む)	2GB	4GB
管理サーバー	256MB	512MB
OVPI クライアント	それぞれ 256MB <sup>a</sup>	512MB

コンポーネント	最低	推奨
コマンド行ユーティリティ	256MB <sup>b</sup>	512MB
リモートポーター	256MB	512MB
完全スタンドアロンインストール	4GB	8GB

- a. 複数のコンポーネントを同時に実行する場合は、メモリー要件はそれぞれに必要な容量の合計値になります。たとえば、管理コンソール、レポートビルダ、Web アクセスサーバーを 1 つのシステムで同時に実行する場合、最低メモリー要件は **768MB** になります。スタンドアロンインストールでは、Web アクセスサーバと管理サーバは同じ **Java 仮想マシン (JVM)** のメモリーを使用します。従って、最低限のメモリー容量は **256MB** になります。
- b. コマンド行ユーティリティはメモリーをほとんど使用しません。

OVPI データベーススキーマは、メモリー総量の **50 ~ 60%** に設定されます。管理サーバー、OVPI クライアント、コマンド行ユーティリティ、リモートポーターは最小限 (メモリー **1 ~ 2GB**) でインストールされます。残りの処理容量は **OVPI パフォーマンスマネージャ** が使用します。この容量がポーリング処理とデータのロードに十分な大きさであることを確認してください。

インストール後にレポートビルダ、レポートビューア、または **Web** アクセスサーバー用のメモリー容量を変更するには、**Web** アクセスサーバーを使用して **Java** の設定を変更します。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

## インストールパラメータ値

OVPI では、さまざまなインストールパラメータ用のデフォルト値が用意されています。いずれかのデフォルトを変更するときは、前もって変更点を明確にしておくことでインストールに余分な時間をかけずに済みます。

**Windows** システムのデフォルトのパス設定を変更する場合は、ディレクトリパスにスペースを入れないようにしてください。

次の表は、変更が可能なパラメータのデフォルトの一覧です。特に記載のないかぎり、パラメータはスタンドアロンインストールと分散インストールの両方に適用されます。

パラメータと説明	デフォルト値 Windows システム	デフォルト値 UNIX システム
<b>インストール先フォルダ</b> OVPI ソフトウェアのインストール先ディレクトリです。	C:\OVPI	/usr/ovpi
<b>Sybase のホスト名</b> Sybase がインストールされているシステムです。		
<b>Sybase TCP/IP ポート番号</b> Sybase が他のシステム上のクライアントおよびサーバーと通信するために使用する TCP/IP ポート番号です。	5000	2052
<b>Sybase サーバー名 (DSQUERY)</b> クライアントアプリケーションがデフォルトで情報を検索する Sybase SQL Server の名前です。	<LOCAL_HOST> この例では、LOCAL_HOST (Windows) または LOCALHOST (UNIX) が Sybase ホストの名前です。	<LOCAL_HOST>
<b>Sybase ディレクトリ</b> Sybase のインストール先ディレクトリです。	C:\Sybase	/usr/Sybase
<b>データベースデバイス</b> OVPI がデータベースデバイスファイルを作成するディレクトリです (raw デバイスを使用する場合は、デバイスファイルは作成されません)。	Sybase_directory\d bfiles 50%	Sybase_directory/ dbfiles 50%

パラメータと説明	デフォルト値 Windows システム	デフォルト値 UNIX システム
データベースのサイズ データベースデバイスファイルのサイズです。	800MB	800MB
トランザクションログ / データベース使用率	Sybase_directory\d bfiles 50%	Sybase_directory/ dbfiles 50%
一時領域 / データベース使用率	Sybase_directory\d bfiles (Windows) 50%	Sybase_directory/ dbfiles (UNIX) 50%
キャッシュフォルダー 収集したデータをデータベースに格納する前に 保存しておくためのキャッシュディレクトリで す。	\$DPIPE_HOME \collect	\$DPIPE_HOME /collect
ユーザー名 Web アクセスサーバー管理者の名前です。	trendadm	trendadm
HTTP ポート Web アクセスサーバーとの HTTP 通信に使用す るポート番号です。	80	80
Web アクセスサーバーホスト (分散インストールでのみ使用)		
Web アクセスサーバーポート (分散インストールでのみ使用) Web アクセスサーバーが使用する HTTP ポート 番号です。	80	80

パラメータと説明	デフォルト値 <b>Windows</b> システム	デフォルト値 <b>UNIX</b> システム
リモート管理サーバーのホスト (分散インストールでのみ使用) データベースホストシステムの名前です。	空白	空白
リモート管理サーバーのポート (分散インストールでのみ使用) データベースホストシステムが使用する HTTP ポート番号です。	80	80

# 3 Sybase Adaptive Server Enterprise 15 のインストール

OVPI をインストールする前に、Sybase RDBMS をインストールして実行しておく必要があります。

## Sybase のインストールの前提条件

- Sybase のマニュアルを確認します。  
Sybase をインストールする前に、Sybase インストールガイド、リリースノート、および **readme** ファイルを確認してください。Sybase のドキュメントは、インターネットでも利用できます (<http://www.sybase.com/support/manuals/>)。
- データベース管理者に相談します。  
できればインストールする前に Sybase データベース管理者に相談してください。データベース管理者なら、OVPI の最適な利用のための Sybase データベースの設計および設定の手助けをしてくれます。
- 一般的なパフォーマンスガイドラインを参照します。  
OVPI とともに使用する目的で Sybase をインストールするときは、可能な限り次のガイドラインに従ってください。これらの推奨事項はディスクの競合を減らすことを意図したものです。一般に、同時に動くディスクヘッドの数が多ければ、データベースの処理は速くなります。
  - Sybase と OVPI を別々の物理デバイスにインストールします。
  - 可能であれば、データとインデックスの各データファイルを別々のデバイスに置きます。
  - 可能であれば、tempdb を別のデバイスに置きます。
  - 可能であれば、dpipe\_log を別のデバイスに置きます。

- HP-UX 11.11 用の次のパッチ (32 ビット版および 64 ビット版共用) を必ず適用してください。

— PHKL\_27688

— PHCO\_31878

HP-UX では、次のバンドルパッチがインストールされている必要があります。

— Patch Level Description

— Bundle B.11.11 Patch bundle

— Bundle11i B.11.11.0306.1 Required patch bundle

— FEATURE11-11 B.11.11.0209.5 Feature enablement patches

— GOLDAPPS11i B.11.11.0412.5 Gold applications patches

— GOLDBASE11i B.11.11.0412.5 Gold base patches

— HWEnable11i B.11.11.0412.5 Hardware enablement patches

- データベースのハードウェア要件を確認します。

次の表に、データベースのサイズに基づいた、推奨する最小システム要件を示します。

データベースのサイズ <sup>a</sup>	CPU	Sybase 最低メモリー <sup>b</sup> および推奨メモリー	10KB RPM 以上のドライブ の数 <sup>c</sup>	ドライブの使用
2GB	1	1GB / 2GB	4	OS およびスワップ用に 1 個 一時データベース用に 1 個 ログファイル用に 1 個 データベース用に 1 個
5GB	1	1GB / 2GB	4	OS およびスワップ用に 1 個 一時データベース用に 1 個 ログファイル用に 1 個 データベース用に 1 個



データベースのサイズ <sup>a</sup>	CPU	Sybase 最低メモリー <sup>b</sup> および推奨メモリー	10KB RPM 以上のドライブ の数 <sup>c</sup>	ドライブの使用
10GB	2	1GB / 4GB	6	OS およびスワップ用に 1 個 一時データベース用に 1 個 ログファイル用に 1 個 データベース用に 3 個 (RAID 0 構成)
20GB	2	1GB / 4GB	6	OS およびスワップ用に 1 個 一時データベース用に 1 個 ログファイル用に 1 個 データベース用に 3 個 (RAID 0 構成)
40GB	4	1GB / 4GB	8	OS およびスワップ用に 1 個 一時データベース用に 1 個 ログファイル用に 1 個 データベース用に 5 個 (RAID 0 構成)
80GB	4	1GB / 4GB	8	OS およびスワップ用に 1 個 一時データベース用に 1 個 ログファイル用に 1 個 データベース用に 5 個 (RAID 0 構成)

- a. データベースには、保存するデータが使用する容量の 2 倍のディスク領域を確保する必要があります。記載されているドライブの数は、許容できるパフォーマンスを確保するための最小値であり、各ドライブが 36GB であることを前提としています。高性能のドライブ（たとえば転送速度が 72MB / 秒のドライブ）を使用しても、推奨されるドライブの数は減りません。4 つ以上のレポートパックを同時に実行している場合は、Web アクセスサーバーを別のシステムにインストールすることをお勧めします。
- b. RDBMS の最低メモリーの場合、OVPI をインストールして実行できますが、オブジェクトの数が制限されます。負荷がかかった状態ではパフォーマンスが許容できないレベルになる可能性があります。
- c. この中には、使用されているミラードライブは含まれていません。

この表は、OVPI がデータを収集し、レポートを生成する管理対象オブジェクトの数によってシステム負荷が決定されることが前提となっています。管理対象オブジェクトは、実際にデータを収集する対象の 1 つです（たとえば、1 つのフレームリレーの PVC や 1 つのルーターのインタフェースなど）。

中間サイズのスタンドアロンシステム（表の推奨要件に基づき、データベースサイズが 10 または 20GB のもの）で、15 分ごとに最高 20,000 の管理対象オブジェクトをポーリングできます。

分散型構成は通常、別個のレポートサーバー（Web アクセスサーバー）、サテライトサーバー、および中央サーバーから構成されています。サテライトサーバーは毎時ロールアップを実行し、時間単位のデータを中央サーバーに送信します。大規模なサテライトサーバーの場合は、15 分のポーリング周期で最大 30,000 個のインタフェースをポーリングできます。ポーリングしていない中央サーバーは、特別な調整をせずにサテライトサーバー 4 台をサポートします。



大規模なシステムの場合は、ディスクコントローラを追加することをお勧めします。

- Sybase の記憶領域およびメモリー要件を決定します。

次の表に最小記憶領域要件を示します。

コンポーネント	HP-UX	Solaris	Windows	Red Hat Linux
実行可能プログラム	367MB	358MB	99MB	850MB
マスターデータベース	50MB	50MB	30MB	50MB
ストアドプロシージャデータベース	60MB	60MB	60MB	120MB
インストール合計	477MB	468MB	189MB	1020MB

OVPI のインストール後に Sybase データベースのサイズを拡張する方法については、『Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。

Sybase の実行に必要なメモリー容量を決定するには、システムメモリーの総量に基づいた計算方法を使用します。

次の表に、**Sybase** の実行に必要なメモリー容量を、システムメモリーの総量に基づいて計算する方法を示します。

システムの物理メモリー	<b>Sybase</b> で必要とする割合
1 GB 以下	物理メモリーの 50%
1 GB 以上	物理メモリーの 60%

- デバイスサイズおよびアドレス指定可能なメモリーの制限を決定します。  
この項では、2 ギガバイト (GB) を超えるサイズのデバイスをサポートする場合の、**Sybase Adaptive Server Enterprise 15** のデバイスサイズの制限について説明します。

検索ユーティリティを使用して、**Sybase** はホストシステムで許可されている最大デバイスサイズを特定し、サポートすることができます。

次の表に、最大デバイスサイズおよびオペレーティングシステムによってどのように異なるかを示します。

オペレーティングシステム	<b>Sybase 15.0.2</b>	
	ファイル	Raw
HP-UX	32GB	32GB
Solaris	2GB	32GB
Windows	4GB	該当なし

次の表は、アドレス指定可能なメモリーの制限の一覧です (オペレーティングシステム別)。

オペレーティングシステム	<b>Sybase 15.0.2</b>
HP-UX	1GB
Solaris	4GB
Windows	2GB
Red Hat Linux	4GB

# UNIX システムでのみ適用される前提条件

Sybase を UNIX システムにインストールする場合は、必ず次のことを実行してからインストールを開始してください。

- カーネルを再構成し、システムを再起動します。SAM ユーティリティまたはコマンド行を使用します。
- UNIX ファイルシステムまたは raw パーティションのどちらに OVPI データベースをインストールするかを決定します。raw パーティションにインストールする場合は、Sybase データベースをインストールする前に raw パーティションを設定する必要があります。詳細は、58 ページの「[Sybase インストールでの raw パーティションと UNIX ファイルシステムの使用](#)」を参照してください。

OVPI をインストールする前に、システムにインストールされている Sybase のバージョンを確認することをお勧めします。Performance Insight 5.30 をインストールするには、Sybase 15.0.2 がインストールされている必要があります。詳細は、第 4 章「[スタンドアロンサーバーへの OVPI のインストール](#)」を参照してください。

## SAM ユーティリティを使用した HP-UX カーネルの再構成

以下の手順に従ってください。

- 1 ログオンして SAM ユーティリティを起動します。
  - a root としてログオンします。
  - b SAM ユーティリティを起動します (通常は /usr/sbin ディレクトリから)。[System Administration Manager] ウィンドウが開きます。
  - c **[カーネル設定]** アイコンをダブルクリックします。[System Administration Manager] ウィンドウに、SAM エリアの **[カーネル設定]** エリアが表示されます。
  - d **[設定可能なパラメータ]** アイコンをダブルクリックします。[カーネル設定] ウィンドウが開きます。

- 2 プロセスあたりの最大スレッド数を設定します。
  - a 設定可能なパラメータの一覧から **[max\_thread\_proc]** を選択します。  
max\_thread\_proc エントリが強調表示されます。
  - b [アクション]メニューから **[設定可能なパラメータの変更]** を選択します。  
[設定可能なパラメータの変更] ウィンドウが開きます。
  - c **[新しい式 / 値を指定]** を選択し、[式 / 値] ボックスに次の値を入力します。

**1024**

max\_thread\_proc を 1024 に設定できないときは、場合によってはカーネルの別の従属パラメータ (maxusers など) を調整する必要があります。


- d **[OK]** をクリックし、[設定可能なパラメータの変更] ウィンドウを閉じます。  
[カーネル設定] ウィンドウが開きます。
- 3 最大同時接続ユーザー数を設定します。
  - a 設定可能なパラメータの一覧から **[maxusers]** を選択します。maxusers エントリが強調表示されます。
  - b [アクション]メニューから **[設定可能なパラメータの変更]** を選択します。  
[設定可能なパラメータの変更] ウィンドウが開きます。
  - c **[新しい式 / 値を指定]** を選択し、[式 / 値] ボックスに次の値を入力します。

**124**

- d **[OK]** をクリックし、[設定可能なパラメータの変更] ウィンドウを閉じます。  
[カーネル設定] ウィンドウが開きます。

- 4 Sybase 用最大メモリー容量を設定します。
  - a 設定可能なパラメータの一覧から **[shmmax]** を選択します。shmmax エントリが強調表示されます。
  - b [アクション]メニューから **[設定可能なパラメータの変更]** を選択します。  
[設定可能なパラメータの変更] ウィンドウが開きます。
  - c **[新しい式 / 値を指定]** を選択し、[式 / 値] ボックスに次の値を入力します。

**1073741824**

- d これでは Sybase 用に設定可能なシステムメモリーの最大容量が定義されます。入力した値 (1073741824) は、1GB をバイト単位で表した数字です。HP-UX パッチのインストール状況によって、この値は最大 2147483648 (2GB) まで調整可能です。
  - e **[OK]** をクリックし、[設定可能なパラメータの変更] ウィンドウを閉じます。[カーネル設定] ウィンドウが開きます。
- 5 非同期ディスク I/O を有効にします。
-  使用するかどうかにかかわらず、非同期ディスク I/O を有効にすることを強くお勧めします。OVPI データベースを raw パーティションにインストールすると、データベースエンジンで非同期 I/O を使用できます。以下の手順はその設定方法です。
  - a SAM の [カーネル設定] メニューから **[ドライバ]** を選択します。
  - b ドライバの一覧から **[asyncdsk]** を選択します。asyncdsk ドライバが強調表示されます。
  - c [アクション] メニューから **[ドライバをカーネルに追加]** を選択します。asyncdsk の保留状態は **[In]** に設定されます。
- 6 カーネルの構築、再起動、およびインストールを行います。
- a [アクション] メニューから **[新規カーネルの処理]** を選択し、システムを再起動します。
  - b **[はい]** をクリックしてカーネルを再構築し、システムを再起動します。
  - c **Adaptive Server** およびバックアップサーバーを起動するユーザーのユーザー ID は /dev/async デバイスファイルのオーナーです。root としてログオンし、UNIX コマンドプロンプトで次のコマンドを入力します。

```
/etc/mknod /dev/async c 101 4  
chmod 0660 /dev/async
```
  - d Sybase をインストールし、インストールプロセスを続行します。詳細は、77 ページの「UNIX システムへの Sybase 15.0.2 のインストール」を参照してください。

## コマンド行を使用した HP-UX カーネルの再構成

以下の手順に従ってください。

- 1 システムにログオンし、システムファイルを抽出します。
  - a **root** としてログオンします。
  - b 実行中のカーネルからシステムファイルを抽出するには、次のコマンドを入力します。

```
cd /stand/build  
/usr/sbin/sysadm/system_prep -v -ssystem
```

- 2 パラメータを設定します。


パラメータ (**shmmax**、**maxusers**、および **max\_thread\_proc**) を追加または変更して、システムファイルの「調整可能なパラメータ」の部分を編集します。たとえば、次のように設定します。

```
shmmax 1073741824
```

これで **Sybase** 用に設定可能なシステムメモリーの最大容量が定義されます。入力した値 (**1073741824**) は、**1GB** をバイト単位で表した数字です。**HP-UX** パッチのインストール状況によって、この値は最大 **2147483648** (**2GB**) まで調整可能です。詳細は、サポートにお問い合わせください。

```
maxusers 124  
max_thread_proc 1024
```

**max\_thread\_proc** を **1024** に設定できないときは、場合によってはカーネルの別の従属パラメータ (**maxusers** など) を調整する必要があります。

- 3 非同期 I/O を有効にします。
  - a ファイルの「ドライバ/サブシステム」の部分を探します。
    -  使用するかどうかにかかわらず、非同期ディスク I/O を有効にすることを強くお勧めします。OVPI データベースを raw パーティションにインストールすると、データベースエンジンで非同期 I/O を使用できます。以下は非同期 I/O を有効にする手順です。
  - b 次の行を追加します。

```
asyncdsk
```

- 4 カーネルを構築します。
  - a 次のコマンドを使用して、カレントディレクトリにシステムカーネルを構築します。

```
/usr/sbin/mk_kernel -ssystem
```
  - b 次のコマンドシーケンスを入力して、プロセスを完了します。

```
mv /stand/system /stand/system.prev
mv /stand/vmunix /stand/vmunix.prev
mv /stand/build/system /stand/system
mv /stand/build/vmunix_test /stand/vmunix
```
- 5 再起動してインストールします。
  - a システムを再起動します。
  - b **Adaptive Server** およびバックアップサーバーを起動するユーザーのユーザー ID は `/dev/async` デバイスファイルのオーナーです。root としてログオンし、UNIX コマンドプロンプトで次のコマンドを入力します。

```
/etc/mknod /dev/async c 101 4
chmod 0660 /dev/async
```
  - c **Sybase** をインストールし、インストールプロセスを続行します。詳細は、77 ページの「[UNIX システムへの Sybase 15.0.2 のインストール](#)」を参照してください。

## Solaris のカーネルの再構成

以下の手順に従ってください。

- 1 **Sybase** システムファイルを編集します。
  - a テキストエディタを使用して `/etc/system` ファイルを開きます。
  - b 次のコマンドを変更して、**Sybase** に割り当てる総バイト数 (`nnnnnnnnnnn`) を設定します。

```
set shmsys:shminfo_shmmax=nnnnnnnnnnn
```

**Sybase** に割り当てるメモリー容量の要件の詳細については、50 ページを参照してください。総バイト数は、一覧にある必要バイト数かそれ以上でなければなりません。



Solaris 8 および 9 の場合は、物理メモリーの容量には関係なく最大で 4294967295 (4GB) まで設定できます。

1 ギガバイトは 1024 バイトの 3 乗です。従って、総バイト数は「ギガバイト数 × 1024 の 3 乗」で計算できます。たとえば、4GB の場合は  $4 \times 1024$  の 3 乗 = 4294967295 となります。

- c **maxusers** パラメータを変更します。このパラメータのデフォルト値は、物理メモリー (メガバイト単位)、または 1024 のいずれか小さい方です。この値は 2048 より大きく設定することはできません。

2 システムを再起動します。

- a システムを再起動します。

- b **Adaptive Server** およびバックアップサーバーを起動するユーザーのユーザー ID は /dev/async デバイスファイルのオーナーです。root としてログオンし、UNIX コマンドプロンプトで次のコマンドを入力します。

```
/etc/mknod /dev/async c 101 4  
chmod 0660 /dev/async
```

- c **Sybase** をインストールし、インストールプロセスを続行します。詳細は、77 ページの「UNIX システムへの **Sybase 15.0.2** のインストール」を参照してください。

## Red Hat Linux のカーネルの再構成

以下の手順に従ってください。

1 **Sybase** システムファイルを編集します。

- a テキストエディタを使用して /etc/rc.d/rc.local ファイルを開きます。
- b 次のコマンドを変更して、**Sybase** に割り当てる総バイト数 (nnnnnnnnnn) を設定します。

```
set kernel.shmmax=nnnnnnnnnn
```

オペレーティングシステムの共有メモリーのデフォルト値は通常 32MB です。Red Hat Linux システムの場合、HP では最低 1GB (1000000000 バイト) を推奨しています。**Sybase** に割り当てるメモリー容量の要件の詳細については、50 ページを参照してください。

- 2 システムを再起動します。
  - a システムを再起動します。
  - b **Adaptive Server** およびバックアップサーバーを起動するユーザーのユーザー ID は `/dev/async` デバイスファイルのオーナーです。root としてログオンし、UNIX コマンドプロンプトで次のコマンドを入力します。

```
/etc/mknod /dev/async c 101 4  
chmod 0660 /dev/async
```
  - c Sybase をインストールし、インストールプロセスを続行します。詳細は、77 ページの「[UNIX システムへの Sybase 15.0.2 のインストール](#)」を参照してください。

## Sybase インストールでの raw パーティションと UNIX ファイルシステムの使用

この項では、OVPI Sybase データベースを raw パーティションにインストールする場合 (SO および Veritas の raw パーティションがサポートされている) と、UNIX ファイルシステムにインストールする場合の違いについて説明します。

OVPI をインストールすると、デフォルトではデータベースは UNIX ファイルシステムにインストールされます。

### • raw パーティションの場合

raw パーティションを使用すると、実質的にデータベースはそのサーバーに保存されている他の情報から分割または隔離されます。このようなパーティショニングには、パフォーマンス上重要な意味があります。長所は以下のとおりです。

- すべての保存データは、1つの場所に置かれます。このため、データベースが効率的に利用され、処理速度が向上します。
- システムクラッシュが発生した場合も、パーティション化されたデータベースはいくぶん容易に復元することができます。
- 外部からのデータベースへの干渉も、はるかに困難になります。

短所は以下のとおりです。

- **Sybase** を **raw** パーティションにインストールした時のパフォーマンス上の利点が、**OVPI** ユーザーのシステム環境によっては、顕著に現れない場合があります。インストールプロセスがより複雑であり、不必要な場合もあります。
- **Sybase** を **raw** パーティションにインストールする場合は、サーバーの使用可能なディスク領域を多く必要とします。
- 標準の **UNIX** バックアップユーティリティでは **raw** パーティションをバックアップすることはできません。**Sybase** のバックアップユーティリティおよびアーカイブユーティリティを使用して、データベースのコピーを作成する必要があります。

- **UNIX ファイル システムの場合**

**UNIX** ファイルシステムを使用すると、データベースが他のアプリケーションに取り囲まれている場合や、他のアプリケーションと混在している場合があります。長所は以下のとおりです。

- **Sybase** の **UNIX** ファイルシステムへのインストールは、**OVPI** のインストールの一環として実行できる簡単な作業です。
- **Sybase** は、ピーク効率の **80%** 以上で動作できます。一部のデータベース管理タスクも、容易に実行できます。
- **Sybase** のインストールでは、自ら使用するディスク領域が自動的に予約されるため、多くの場合、物理的なパーティションを作成する必要がありません。

短所は以下のとおりです。

- **Sybase** コンポーネントはハードディスク上で分散されます。したがって、往々にして **Sybase** は必要な情報を見つけるために、ディスクの複数の場所を検索する必要があります。このため処理速度が多少低下します。
- **Sybase** はその他のアプリケーションから物理的に隔離されないため、外部からの影響をいくらか受けやすくなります。

最終的に、どの方法を採用して **Sybase** をインストールすべきかについて、一概にはお勧めいたしかねます。この問題はケースバイケースで対応する必要があり、**HP** のシステムエンジニアに相談されることをお勧めします。

## raw パーティションと UNIX ファイルシステムとの比較

UNIX システムの raw パーティションは、ファイルシステムが作成されていない部分のディスクを指します。Sybase Adaptive Server ではデータベースデバイス用に UNIX ファイルを使用することも可能ですが、Sybase では raw パーティションを使用することをお勧めしています。

ほとんどの UNIX システムではディスク I/O にバッファキャッシュを利用します。ディスクへの書き込みはいったんバッファに保存され、すぐにディスクには書き込まれません。Sybase Adaptive Server がトランザクションを完了し、結果を UNIX ファイルに送信すると、UNIX バッファキャッシュがディスクに書き込まれていなくても、トランザクションは完了したものとみなされます。このバッファキャッシュが書き込まれる前にシステムがクラッシュした場合、データは失われてしまいます。このような場合、Sybase Adaptive Server にはディスクへの書き込みが最終的に失敗したことを認識する手段がないため、トランザクションはロールバックされません。さらに、一部の UNIX オペレーティングシステムでは部分的な書き込みも実行します。その場合、システムがクラッシュすると、Sybase デバイスは破損します。

Sybase デバイスに raw パーティションを使用した場合、Sybase Adaptive Server は UNIX のバッファ機構を利用せずに、独自の I/O 要求を処理することができます。この方法では、Sybase Adaptive Server は、システムクラッシュが発生した場合にトランザクションのどの部分が完了し、どの部分が失敗したかを正確に認識することができます。

## raw パーティションの設定

OVPI データベース、トランザクションログ、および tempdb (raw パーティションに tempdb をインストールする場合) をインストールする前に、必要な raw パーティションを設定しておく必要があります。

Sybase 実行可能プログラム、ライブラリ、インストールファイル、および構成ファイルはファイルシステムに配置します。OVPI 実行可能プログラム、レポート、デモデータベース、文書もファイルシステムに配置します。

OVPI データベース、トランザクションログ、および tempdb のサイズに合わせて、必要な数の raw パーティションを設定できます。

データベースを設定する際のガイドラインは以下のとおりです。

- **tempdb** を **raw** パーティションまたはファイルシステム上にインストールします。HP では、**tempdb** をファイルシステムにインストールすることをお勧めします。**tempdb** のサイズは、**OVPI** データベースのサイズの **50%** にします。
- **OVPI** データベースを **raw** パーティションまたはファイルシステム上にインストールします。
- トランザクションログを **OVPI** データベースと同じように、**raw** パーティションまたはファイルシステム上にインストールします。トランザクションログを **raw** パーティションにインストールする場合は、**OVPI** データベースとは別のディスクスピンドルに配置してください。トランザクションログのサイズは、**OVPI** データベースのサイズの **50%** にします。



Sybase データベースのどのコンポーネントも、パーティションマップを含む **raw** パーティションにインストールしないでください。一般的に、この **raw** パーティションは第 1 シリンダの第 1 セクターにあります。

Sybase で **raw** パーティションを使用している場合は、製品 DVD (**\$DVDROM/Data/sybase/sybase\_one\_off\_patch**) にある **raw** パーティションパッチを Sybase からインストールします (1 回限り)。この例の **\$DVDROM** は、DVD マウントポイントです。

## Solaris の raw パーティションの設定

パーティション **c0t3d0s3** および **c0t3d0s4** を以下のように仮定します。

- **c0t3d0s3**: **OVPI** データベース (10GB)
- **c0t3d0s4**: **tempdb** (5GB)

次の手順は必要に応じて、**OVPI** データベース、トランザクションログ、または **tempdb** (**raw** パーティションに **tempdb** をインストールする場合) のいずれかの構成に使用する **raw** パーティションごとに、パーティション名とサイズを置き換えて繰り返します。

## コマンド行インタフェースの使用

- 1 **format** コマンドを実行します。
  - a コマンドプロンプトから以下のように入力します。

**format**
  - b **raw** パーティションを作成するディスクの番号を選択します。コマンドの一覧が表示されます。
- 2 パーティションスライスを割り当てます。
  - a 次のコマンドを入力します。

**partition**

コマンドの一覧が表示されます。
  - b 次のコマンドを入力します。

**print**

選択されたディスクのスライスの表が表示されます。
  - c 使用可能なスライスの番号を選択します。
  - d 入力が求められたら有効なタグを入力します(たとえば、**home**)。
  - e デフォルトのパーミッションを維持します(**wm**)。
  - f 終了シリンダー値で最も大きな値(バックアップ以外)に **1** を追加した値を開始シリンダーとして入力します。
  - g パーティションサイズを入力します(たとえば、**20GB** なら **20g**、**35MB** なら **35m**)。
  - h このディスクに作成する各パーティションで、手順 **b** ~ 手順 **g** を繰り返します。
- 3 ディスクにラベルを付けます。
  - a 最後のパーティションの割り当てが終了したら、次のコマンドを入力します。

**label**
  - b プロンプトに **y** と入力します。
  - c プロンプトに **quit** と入力します。

- d 次のコマンドを入力します (例の第 2 パーティションに対して)。  
**label**
- e プロンプトに **y** と入力します。
- f プロンプトに **quit** と入力します。

- 4 必要に応じて、別のディスクに **raw** パーティションを作成します。

タスク 1～タスク 3 を繰り返して別のディスクに **raw** パーティションを作成します。

- 5 文字ブロックを変更します。

各ディスクについて、文字ブロックも変更する必要があります。グループ ID を変更するには (例のパーティションを使用)、次のように入力します。

```
chgrp sybase /dev/dsk/c0t3d0s3
chgrp sybase /dev/rdisk/c0t3d0s3
chgrp -h sybase /dev/dsk/c0t3d0s3
chgrp -h sybase /dev/rdisk/c0t3d0s3
chgrp sybase /dev/dsk/c0t3d0s4
chgrp sybase /dev/rdisk/c0t3d0s4
chgrp -h sybase /dev/dsk/c0t3d0s4
chgrp -h sybase /dev/rdisk/c0t3d0s4
```

## HP-UX の raw パーティションの設定

パーティション lv01 および lv02 を以下のように仮定します。

- lv01: OVPI データベース (10GB)
- lv02: tempdb (5GB)

次の手順は必要に応じて、OVPI データベース、トランザクションログ、または tempdb (raw パーティションに tempdb をインストールする場合) のいずれかの構成に使用する raw パーティションごとに、パーティション名とサイズを置き換えて繰り返します。

raw パーティションの設定は、SAM ユーティリティまたはコマンド行を使用して行います。

## SAM ユーティリティの使用

- 1 ログオンして SAM ユーティリティを起動します。
  - a root としてログオンします。
  - b SAM ユーティリティを起動します (通常は /usr/sbin ディレクトリから)。[System Administration Manager] ウィンドウが開きます。
  - c **[Disks and File Systems]** アイコンをダブルクリックします。[Disk and File Systems] ダイアログボックスが開きます。
- 2 ボリュームグループを作成するかどうかを決定します。

ボリュームグループを作成する必要がない場合は、以下を実行します。

  - a **[Logical Volume]** アイコンをダブルクリックします。
  - b [Actions] メニューから **[Create]** を選択します。[Create New Logical Volumes] ウィンドウが開きます。
  - c **[Select Volume Group]** をクリックします。
  - d ポップアップボックスからボリュームグループを選択します。
  - e **[OK]** をクリックします。
  - f **[Define New Logical Volume(s)]** をクリックします。

ボリュームグループを作成する必要がある場合は、以下を実行します。

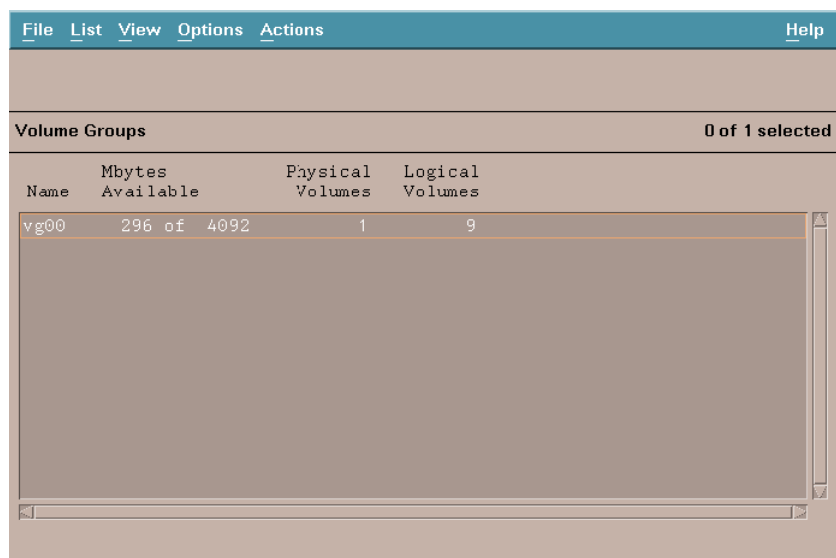
  - a **[Volume Groups]** アイコンをダブルクリックします。



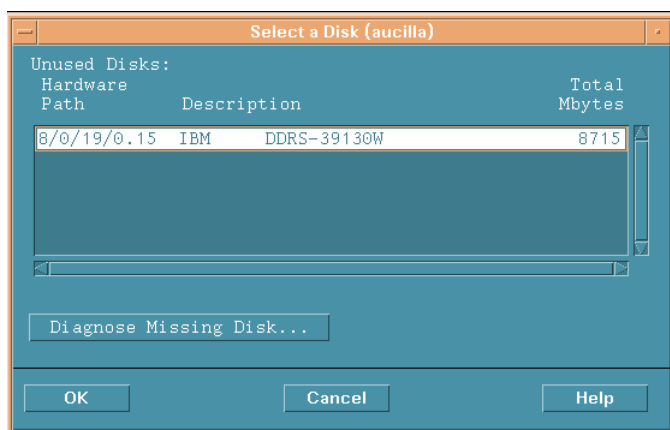
以下の手順に示されているインタフェースは、使用している HP-UX のバージョンによって多少異なります。



[Disks and File Systems] ダイアログボックスにハードウェアのスキャンニングメッセージが表示され、次のウィンドウが開きます(この例では、既存のボリュームグループが一覧表示されています)。

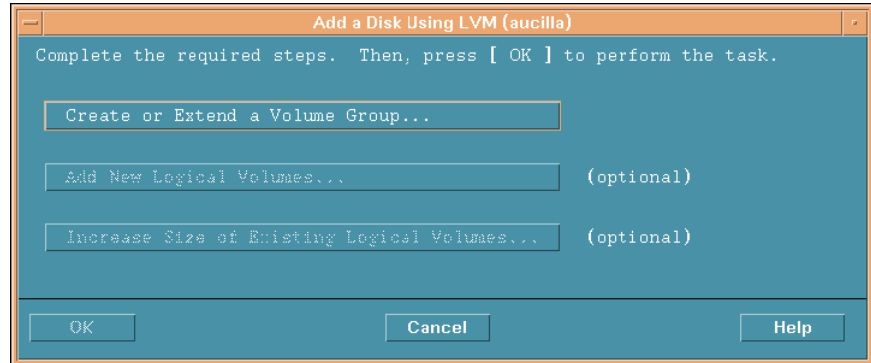


- b **[Actions]** メニューから **[Create]** または **[Extend]** を選択します。 **[Select a Disk (aucilla)]** ダイアログボックスが開きます。

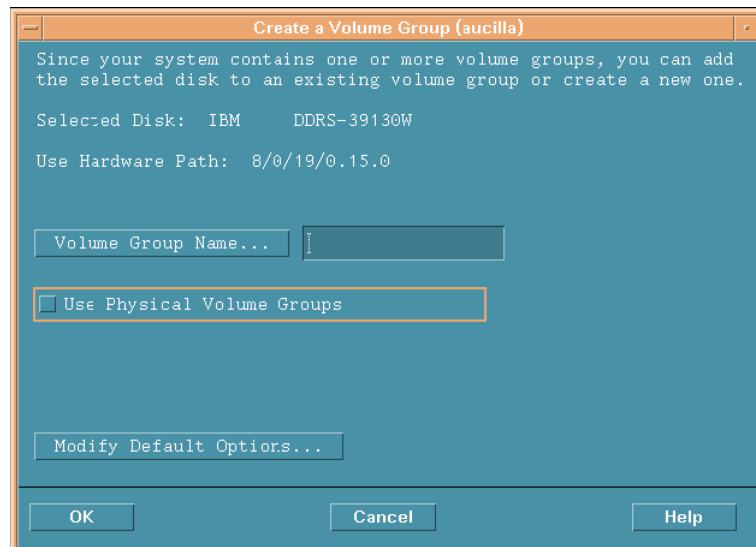


このウィンドウでは、ディスクのハードウェアパス、SCSI チェインにおけるディスクの位置、MB 単位でのディスクの合計容量が示されます。

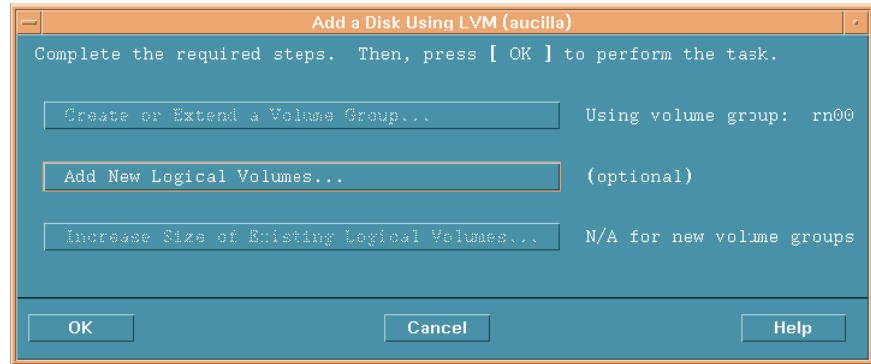
- c **[OK]** をクリックします。**[Add a Disk Using LVM (aucilla)]** ダイアログボックスが開きます (LVM は Logical Volume Manager です)。



- d **[Create or Extend a Volume Group]** をクリックします。**[Create a Volume Group (aucilla)]** ダイアログボックスが開きます。



- e [Volume Group Name] ボックスにボリュームグループの名前を入力します(この例では **rn00**)。
- f **[OK]** をクリックします。[Add a Disk Using LVM (aucilla)] ダイアログボックスが開きます。



- g **[Add New Logical Volumes]** ボタンを選択します。[Create New Logical Volumes (aucilla)] ダイアログボックスが開きます。

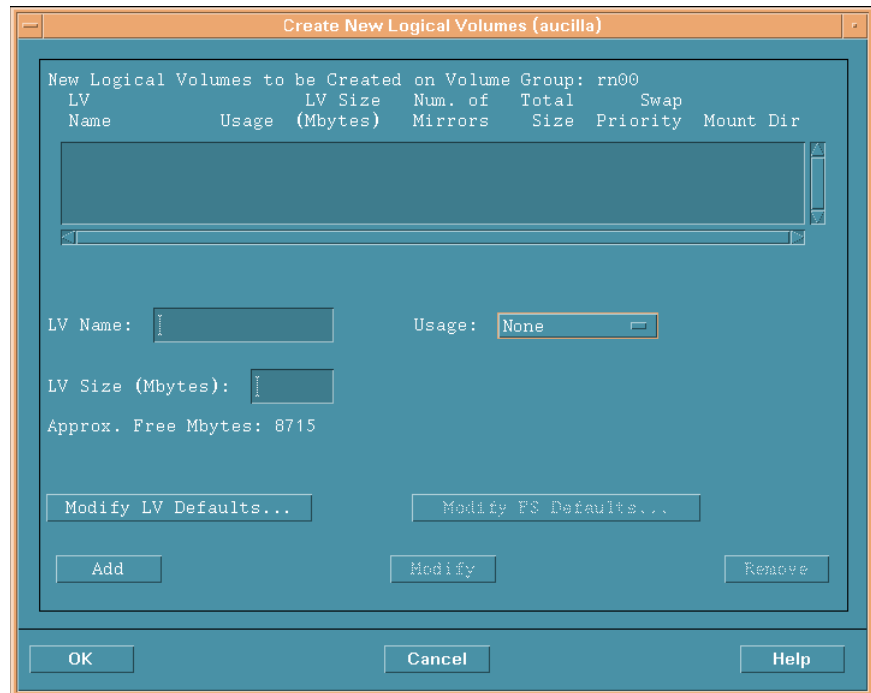
▶ この手順の中では **[OK]** ボタンをクリックしないでください。このボタンをクリックすると、この手順では必要のない物理ボリュームの作成タスクが開始されます。

3 新規論理ボリュームを作成します。

- a [LV Name] ボックスに論理ボリュームの名前を入力します(この例では **lv01**)。
- b [LV Size (Mbytes)] ボックスに論理ボリュームのサイズを入力します(この例では **10240**)。

▶ ボリュームグループの物理的なエクステントサイズは、**4** の倍数でなければなりません。[LV Size (Mbytes)] ボックスに **4** の倍数以外の値を入力すると、最も近い **4** の倍数に切り上げることを通知するメッセージが表示されます。メッセージを閉じて続行するには、**[OK]** をクリックします。

- c [Usage] リストから **[None]** を選択します。

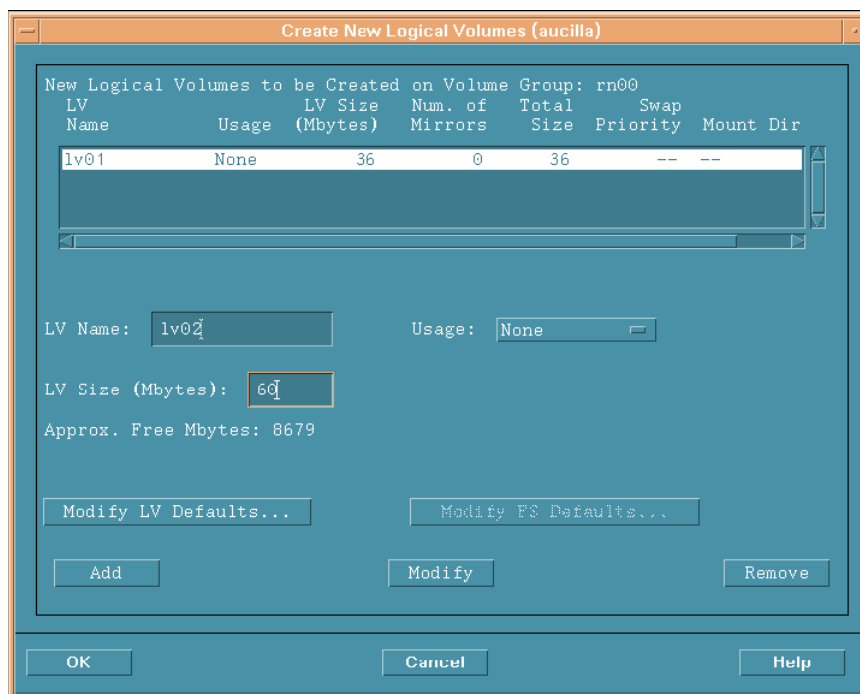


- d **[Add]** をクリックします。パラメータがダイアログボックスに表示されます。

[Create New Logical Volumes (aucilla)] ダイアログボックスに戻ると、新しく作成した論理ボリュームが一覧表示されます。

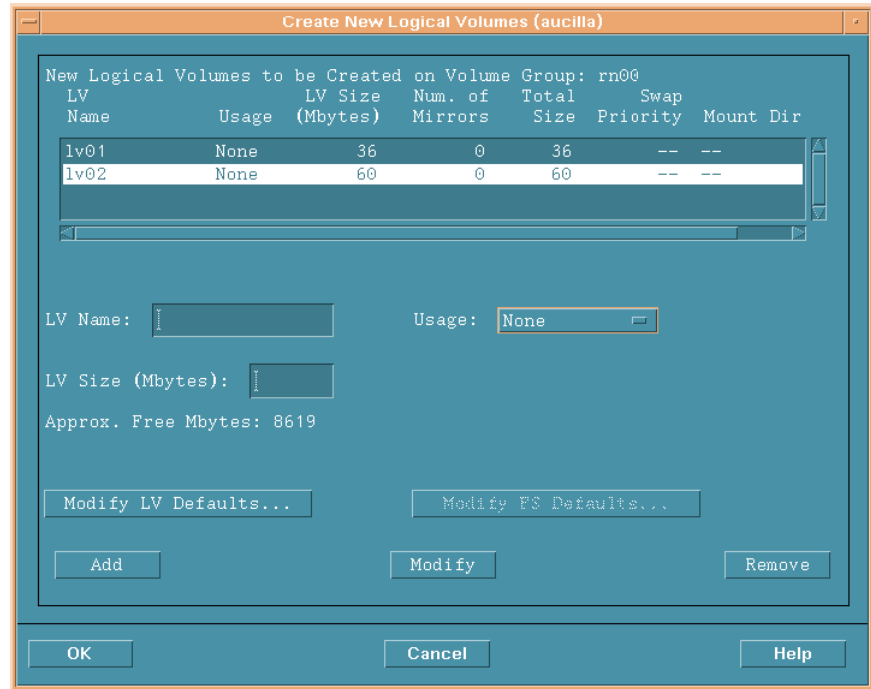
- e [LV Name] ボックスに論理ボリュームの名前を入力します (この例では **lv02**)。

- f [LV Size (Mbytes)] ボックスに論理ボリュームのサイズを入力します (この例では **5120**)。[Create New Logical Volumes (aucilla)] ダイアログボックスが以下のように表示されます。



- g [Usage] ボックスが [None] に設定されていることを確認し、[Add] をクリックします。

この手順で作成された 2 つの論理ボリュームが表示されます。



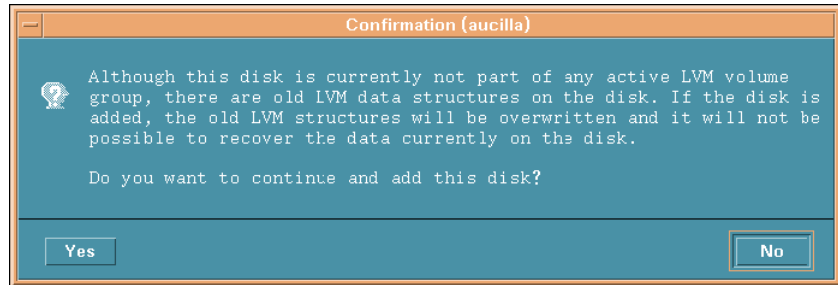
- h 各 raw パーティションで手順 e ~ 手順 g を繰り返します。各パーティションの名前とサイズを調整します。

実際の手順で作成したすべての論理ボリュームが一覧表示されます。

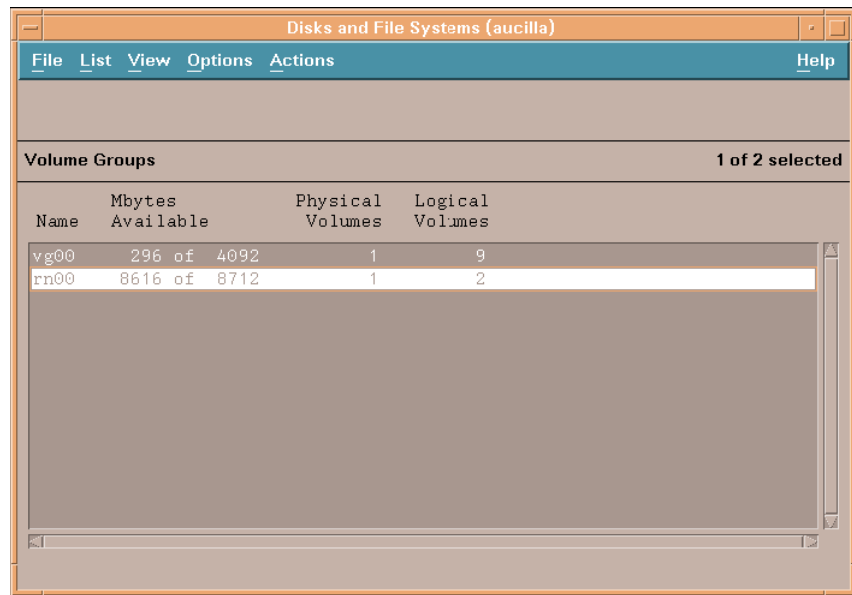
- i [OK] をクリックします。

[Add a Disk Using LVM (aucilla)] ダイアログボックスに戻ります。

- 4 論理ボリュームを追加します。
  - a **[OK]** をクリックしてさらに論理ボリュームを追加します。
  - b 以下の確認ダイアログボックスが表示されたら、**[Yes]** をクリックして新しい論理ボリュームの作成プロセスを続行します。



[Disks and File Systems (aucilla)] ダイアログボックスが開きます。新規に作成された論理ボリュームが表示されます。



## コマンド行の使用

1 ログオンします。

a **root** としてログオンします。

b 論理ボリュームを作成する前に、**ioscan** コマンドを実行してシステムに接続されているディスクとそのデバイスファイル名を決定します。

```
ioscan -f -n
```

2 各ディスクを初期化します。

a **pvcreate** コマンドを使用して各ディスクを **LVM** として初期化します。たとえば、次のように入力します。

```
pvcreate /dev/rdisk/c0t15d0
```

▶ **pvcreate** コマンドを使用すると物理ボリュームの現在のデータはすべて失われ、ディスクに対してキャラクタ型デバイスファイルを使用します。初期化されたディスクは物理ボリュームと呼ばれます。

b ボリュームグループのディレクトリを作成します。たとえば、次のように入力します。

```
mkdir /dev/rn00
```

c **mknod** コマンドを使用して上記のディレクトリに **group** という名前のデバイスファイルを作成します。基本の構文は次のとおりです。

```
mknod /dev/rn00/group c 64 0x010000
```

デバイスファイル名の後の「c」は、グループがキャラクタ型デバイスファイルであることを指定しています。64 はグループデバイスファイルのメジャー番号であり、常に 64 です。0x010000 (0x020000 など) はグループファイルの 16 進数でのメジャー番号です。特定の 01、02 などは、すべてのボリュームグループを通じて一意の番号でなければなりません。

**pvdisplay** コマンドを使用してドライブに関する情報を取得します。たとえば、次のように入力します。

```
pvdisplay /dev/dsk/c0t15d0
```



- 3 ボリュームグループを作成します。

`vgcreate` コマンドを使用して、指定した各物理ボリュームを含むボリュームグループを作成します。たとえば、次のように入力します。

```
vgcreate /dev/rn00 /dev/dsk/c0t15d0
```

このコマンドを実行すると、以下のメッセージが表示されます。

```
Increased the number of physical extents per physical volume  
to 2178  
Volume group "dev/rn00" has been successfully created
```

- 4 論理ボリュームを作成します。

ボリュームグループを作成したら、`lvcreate` コマンドを使用して論理ボリュームを作成します。たとえば、次のように入力します。

```
lvcreate /dev/rn00
```

LVM は論理ボリュームを作成する際、ディレクトリ `/dev/rn00/lvol1` にブロックデバイスファイルとキャラクタ型デバイスファイルを作成します。

このコマンドを実行すると、以下のメッセージが表示されます。

```
/dev/rn00/lvol1 has been successfully created with character  
device "/dev/rn00/rlvol1".
```

- 5 作成する各 `raw` パーティションでタスク 2 ～タスク 4 を繰り返します。

- 6 ディスク容量を割り当てます。

以下のコマンドは、特定の論理ボリュームのディスク容量を割り当てる（拡張）方法を示しています。

OVPI データベースの場合：

```
lvextend -L 36 /dev/rn00/lvol1
```

一時データベースの場合：

```
lvextend -L 60 /dev/rn00/lvol2
```



この手順全体を必要に応じて、OVPI データベース、トランザクションログ、または `tempdb` (`raw` パーティションに `tempdb` をインストールする場合) のいずれかの構成に使用する `raw` パーティションごとに、パーティション名とサイズを置き換えて繰り返します。

# Sybase のインストールパラメータ値

## 必須

オペレーティングシステムの共有メモリーのパラメータを次のように調整する必要があります。

- HP-UX の場合

共有メモリーを 2147483648 (2GB) に設定します。System Administration Manager (SAM) を使用します。

非同期 I/O を最適化し、共有メモリーのページングを防止するには、Adaptive Server をインストールする前に MLOCK を許可する必要があります。

グループに MLOCK を許可するには、次のように入力します。

```
/etc/privgrp add mlock <グループ名>
```

または

```
/etc/setprivgrp <グループ名> MLOCK
```

- Solaris の場合

オペレーティングシステムの共有メモリーの値を調整するには、オペレーティングシステムの設定ファイル (/etc/system) に次の行を追加します。

```
set shmsys:shminfo_shmmax = 2147483648
```

- Linux の場合

sysctl(8) メソッドを使用して、オペレーティングシステムの共有メモリーのパラメータを調整します。

現在の共有メモリーのサイズを確認するには、次のように入力します。

```
# /sbin/sysctl kernel.shmmax
```

共有メモリーのサイズを調整するには、次のように入力します。

```
# /sbin/sysctl -w kernel.shmmax=2147483648
```

システムを起動するごとにこの値が適用されるようにするには、上記の行を /etc/rc.d/rc.local ファイルに追加します。SuSE システムの場合は、追加先のファイルは /etc/init.d/boot.local です。

Linux RHEL Update 3.0 およびそれ以降では、複数のエンジンで稼動する Adaptive Server version 15.0 は、セキュリティ機能の Exec-Shield を無効にしておく必要があります。

Exec-Shield を無効にするには、次の手順を実行します。

— /etc/sysctl.conf に次の行を追加します。

```
kernel.exec-shield=0
kernel.exec-shield-randomize=0
```

— SU の場合は、アクションを有効にするために次のように入力します。

```
/sbin/sysctl -P
```

詳細は、次の Red Hat の web サイトを参照してください。

[http://www.redhat.com/f/pdf/rhel/WHP0006US\\_Execshield.pdf](http://www.redhat.com/f/pdf/rhel/WHP0006US_Execshield.pdf)

## オプション

次の表はデフォルトのパラメータですが、変更することができます。特に記載のないかぎり、パラメータはスタンドアロンインストールと分散インストールの両方に適用されます。

パラメータと説明	デフォルト値 Windows システム	デフォルト値 UNIX システム
<b>Sybase</b> ディレクトリ Sybase のインストール先ディレクトリです。	C:\Sybase	/usr/Sybase
<b>Sybase</b> のホスト名 Sybase がインストールされているシステムです。		
<b>Sybase</b> サーバー名 (DSQUERY) Sybase サーバー名です。	<HOST_NAME_SYBASE> Sybase サーバーの名前です。	<HOST_NAME_SYBASE> Sybase サーバーの名前です。

パラメータと説明	デフォルト値 Windows システム	デフォルト値 UNIX システム
<b>Sybase TCP/IP ポート番号</b> Sybase が他のシステム上のクライアントおよびサーバーと通信するために使用する TCP/IP ポート番号です。	5000	2052
<b>データベースデバイス</b> OVPI がデータベースデバイスファイルを作成するディレクトリです (raw デバイスを使用する場合は、デバイスファイルは作成されません)。	<i>Sybase_directory</i> \dbfiles 50%	<i>Sybase_directory</i> /dbfiles 50%
<b>データベースのサイズ</b> データベースデバイスファイルのサイズです。	800MB	800MB
<b>トランザクションログ / データベース使用率</b>	<i>Sybase_directory</i> \dbfiles 50%	<i>Sybase_directory</i> /dbfiles 50%
<b>一時領域 / データベース使用率</b>	<i>Sybase_directory</i> \dbfiles (Windows) 50%	<i>Sybase_directory</i> /dbfiles (UNIX) 50%

# UNIX システムへの Sybase 15.0.2 のインストール

以下の手順を順番に実行します。

## タスク 1: ログオンとセットアッププログラムの起動

- a ローカルシステムに **root** としてログオンします。
- b OVPI インストール DVD を DVD-ROM ドライブに挿入します。

### UNIX システムの場合のみ

次の表に示す指示に従って DVD をマウントします。

オペレーティングシステム	コマンド
Solaris	DVD を DVD-ROM ドライブに挿入すると、DVD は自動的にマウントされ、ファイルマネージャウィンドウが開きます。ウィンドウが開かない場合は、 <b>root</b> としてログインし、次のように入力します。 <b>mkdir /dvdrom</b> <b>mount -r /dev/dsk/dvd_devicename /dvdrom</b> この例では、 <i>dvd_devicename</i> は DVD-ROM デバイスの名前です。
HP-UX	<b>SAM</b> ユーティリティを使用して DVD-ROM をマウントするか、または次のコマンドを入力します。 <b>mkdir /dvdrom</b> <b>mount /dev/dsk/dvd_devicename /dvdrom</b> この例では、 <i>dvd_devicename</i> は DVD-ROM デバイスの名前です。
Red Hat Linux	DVD を DVD-ROM ドライブに挿入すると、DVD は自動的にマウントされ、ファイルマネージャウィンドウが開きます。ウィンドウが開かない場合は、 <b>root</b> としてログインし、次のように入力します。 <b>mount -r /dev/dvdrom &lt;mount_directory&gt;</b> この例では、 <i>mount_directory</i> は DVD-ROM の内容が保存されているディレクトリです。

## Solaris システムの場合のみ

- dvd\_label を表示するには、次のコマンドを入力します。

```
ls -l /dvdrom
```

- ディレクトリを変更するには、次のコマンドを入力します。

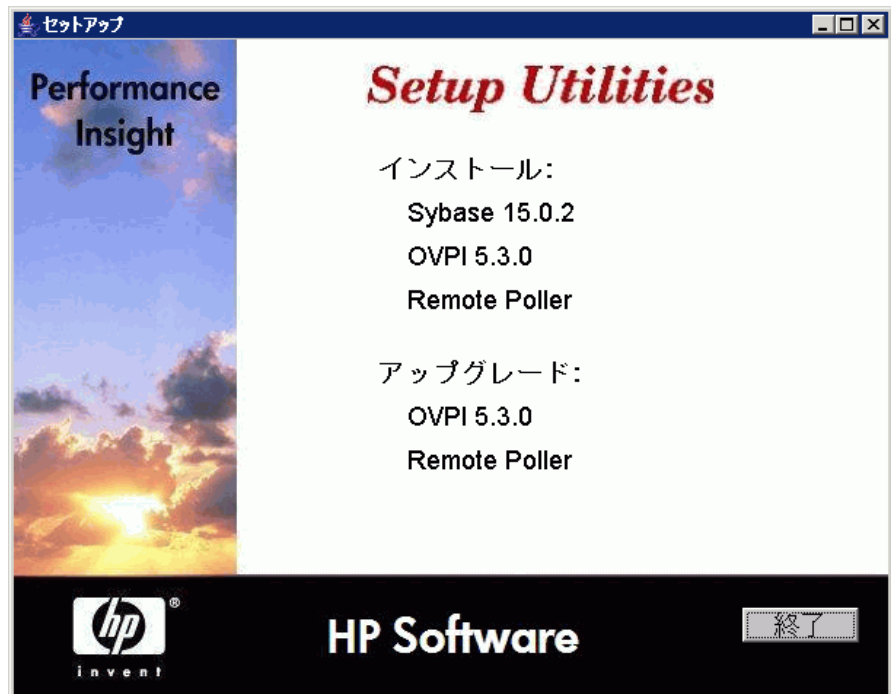
```
cd /dvdrom/dvd_label
```

この例では、*dvd\_label* は DVD 名です。

- c セットアッププログラムを検索し、以下のコマンドを入力してインストールプログラムを起動します。

```
./setup
```

[セットアップ] ウィンドウが開きます。



- d ウィンドウの [インストール] セクションから [Sybase 15.0.2] を選択します。

- e [ ようこそ ] ウィンドウを確認し、[ 次へ ] をクリックして続行します。  
[ Sybase の設定 ] ウィンドウが開きます。

## タスク 2: Sybase の設定に必要な情報の指定

- a 次のパラメータをデフォルト値のままにするか、新しい値を入力します。
  - [ インストールパス ]: デフォルトのディレクトリ (/usr/Sybase) のままにするか、または Sybase ソフトウェアのインストール先ディレクトリを指定します。インストール先ディレクトリは、NFS マウントディレクトリ、UNIX ソフトリンク、UNIX ハードリンクドライブ、Windows マップドライブのいずれでも構いません。
    - デフォルトのインストール先ディレクトリのままにするか、別のディレクトリを指定します。パス名には、スペースを入れることはできません。
    - インストール先ディレクトリが存在しない場合は、インストールプログラムによって作成されます。
    - インストール先ディレクトリがすでに存在していて、データが入っている場合は、そのディレクトリが空でないことを警告するメッセージが表示されます。
    - インストールプログラムがアクセスできないファイルシステム上のインストール先ディレクトリを指定した場合は、警告メッセージが表示されます。有効なディレクトリを指定するまで、インストールは続行できません。
  - [ サーバー名 (DSQUERY) ]: Sybase SQL Server の名前を入力します。

クライアントアプリケーションがデフォルトで情報を検索する Sybase SQL Server です。デフォルトのサーバー名はシステムのホスト名である `hostname_sybase` になります。



Sybase SQL Server の名前を入力するときは必ず大文字を使用し、有効なサーバー識別名であることを確認してください。サーバー名は最大 30 文字までです。最初の文字はアルファベットにする必要があります。2 字目以降は、文字、数字、アンダースコアを使用できます。スペースやハイフンは使用できません。

- **[TCP/IP ポート番号]:** Sybase サーバーのポート番号を入力します。

デフォルトのポート番号は **2052** です。Sybase は割り当てられた TCP/IP ポートを使用して、他のシステム上の Sybase クライアントおよびサーバーと通信します。Sybase は、リモートシステムの IP アドレスと、そのシステム上で Sybase が必要とするアプリケーションの TCP Port との組み合わせで、他のシステムを識別します。この情報は Sybase ディレクトリのインタフェースファイルに格納されています。Sybase が使用する TCP ポートは **1** つです。ポート番号は、他のアプリケーションによって使われていない **1024** より大きい番号になる場合があります。インストールウィザードでは、Sybase 用にここで入力したポート番号が使用されます。

TCP Port を変更するときは、**/etc/services** ファイルを調べて、他のアプリケーションによってそのポート番号またはその次のポート番号が使用されていないことを確認します。

- b 必要に応じて **[詳細]** をクリックすると、**[OVPI 詳細設定]** ウィンドウが表示されます。このウィンドウで以下を実行します。

- 一般的なパラメータの変更 (**[全般]** タブ)

**[全般]** タブには、**Sybase error.log** ファイルの位置を変更するためのパラメータがあります。

**Sybase** オペレーティングシステムアカウントの作成または変更 (**[ユーザー]** タブ)

**sybase** という名称のオペレーティングシステムアカウントおよびグループを確認します。この **sybase** は、OVPI が稼動する環境を保存するときに使用します。

オペレーティングシステムおよびグループアカウントがすでに存在するかどうかによって、ウィンドウで別の情報が要求されます。次の **2** つのアクションを確認してください。

オペレーティングシステムアカウントおよびグループが存在しない場合は、**[新規ユーザーアカウントを作成]** オプションを選択して次の情報を入力します。

- **[ユーザー名]:** ユーザーアカウントの名前。
- **[グループ名]:** グループアカウントの名前。



- **【説明】:** ユーザーアカウントおよびグループアカウントについての文字による説明。

オペレーティングシステムアカウントおよびグループが存在する場合は、既存のユーザーアカウントを使用するか新しいアカウントを再作成します。

- マスターデバイスの設定の変更 ([ マスターデバイス ] タブ )

このウィンドウを使用してデバイスに関する情報を提供します。オプションは以下のとおりです。

- **【デバイス名】:** マスターデバイスの名前を入力します。
- **【デバイスファイル】:** デバイスファイルの場所と名前を入力します。
- **【デバイスのサイズ (MB)】:** サイズを **MB** 単位で指定します。

- プロシージャデバイスの設定の変更 ([ プロシージャデバイス ] タブ )

このウィンドウを使用してプロシージャデバイスに関する情報を提供します。オプションは以下のとおりです。

- **【デバイス名】:** プロシージャデバイスの名前を入力します。
- **【デバイスファイル】:** デバイスファイルの場所と名前を入力します。
- **【デバイスのサイズ (MB)】:** サイズを **MB** 単位で指定します。

**重要 :** OVPI インストーラにより作成されたデフォルトの場所に **master.dat** ファイルと **procedure.dat** ファイルを格納することをお勧めします。

- c **【適用】** をクリックし、**【OK】** をクリックすると、**【Sybase の設定】** ウィンドウに戻ります。
- d **【次へ】** をクリックします。

インストールプログラムで次のいずれかの状況が検出された場合は、メッセージが表示されます。

- データベースが存在する場合 : インストールを続行すると、現在のデータベースが上書きされます。**【はい】** をクリックすると、既存のデータベースが上書きされ、インストールが続行されます。

- ディスク領域が不足している場合：システムに十分なディスク領域がない場合は、インストールが失敗する可能性が高くなります。メッセージを閉じて続行するには **[OK]** をクリックし、[概要] ウィンドウで **[キャンセル]** をクリックします。必要なディスク領域を解放してインストールをやり直してください。

## 7 インストール情報の確認とインストール

[概要] ウィンドウで、インストールの選択内容を確認します。

- a 必要があれば、**[戻る]** をクリックして前のウィンドウに戻り、変更します。変更が完了したら、**[次へ]** をクリックして [概要] ウィンドウまで戻ります。
- b **[インストール]** をクリックして続行します。[インストールの進捗状況] ウィンドウが開きます。

## 8 インストールの終了

[インストールの進捗状況] ウィンドウでインストールの進捗状況を確認できます。インストールプロセスが完了すると、インストールが成功したかどうかを示す情報が表示されます。

- Sybase のインストールが正常に終了した場合は、**[完了]** をクリックします。
- Sybase のインストールが失敗した場合は、次の手順を実行します。
  - [インストールの進捗状況] ウィンドウの一番下にある **[詳細]** をクリックし、詳細情報を確認します。
  - サポートに問い合わせます (4 ページの「サポート」を参照してください)。

# WindowsシステムへのSybase 15.0.2のインストール

Sybase は、OVPI サーバーとして動作するシステムにインストールする必要があります。

Windows オペレーティングシステムをインストールすると、ハードディスクに十分な空き容量があるという前提で、インストールプロセスによって推奨サイズ (システムに搭載されている RAM のおよそ 1.5 倍から 2 倍の大きさ) でページングファイルが作成されます。Sybase Adaptive Server には、推奨サイズかそれ以上の Windows 仮想メモリーページングファイルが必要です。その大きさのページングファイルが確保できない場合、Adaptive Server は起動することができず、また、何が原因で起動できなかったのかも表示しません。ページングファイルおよびそのサイズの変更方法の詳細については、Windows オペレーティングシステムのマニュアルを参照してください。

- 1 ログオンしてセットアッププログラムを起動します。
  - a 管理者アカウントを使用してローカルシステムにログオンします。
  - b OVPI インストール DVD を DVD-ROM ドライブに挿入します。OVPI インストール DVD を挿入すると、自動的にセットアッププログラムが起動します。自動的に起動しない場合は、DVD の最上位のフォルダーにある `setup.exe` をダブルクリックします。[セットアップ] ウィンドウが開きます。
  - c **[Sybase 15.0.2]** をクリックして Sybase Adaptive Server をインストールします。
  - d [ようこそ] ウィンドウを確認し、**[次へ]** をクリックして続行します。**[Sybase の設定]** ウィンドウが開きます。
- 2 Sybase の設定に必要な情報を指定します。
  - a 次のパラメータをデフォルト値のままにするか、新しい値を入力します。

**[インストールパス]:** デフォルトのディレクトリ (**C:\Sybase**) のままにするか、または Sybase ソフトウェアのインストール先ディレクトリを指定します。

    - デフォルトのインストール先ディレクトリのままにするか、別のディレクトリを指定します。パス名には、スペースを入れることはできません。

- インストール先ディレクトリが存在しない場合は、インストールプログラムによって作成されます。
- インストール先ディレクトリがすでに存在していて、データが入っている場合は、そのディレクトリが空でないことを警告するメッセージが表示されます。
- インストールプログラムがアクセスできないファイルシステム上のインストール先ディレクトリを指定した場合は、警告メッセージが表示されます。有効なディレクトリを指定するまで、インストールは続行できません。

[ **サーバー名 (DSQUERY)** ]: Sybase SQL Server の名前を入力します。

クライアントアプリケーションがデフォルトで情報を検索する Sybase SQL Server です。デフォルトのサーバー名は <ホスト名> です。



Sybase SQL Server の名前を入力するときは必ず大文字を使用し、有効なサーバー識別名であることを確認してください。サーバー名は最大 30 文字までです。最初の文字はアルファベットにする必要があります。2 字目以降は、文字、数字、アンダースコアを使用できます。スペースやハイフンは使用できません。

[ **TCP/IP ポート番号** ]: Sybase サーバーのポート番号を入力します。

デフォルトのポート番号は 5000 です。Sybase は割り当てられた TCP/IP ポートを使用して、他のシステム上の Sybase クライアントおよびサーバーと通信します。Sybase は、リモートシステムの IP アドレスと、そのシステム上で Sybase が必要とするアプリケーションの TCP Port との組み合わせで、他のシステムを識別します。この情報は Sybase ディレクトリのインタフェースファイルに格納されています。Sybase が使用する TCP ポートは 1 つです。ポート番号は、他のアプリケーションによって使われていない 1024 より大きい番号になる場合があります。インストールウィザードでは、Sybase 用にここで入力したポート番号が使用されます。

TCP Port を変更するときは、install\_dir\System32\Drivers\Etc\services.txt ファイルを調べて、他のアプリケーションによってそのポート番号またはその次のポート番号が使用されていないことを確認します。

- b 必要に応じて **[詳細]** をクリックすると、**[OVPI 詳細設定]** ウィンドウが表示されます。このウィンドウで以下を実行します。
- **[全般]** タブで全般的なパラメータを変更します。**[全般]** タブには、**Sybase error.log** ファイルの位置を変更するためのパラメータがあります。
  - **[マスターデバイス]** タブでマスターデバイスの設定を変更します。オプションは以下のとおりです。
    - **[デバイス名]**: マスターデバイスの名前を入力します。
    - **[デバイスファイル]**: デバイスファイルの場所と名前を入力します。
    - **[デバイスのサイズ (MB)]**: サイズを **MB** 単位で指定します。
  - **[プロシージャデバイス]** タブでプロシージャデバイスの設定を変更します。オプションは以下のとおりです。
    - **[デバイス名]**: プロシージャデバイスの名前を入力します。
    - **[デバイスファイル]**: デバイスファイルの場所と名前を入力します。
    - **[デバイスのサイズ (MB)]**: サイズを **MB** 単位で指定します。
- c **[適用]** をクリックし、**[OK]** をクリックすると、**[Sybase の設定]** ウィンドウに戻ります。
- d **[次へ]** をクリックします。
- インストールプログラムで次のいずれかの状況が検出された場合は、メッセージが表示されます。
- データベースが存在する場合: インストールを続行すると、現在のデータベースが上書きされます。**[はい]** をクリックすると、既存のデータベースが上書きされ、インストールが続行されます。
  - ディスク領域が不足している場合: システムに十分なディスク領域がない場合は、インストールが失敗する可能性が高くなります。メッセージを閉じて続行するには **[OK]** をクリックし、**[概要]** ウィンドウで **[キャンセル]** をクリックします。必要なディスク領域を解放してインストールをやり直してください。

- 3 [概要] ウィンドウでインストールの選択内容を確認し、インストールします。
  - a 必要があれば、**[戻る]**をクリックして前のウィンドウに戻り、変更します。変更が完了したら、**[次へ]**をクリックして[概要]ウィンドウまで戻ります。
  - b **[インストール]**をクリックして続行します。[インストールの進捗状況]ウィンドウが開きます。
- 4 インストールを終了します。

[インストールの進捗状況] ウィンドウでインストールの進捗状況を確認できます。インストールプロセスが完了すると、インストールが成功したかどうかを示す情報が表示されます。

- Sybase のインストールが正常に終了した場合は、**[完了]**をクリックします。
- Sybase のインストールが失敗した場合は、次の手順を実行します。
  - [インストールの進捗状況] ウィンドウの一番下にある**[詳細]**をクリックし、詳細情報を確認します。
  - サポートに問い合わせます(4 ページの「サポート」を参照してください)。

# インストール後の作業

Sybase のインストールが正常に終了したら、次の手順を実行します。

- 1 コマンド行で次のコマンドを入力して、**Sybase** がシステムで稼動していることを確認します。

```
ps -ef | grep -i sybase
```

- 2 ルートユーザーとしてログオンし、次のコマンドを入力して、**Sybase** を `/dev/async` ディレクトリのオーナーにします。

```
chown sybase /dev/async
```

- 3 **Sybase** の「sa」ユーザーのパスワード（省略可能）は **NULL** になっているため、**isql** にログインしてパスワードを設定します。新しいパスワードを指定します（下の例の `<sa_password>` の部分）。

```
isql -Usa -P  
1> sp_password NULL, <sa_password>  
2> go
```

# Sybase の開始と停止

## Sybase の開始

Sybase のインストールが正常に終了すると、Sybase はシステムで自動的に稼動しているはずですが。稼動していない場合は、OVPI をインストールする前に Sybase を手動で起動する必要があります。

Sybase が稼動していないときは、次のコマンドのいずれかを入力します。

- Solaris の場合  
`/etc/init.d/Sybase start`
- HP-UX の場合  
`/sbin/init.d/Sybase start`
- Red Hat Linux の場合  
`/etc/init.d/Sybase start`
- Windows の場合
  - a [コントロールパネル] ウィンドウから、[管理ツール] アイコンをダブルクリックします。[管理ツール] ウィンドウが開きます。
  - b [サービス] アイコンをダブルクリックします。[サービス] ウィンドウが開きます。
  - c Sybase SQLserver\_*server* を選択します (*server* は Sybase SQL Server の名前)。
  - d サービスが開始していないときは、サービス名をマウスで右クリックし、表示されるショートカットメニューから [開始] を選択します。  
[サービス] ウィンドウを閉じます。



## Sybase の停止

Sybase をシャットダウンする必要がある場合は、以下のコマンドを入力します。

```
isql -Usa -P <sa_password> -S<DSQUERY>  
1>shutdown  
2>go
```

<sa\_password> は、Syabase の sa パスワードを設定した場合のみ必要です。

# Sybase のインストールに失敗したときのトラブルシューティング

Sybase のインストール先ディレクトリにある **error.log** ファイルを使用して、インストールに失敗した原因を判断します。Sybase は、システムが起動したときと Sybase のエラーが発生したときに、その都度このファイルにメッセージを書き込んでいます。エラーログファイル名は次のとおりです。

- UNIX の場合

```
$SYBASE/$SYBASE_ASE/install/servername_SYBASE.log
```

または

```
$SYBASE/$SYBASE_ASE/install/error.log
```

- Windows の場合

```
%SYBASE%/ %SYBASE_ASE%/install/servername_SYBASE.log
```

または

```
%SYBASE%/ %SYBASE_ASE%/install/error.log
```

原因が特定できたら、Sybase のマニュアルを確認します。

## 4 スタンドアロンサーバーへの OVPI のインストール

### OVPI インストールプログラムの起動

OVPI のインストールプログラムには、OVPI コンポーネントとリモートポーターをインストールするためのオプションが用意されています。データベースをアップグレードするには、第 9 章「[Sybase 15.0.2 へのアップグレード](#)」を参照してください。OVPI およびリモートポーターをアップグレードするには、第 10 章「[OVPI 5.30 へのアップグレード](#)」を参照してください。

以下の手順に従ってください。

- 1 ローカルシステムにログオンします。

**Windows システムの場合**

管理者アカウントを使用してログオンします。

**UNIX システムの場合**

root としてログオンします。

## 2 OVPI インストール DVD を DVD-ROM ドライブに挿入します。

### UNIX システムの場合

次の指示に従って DVD をマウントします。

オペレーティングシステム	コマンド
Solaris	<p>DVD を DVD-ROM ドライブに挿入すると、DVD は自動的にマウントされ、ファイルマネージャウィンドウが開きます。ウィンドウが開かない場合は、<b>root</b> としてログインし、次のように入力します。</p> <pre><b>mkdir /dvdrom</b> <b>mount -r /dev/dsk/dvd_devicename /dvdrom</b></pre> <p>この例では、<i>dvd_devicename</i> は DVD-ROM デバイスの名前です。</p>
HP-UX	<p>SAM ユーティリティを使用して DVD-ROM をマウントするか、または次のコマンドを入力します。</p> <pre><b>mkdir /dvdrom</b> <b>mount /dev/dsk/dvd_devicename /dvdrom</b></pre> <p>この例では、<i>dvd_devicename</i> は DVD-ROM デバイスの名前です。</p>
Red Hat Linux	<p>DVD を DVD-ROM ドライブに挿入すると、DVD は自動的にマウントされ、ファイルマネージャウィンドウが開きます。ウィンドウが開かない場合は、<b>root</b> としてログインし、次のように入力します。</p> <pre><b>mount -r /dev/dvdrom &lt;mount_directory&gt;</b></pre> <p>この例では、<i>mount_directory</i> は DVD-ROM の内容が保存されているディレクトリです。</p>

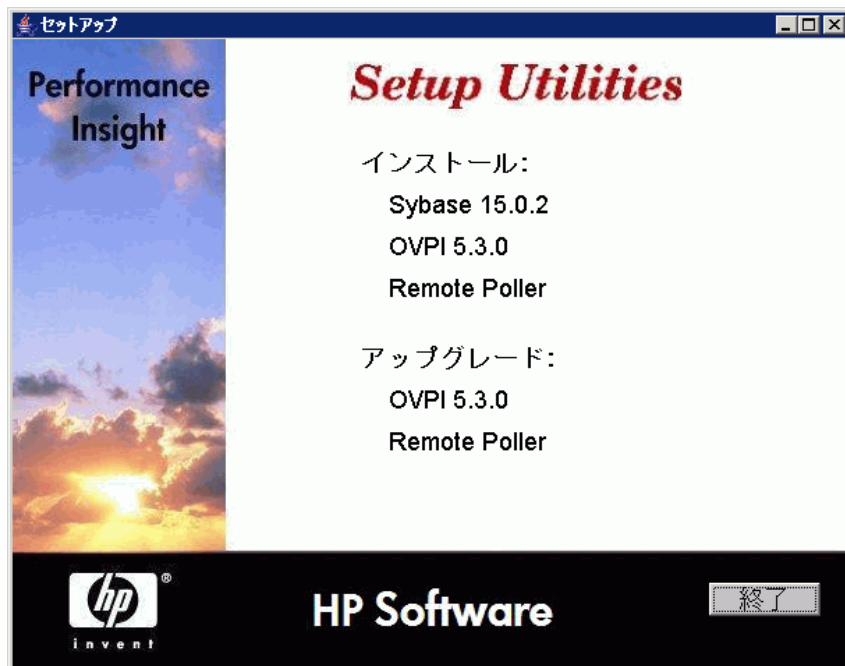
### Solaris システムの場合

- a コマンド **ls -l /dvdrom** を入力して *dvd\_label* を表示します。
- b コマンド **cd /dvdrom/dvd\_label** を入力してディレクトリを変更します。  
この例では、*dvd\_label* は DVD 名です。

- 3 インストールプログラムを起動します。

#### Windows システムの場合

OVPI インストール DVD を挿入します。セットアッププログラムが自動的に起動します。自動的に起動しない場合は、DVD の最上位のフォルダーにある **setup.exe** をダブルクリックします。[セットアップユーティリティ] ウィンドウが開きます。



ウィンドウが正しく表示されない場合は、次の手順に従って Windows フォントのテキストサイズを変更します。

- [コントロールパネル] ウィンドウから、[画面] アイコンをダブルクリックします。
- [設定] タブを選択し、[詳細] をクリックします。
- [全般] タブを選択し、[フォントサイズ] リストから [小さいフォント] を選択します。

## UNIX システムの場合

セットアッププログラムを検索し、以下のコマンドを入力して起動します。

```
./setup
```

[セットアップユーティリティ] ウィンドウが開きます。

引き続きスタンドアロン環境に OVPI をインストールするには、95 ページの「[次の手順](#)」に進みます。

分散環境に OVPI をインストールするには、[第 5 章「分散環境での OVPI のインストール」](#)に進みます。

## 次の手順

スタンドアロン環境に OVPI をインストールする場合は、すべての OVPI コンポーネントを 1 つのシステムにインストールします。

OVPI のインストール手順は Windows システムと UNIX システムでほとんど同じです。違いについては、各指示に注釈として記載されています。



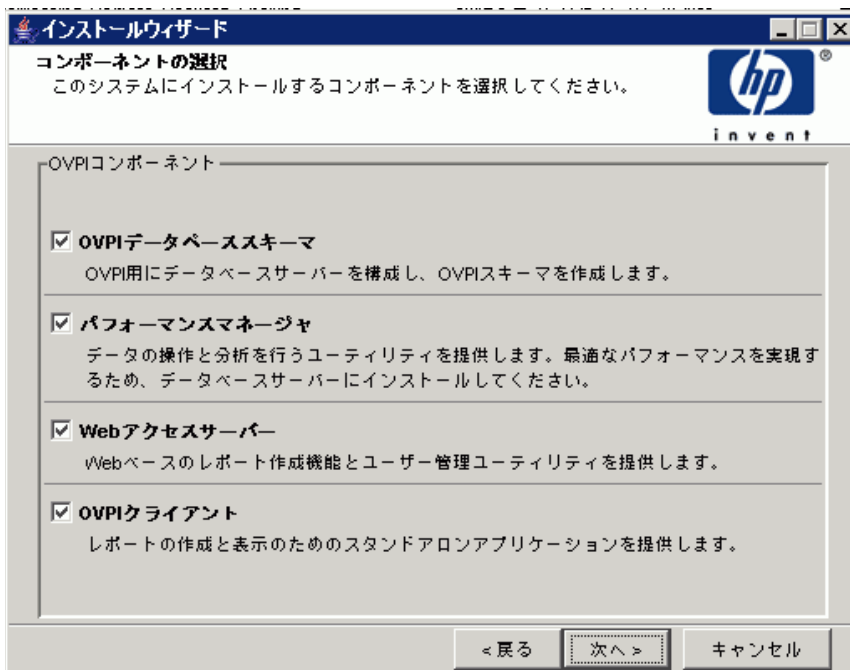
リモートの Sybase データベースにインストールするときは、第 5 章「分散環境での OVPI のインストール」の指示に従ってください。

### タスク 1: OVPI インストールプログラムの起動

- 1 まだ OVPI インストールプログラムを起動していない場合は、ここで起動します。[セットアップ] ウィンドウが開きます。
- 2 ウィンドウの [インストール] セクションから [OVPI 5.3.0] を選択します。[よろこそ] ウィンドウが開きます。



- 3 [よろこ] ウィンドウを確認し、[次へ] をクリックして続行します。[使用許諾条件] ウィンドウが開きます。
- 4 使用許諾条件に同意し、[次へ] をクリックして続行します。続行するには、使用許諾条件に同意する必要があります。[キャンセル] をクリックすると、使用許諾条件に同意しないでインストールを終了するかどうかを確認するメッセージが表示されます。[コンポーネントの選択] ウィンドウが表示されます。

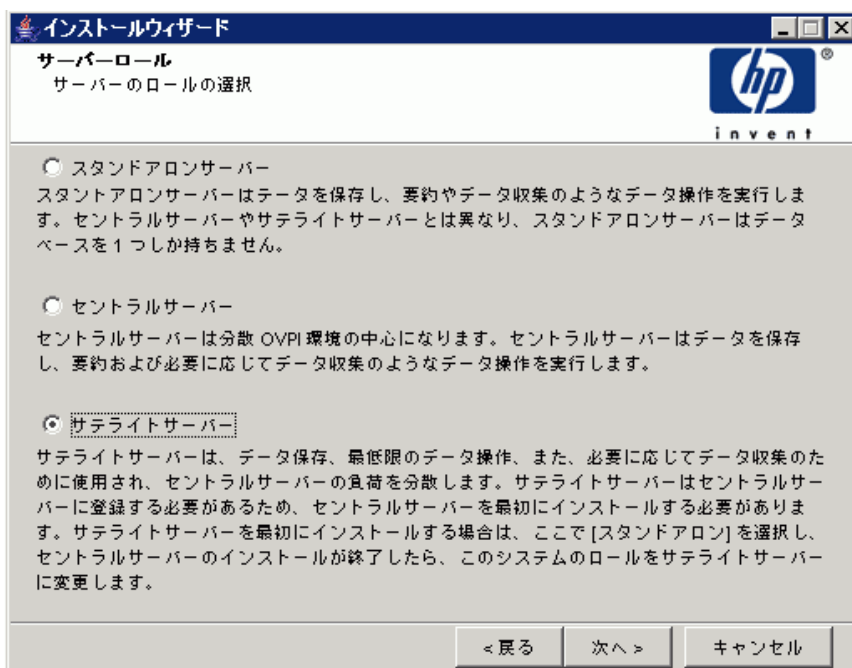




## タスク 2: インストールするすべての OVPI コンポーネントの選択

- 1 [コンポーネントの選択] ウィンドウで、インストールするすべての OVPI コンポーネントを選択します。スタンドアロンでは、すべてのコンポーネントをインストールする必要があります。

[次へ] をクリックして続行します。[サーバーロール] ウィンドウが開きます。



## タスク 3: データベースシステムの役割の選択

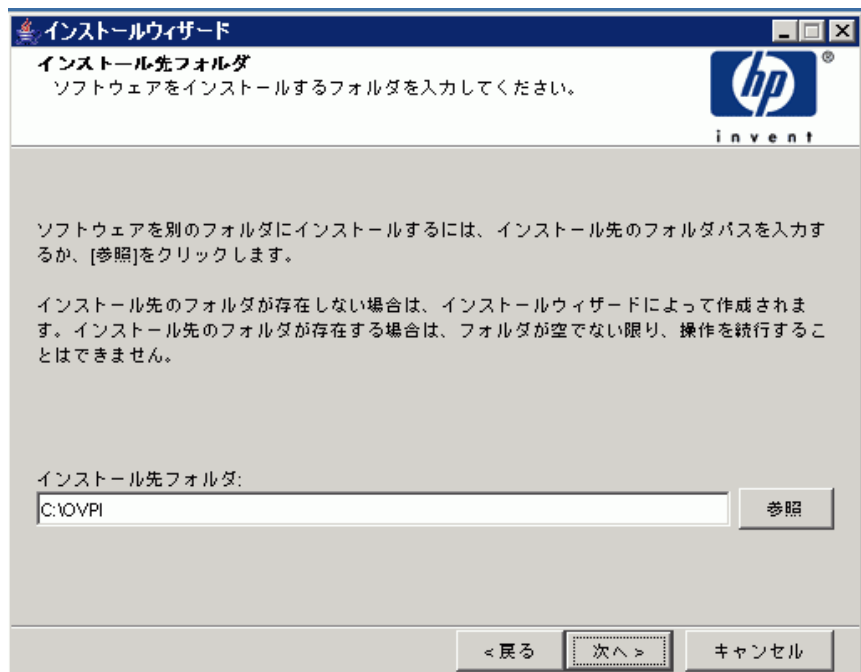
[サーバーロール] ウィンドウで、[スタンドアロンサーバー] を選択します。

後で役割を変更する場合は、OVPI 管理コンソールのシステム/ネットワークの管理アプリケーションを使用します。詳細は、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。

[次へ] をクリックして続行します。

#### タスク 4: OVPI ソフトウェアのインストール先ディレクトリの指定

[インストール先フォルダ] ウィンドウが開きます。

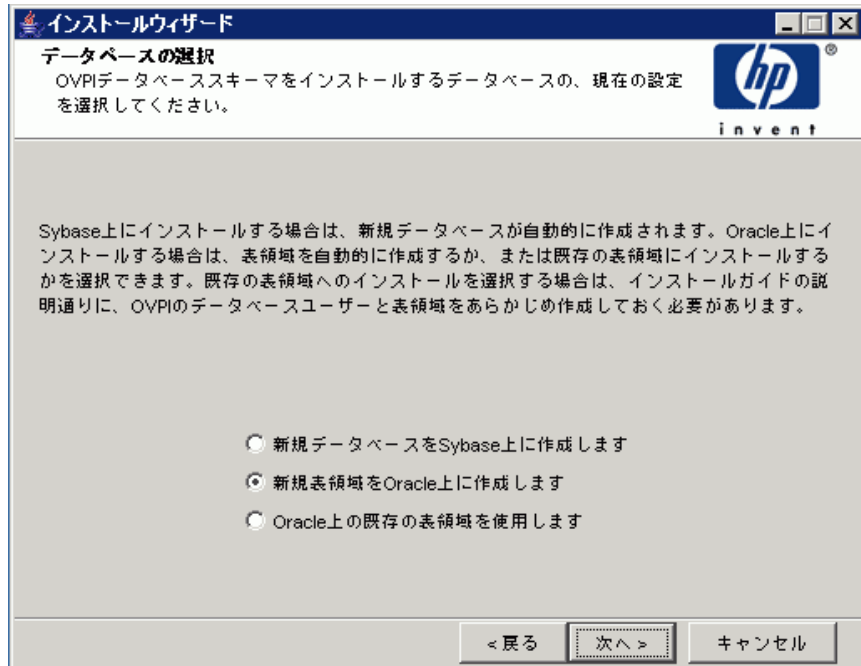


[インストール先フォルダ] ウィンドウで、**OVPI** ソフトウェアのインストール先ディレクトリを指定します。インストール先ディレクトリは、**NFS** マウントディレクトリ、**UNIX** ソフトリンク、**UNIX** ハードリンクドライブ、**Windows** マップドライブのいずれでも構いません。

- 1 デフォルトのインストール先ディレクトリのままにするか、別のディレクトリを指定します。パス名には、スペースを入れることはできません。
  - インストール先ディレクトリが存在しない場合は、インストールプログラムによって作成されます。
  - インストール先ディレクトリがすでに存在していて、データが入っている場合は、そのディレクトリが空でないことを警告するメッセージが表示されます。

— インストールプログラムがアクセスできないファイルシステム上のインストール先ディレクトリを指定した場合は、警告メッセージが表示されます。有効なディレクトリを指定するまで、インストールは続行できません。

- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。[データベースの選択] ウィンドウが開きます。



## タスク 5: OVPI データベースインスタンスの作成先となる RDBMS の選択

[データベースの選択] ウィンドウで、**OVPI データベースインスタンスの作成先となるデータベースを確認し、新しい表領域を作成するのか、既存の表領域にインストールするのかを指定します。**

- 1 次のオプションを選択します。

### **[新規データベースを Sybase 上に作成します]**

このオプションでは、インストールを正常に完了するために、データベースユーザーアカウント (dsi\_dpipes) または dsi\_dpipes ユーザーが存在している必要はありません。

- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。**[Sybase 管理者ユーザーを使用した Sybase 参照]** ウィンドウが開きます。

インストールウィザード

Sybase 管理者ユーザーを使用した Sybase 参照  
Sybase データベースを特定し、接続するために次の情報を入力してください。

サーバー設定

Sybase サーバー名 (DSQUERY):  
HPOQ03F7VFRBEZ\_SYBASE

Sybase のホスト名:  
hp-oq03f7vfrbez

Sybase TCP/IP ポート番号:  
5000

ユーザー設定

Sybase 管理者 (SA) のパスワード:

Sybase ディレクトリ:  
C:\Sybase 参照

< 戻る 次へ > キャンセル

#### タスク 6: データベースの場所の確定と接続

**[Sybase 管理者ユーザーを使用した Sybase 参照]** ウィンドウで、Sybase データベースの場所を確定してデータベースに接続します。

- 次のパラメータをデフォルト値のままにするか、新しい値を入力します。
  - [Sybase サーバー名 (DSQUERY)]:** クライアントアプリケーションがデフォルトで情報を検索する Sybase SQL Server の名前です (この名前は大文字と小文字を区別します)。このサーバーの名前は Sybase インタフェースファイル内で確認できます。このファイルは、Sybase SQL Server がインストールされているシステム上にあります。Sybase インタフェースファイルの詳細は、[第 11 章「Sybase インタフェースファイル」](#)を参照してください。
  - [Sybase のホスト名]:** Sybase がインストールされているシステムの名前です。

- **[Sybase TCP/IP ポート番号 ]:** Sybase が他のシステム上のクライアントおよびサーバーと通信するために使用する TCP/IP ポート番号です。 <DSQUERY> 以外にも、インストール中にポート番号を割り当てる Sybase SQL Server がいくつかあります。対象となるサーバーは以下のとおりです。

Sybase サーバー	Windows	UNIX
<DSQUERY>_BS	5001	2053
<DSQUERY>_MS	5002	2054
<DSQUERY>_HS	5003	2055
<DSQUERY>_XP	5004	2056

各サーバーを機能させるためには、それぞれを手動で起動する必要があります。

- **[Sybase 管理者 (SA) のパスワード ]:** Sybase のインストール中に Sybase 管理者パスワードを NULL 値から実際のパスワードに変更した場合は、[Sybase 管理者 (SA) のパスワード ] ボックスにそのパスワードを入力します。

Sybase のインストール中に Sybase 管理者パスワードを変更していない場合は、このボックスは空白のまま構いません。

- **[Sybase ディレクトリ ]:** Sybase のインストール先ディレクトリです。別のディレクトリを選択するには、[ 参照 ] をクリックします。ディレクトリを選択したら、[ 開く ] をクリックして [Sybase SA 参照] ウィンドウに戻ります。

- 2 [次へ] をクリックして続行します。[Sybase のユーザーとデバイスの作成] ウィンドウが開きます。

#### タスク 7: Sybase ユーザーアカウントと新しいデータベースデバイスの作成

[Sybase のユーザーとデバイスの作成] ウィンドウで、OVPI データベースユーザーアカウントとデータベースデバイスを作成します。

インストールウィザードでは、**Sybase Adaptive Server** を使用して OVPI データベース用デバイスファイルが作成されます。**Sybase** 内には、OVPI データベース、トランザクションログ、一時領域用にそれぞれのファイルが作成されます。OVPI データベースは、データの保存にデバイスファイルを使用します (raw デバイスを使用する場合は、デバイスファイルは作成されません)。

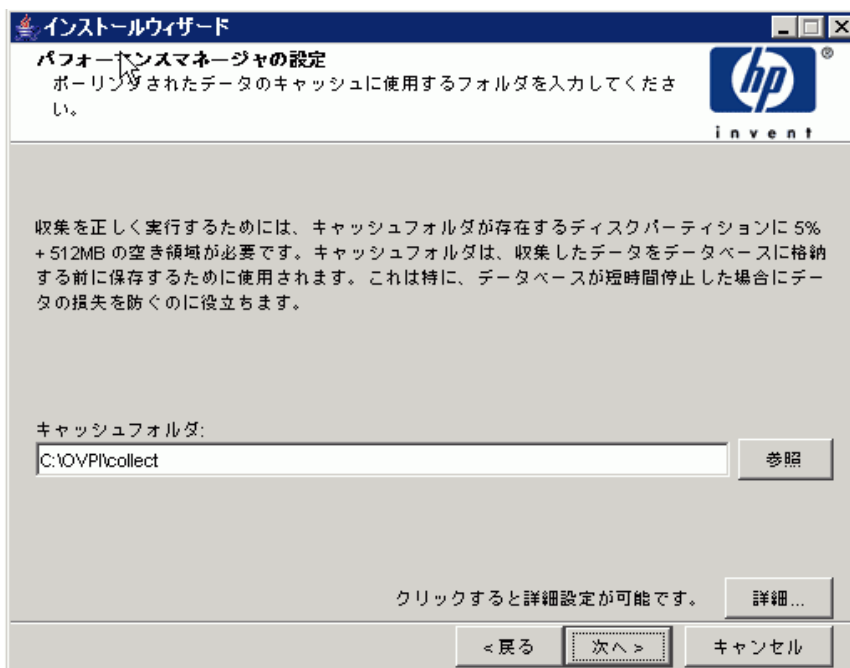
デフォルトでは、**Sybase** のインストール先ディレクトリにある **dbfiles** というサブフォルダーにデバイスファイルがインストールウィザードで作成されます。インストールのこの時点でこのフォルダーの名前を変更することができます。名前には、スペースを入れることはできません。



すべての **Sybase** デバイスは **vstart=512** オプションで作成されます。これにより、**OVPI** でラベル付きファイルシステムの使用が可能になります。たとえば、データベースのサイズが **800MB** のとき、実際に使用できるのは **799MB** で、残りの **1MB** はラベルに割り当てられます。

- 1 次のパラメータをデフォルト値のままにするか、新しい値を入力します。
  - **[データベースデバイス]** と **[データベースサイズ (MB)]**: データベースデバイスファイルの場所と名前、およびそのサイズを入力します。
  - **[トランザクションログ]** と **[データベースの割合]**: トランザクションログファイルの場所とデータベース内で割り当てる領域の容量を入力します。
  - **[一時領域]** と **[データベースの割合]**: 一時領域ファイルの場所とデータベース内で割り当てる領域の容量を入力します。
  - 一時領域 (**dpipe\_temp**) とトランザクションログ (**dpipe\_log**) のサイズは、データベースデバイス (**dpipe\_db**) の約 **50%** にすることをお勧めします。たとえば、データベース (**dpipe\_db**) が **800MB** なら、一時領域 (**dpipe\_temp**) と一時ログ (**dpipe\_log**) はそれぞれ **400MB** にします。
  - **[OVPI データベースユーザー (dsi\_dpipe) パスワード]**: OVPI データベースユーザーアカウント (**dsi\_dpipe**) のパスワードを入力します。
  - パスワードはアルファベットで始まり、**1** 文字以上 **30** 文字以内の長さでなければなりません。**6** 文字以上にしてください。有効な文字は、すべての英数字、シャープ記号 (**#**)、およびアンダースコア (**\_**) です。このパスワードは大文字と小文字を区別します。
  - **[パスワードの確認]**: パスワードを再入力します。

- 2 (省略可能) 必要に応じて **[詳細]** をクリックすると、**[OVPI 詳細設定]** ウィンドウが表示されます。このウィンドウを使用して、以下の操作を行います。
  - OVPI データベースデバイス (**dpipes\_db**、**dpipes\_temp**、**dpipes\_log**) のファイルの追加と削除。UNIX システムでのみ、これらのデバイス用 **raw** パーティションを使用できます (**[データベース]**、**[トランザクションログ]**、および **[一時領域]** タブ)。S0 および Veritas の **raw** パーティションをサポートしています。
  - Sybase の設定パラメータの変更 (**[パラメータ]** タブ)。
- 3 **[次へ]** をクリックして続行します。**[パフォーマンスマネージャの設定]** ウィンドウが開きます。



108 ページのタスク 9 に進みます。



## タスク 8: (省略可能) デフォルトのデータベースデバイスの変更

- 1 変更するデバイスに関連するタブ ([データベース]、[トランザクションログ]、または [一時領域]) を選択します。
- 2 データベースデバイスにファイルを追加するには、以下のいずれかを実行します。

Windows の場合 :


[追加] をクリックします。

UNIX の場合 :

[追加] をクリックして [データファイル] の矢印をクリックし、一覧からファイルを選択します。

デバイス名の横にある [サイズ (MB)] 列に、あらかじめ計算されたデバイスサイズが表示されます。**raw** パーティションを使用している場合は、この値を変更しないことをお勧めします。

- 3 ファイルシステムデータベースファイルの場合のみ : ファイルを編集するには、ファイル、パス、またはサイズのセルをダブルクリックします。
- 4 ファイルを削除するには、以下の手順に従います。
  - a ファイルをクリックし、[Tab] キーを押します。
  - b 上下矢印キーを押して選択を有効にし、上下矢印キーで削除するファイルを選択します。
  - c [削除] をクリックします。

 各デバイスに対して少なくとも 1 つのファイルを作成する必要があります。

  - d UNIX の場合のみ : データベースデバイスに **raw** パーティションを使用するには、以下の手順を実行します。
    - **raw** パーティションを使用するデバイスに関連したタブを選択します。

- [このデータベースに raw パーティションを使用する] チェックボックスをオンにします。


インストールアプリケーションによって、マウント、使用、スワップ、`/etc/vfstab` ファイルへの追加のいずれも行われていないディスクパーティションが検出されます。こうすることで、まだマウントされていなくても、管理者がマウントすることになっていてファイルシステムとして利用可能なファイルシステムを、インストールウィザードによって使用されることを防止します。

- e すべての変更が完了したら [適用] をクリックします。
- f [OK] をクリックして [Sybase のユーザーとデバイスの作成] ウィンドウに戻り、[次へ] をクリックしてインストールを続行します。

[Sybase のユーザーとデバイスの作成] ウィンドウに戻ると、次の状態になっています。

- UNIX の場合のみ: 特定のデータベースデバイスに raw パーティションを選択している場合は、そのデータベースデバイスはウィンドウ上で使用できない状態が表示されます。
- いずれかのデバイスのファイルを追加または削除した場合は、ウィンドウに表示される割合とデータベースサイズが再計算されます。
- データベースデバイスに保存先ディレクトリの異なる複数のファイルがある場合は、そのデータベースデバイスのフィールドはウィンドウ上で使用できない状態が表示されます。

## Sybase の設定パラメータの変更

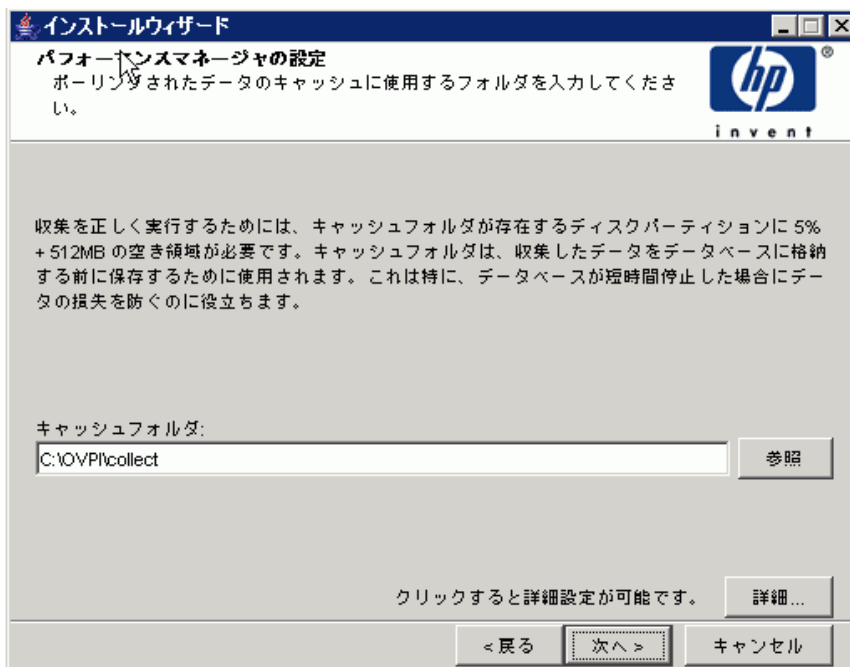
-  これらのパラメータの値は、Sybase データベース管理者のみが変更することをお勧めします。

Sybase の設定パラメータを変更するには、以下の手順に従います。

- a [パラメータ] タブを選択します。[パラメータ] タブには以下のオプションがあります。
  - リカバリ間隔 (分単位)。システム障害時に SQL Server が各データベースのリカバリに要する最大分数を設定します。
  - 最大メモリー (MB)。SQL Server がオペレーティングシステムから割り当てるメモリーのサイズを設定します。

- ユーザー接続数。SQL Server に同時に接続できるユーザー接続の最大数を設定します。グローバル変数 @@max\_connections はシステムの最大値を格納します。これはオペレーティングシステムによって異なります。
  - ロックの数。使用可能なロックの数を設定します。
  - 最大オンラインエンジン。対称型マルチプロセッサ環境でのエンジンの数を制御します。
  - システムで 1 つの CPU を使用しているときの推奨値は 1 です。この値を大きくすると、内部競合のために Sybase の速度が低下する可能性があります。ただし、システムが複数の CPU を使う場合は、この値を増やすことで複数の CPU のアーキテクチャを活用することができます。
  - ネットワークパケットの最大サイズ (バイト単位)。クライアントプログラムが要求できるネットワークパケットの最大サイズを設定します。
  - ネットワークメモリ追加 (バイト単位)。そのサーバーのデフォルトのパケットサイズを超えるネットワークパケットを要求するクライアントに追加メモリーを割り当てます。
  - デバイスの数。SQL Server が使用できるデータベースデバイスの数を制限します。
- b すべての変更が完了したら [適用] をクリックします。
- 5 [OK] をクリックして [Sybase のユーザーとデバイスの作成] ウィンドウに戻ります。

- 6 [次へ] をクリックしてインストールを続行します。[パフォーマンスマネージャの設定] ウィンドウが開きます。



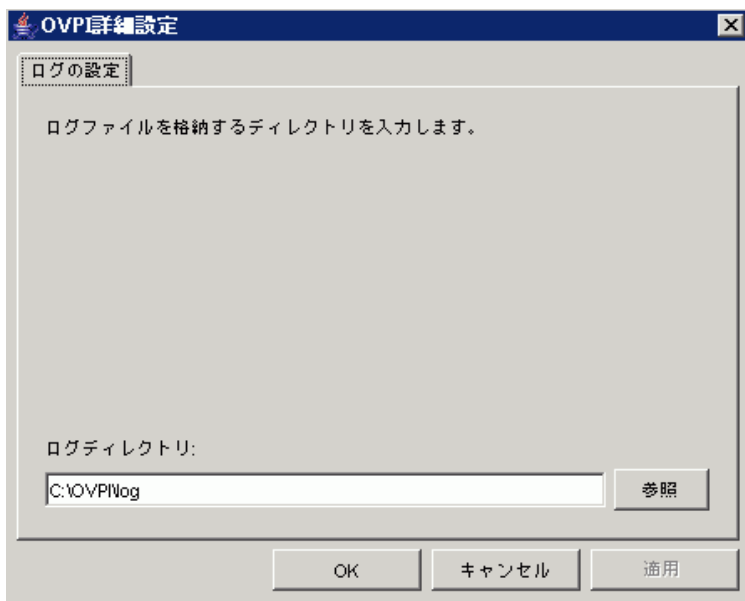
#### タスク 9: ポーリングの収集の設定

[パフォーマンスマネージャの設定] ウィンドウで、収集したデータをデータベースに格納する前に保存しておくキャッシュディレクトリを確認します。これにより、データベースが短時間シャットダウンされたときのデータ損失を防止できます。

- 1 デフォルトのディレクトリのままにするか、ポーリングデータをキャッシュするために使用する完全修飾パスを入力します。

収集が正常に動作するには、キャッシュディレクトリがあるディスクパーティションの 5% の空き領域に加えて、さらに **512MB** の空き領域が必要です。たとえば、ディスクパーティションが **10GB** の場合は、**1GB** の空き領域が必要です。

- 必要に応じて、**[詳細]**をクリックして**[OVPI 詳細設定]** ウィンドウを開き、ログファイルのディレクトリを指定することができます。



- デフォルトのパスのままにすると、**OVPI** をインストールしたディレクトリの下にログディレクトリ (指定するディレクトリにかかわらずここでログファイルが管理される) が作成されます。このディレクトリを変更するには、ログファイルを格納するディレクトリのパスを入力します。
- [OK]** をクリックして変更を適用し、**[パフォーマンスマネージャの設定]** ウィンドウに戻ります。
- [次へ]** をクリックして続行します。
- 以下のいずれかを実行します。
  - UNIX システムの場合 : [タスク 10](#) に進みます。
  - Windows システムの場合 : [112 ページのタスク 11](#) に進みます。

## タスク 10: (UNIX の場合のみ) オペレーティングシステムのアカウントの作成または変更

[パフォーマンスマネージャ用のオペレーティングシステムユーザー] ウィンドウで、**trendadm** という名称のオペレーティングシステムアカウントおよびグループを確認します。この **trendadm** は、OVPI が稼動する環境を保存するときに使用します。

インストールウィザード

パフォーマンスマネージャ用のオペレーティングシステムユーザー  
パフォーマンスマネージャは、オペレーティングシステム ユーザーアカウント  
**trendadm** と、グループ **trendadm** を作成します

**trendadm** アカウントのパスワードとパスワードの確認を入力してください。入力したパスワードとパスワードの確認が一致しない限り、作業を続行することはできません。パスワードは必ず指定する必要があります。

パスワード:  
\*\*\*\*\*

パスワードの確認:  
\*\*\*\*\*

<戻る 次へ> キャンセル

この **trendadm** アカウントはオペレーティングシステムにログオンするために使用するもので、後で作成する Web アクセスサーバーアプリケーションのログオンに使用する **trendadm** アカウントと混同しないようにしてください。

オペレーティングシステムおよびグループアカウントがすでに存在するかどうかによって、ウィンドウで別の情報が要求されます。

- オペレーティングシステムアカウントおよびグループが存在しない場合は、OS ユーザーの作成用のウィンドウが開きます。

オペレーティングシステムのアカウントとグループを作成するには、以下の手順に従います。

- a 次の値を入力し、**trendadm** アカウントのパスワードを作成します。

- **[パスワード]**: パスワードの長さは 1 文字以上であれば、何文字でも構いません。また、すべての文字を使用できます。パスワードの作成に関する会社のポリシーに準拠することをお勧めします。

- **[パスワードの確認]**: パスワードを再入力します。

- b **[次へ]** をクリックして続行します。

- オペレーティングシステムアカウントおよびグループが存在する場合は、既存の OS ユーザー用のウィンドウが開きます。

オペレーティングシステムアカウントのユーザー環境を変更するには、以下の手順に従います。

- a 以下のいずれかをクリックします。

- **[ユーザー環境を変更する]**: このパラメータは、**trendadm** アカウントの **.profile** または **.cshrc** を **OVPI** 環境変数 (**COLLECT\_HOME**、**DPIPE\_HOME**、**DPIPE\_TMP**、および **TREND\_LOG**) で更新します。

- **[ユーザー環境を変更しない]**: このパラメータは、アカウントの **.profile** または **.cshrc** を **OVPI** 環境変数で更新しません。このオプションを選択した場合は、後から **OVPI** 環境変数を手作業で追加する必要があります。

- b **[次へ]** をクリックして続行します。

## タスク 11: Web アクセスサーバーの管理者とポートの指定

[Web アクセスサーバーの設定] ウィンドウで、Web アクセスサーバーがリスンする HTTP ポートのほかに、Web アクセスサーバー用の OVPI 管理者アカウントを作成します。

インストールウィザード

### Web アクセスサーバーの設定

OVPI Webアクセスサーバーコンポーネントには、Webアクセスサーバー上のOVPI管理者ユーザーの作成と、リスン対象のHTTPポートが必要です。

**ユーザー設定**

OVPI Webアクセス管理者のユーザー名とパスワードを入力してください。

ユーザー名:  
trendadm

パスワード:  
\*\*\*\*\*

パスワードの確認:  
\*\*\*\*\*

**ポート設定**

Webアクセスサーバーのリスン対象であるHTTPポートを入力してください。80以外のポートを選択すると、WebアクセスサーバーにアクセスするにはURLの中にそのポート番号を指定する必要があります。

HTTPポート:  
80

クリックすると詳細設定が可能です。 詳細...

<戻る      次へ >      キャンセル

1 以下のパラメータの値を入力します。

- **[ユーザー名]:** Web アクセスサーバー管理者のデフォルトのユーザー名をそのまま使用するか、新しい名前を入力します。このアカウントは Web アクセスサーバーへのログオンに使用します。

▶ このアカウントは OVPI の実行環境を保存するのに使用するもので、オペレーティングシステムへのログオンに使用する **trendadm** アカウント (UNIX のインストールのみ) と混同しないようにしてください。

ユーザー名とパスワードで使用できる最小および最大文字列長や文字に制限はありません。ユーザー名およびパスワードの作成に関する会社のポリシーに準拠することをお勧めします。



- **[パスワード]:** Web アクセスサーバー管理者アカウントのパスワードを入力します。

Web アクセスサーバーアプリケーションを使用して、OVPI のインストール後にパスワード規則を変更することができます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

- **[パスワードの確認]:** パスワードを再入力します。
- **[HTTP ポート]:** Web アクセスサーバーの管理者のデフォルトのポート (80) をそのまま使用するか、新しいポート番号を入力します。開いているポートならどのポートでも使用できます。

- 2 必要に応じて、**[詳細]** をクリックして **[詳細設定]** ダイアログボックスを開き、以下のタブを選択します。

**[ディレクトリ]:** すべての配布レポートを保存するレポートディレクトリの場所を変更します。レポートディレクトリの場所を変更するには、以下の手順に従います。

- a デフォルトのディレクトリのままにするか、新しいディレクトリを指定します。
- b **[適用]** をクリックします。
- c **[OK]** をクリックして **[Web アクセスサーバーの設定]** ウィンドウに戻ります。

**[OVPI ユーザー]:** OVPI クライアントへのログオンに使用するユーザーアカウントの作成と変更を行います。通常のユーザーアカウントまたは管理者アカウントを作成できます。通常のユーザーアカウントで OVPI クライアントにアクセスできます。管理者アカウントは、Web アクセスサーバーの管理機能 (**[管理]** リンク) にアクセスできます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

ユーザーアカウントを追加または変更するには、以下の手順に従います。

- a **[ユーザーの追加]** をクリックします。デフォルトのユーザー名 (new-user)、パスワード (new-user)、役割 (user) が、作成したユーザーアカウントとともに表示されます。
- b 名前またはパスワードをダブルクリックして値を削除し、新しい値を入力します。役割として **[ユーザー]** または **[管理者]** を選択します。
- c **[適用]** をクリックします。

ユーザーアカウントを削除するには、以下の手順に従います。

- a ユーザー名を選択して **[ユーザーの削除]** をクリックします。
- b **[適用]** をクリックし、**[OK]** をクリックして **[Web アクセスサーバーの設定]** ウィンドウに戻ります。

OVPI のインストール後に、Web アクセスサーバーを使用してユーザーアカウントを作成、変更または削除することもできます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

**[SSL の設定 ]:** SSL 通信を有効にすると、Web アクセスサーバーとサポートされている Web ブラウザ、レポートビューア、レポートビルダおよび管理コンソール間の安全な通信を実現できます。SSL を有効にするには、自己署名証明書を作成します。この証明書により SSL を有効にできますが、この自己署名証明書の有効期限は 90 日間です。90 日間の期限が切れる前に、この証明書を認証機関に送って署名入りデジタル証明書を受け取るか、別の自己署名証明書を作成する必要があります。署名入りデジタル証明書を受け取ったら、Web アクセスサーバーアプリケーションを使用してインポートする必要があります。また、Web アクセスサーバーを使用して、OVPI のインストール後に SSL の設定を変更することもできます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

SSL 通信を有効にして自己署名証明書を作成するには、**[SSL を有効にする]** チェックボックスをクリックしてオンにします。

このオプションを選択しても、標準の HTTP リスナーは無効にはなりません。これで、安全な SSL ポートと安全の確保されていない HTTP ポートが両方とも有効になります。

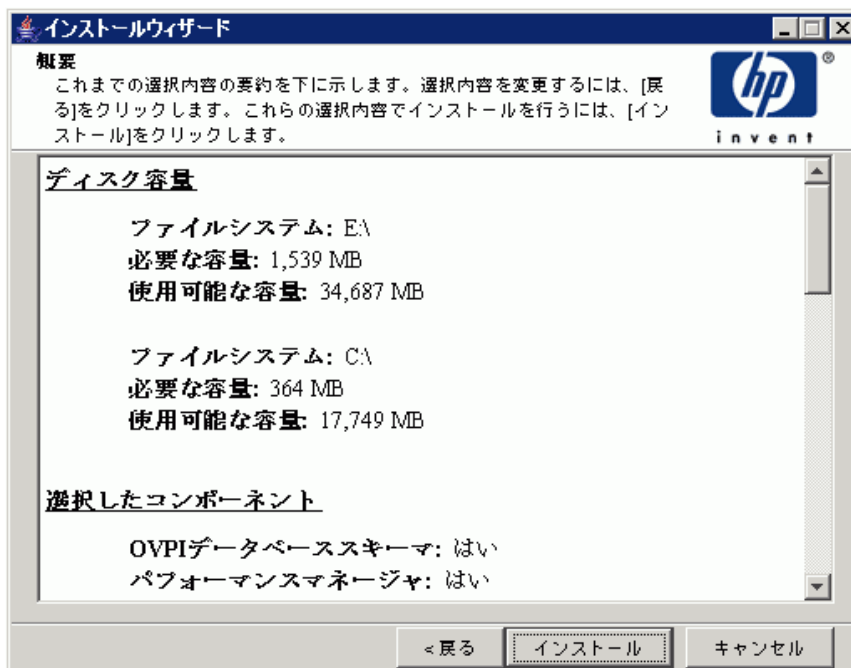
- a **[SSL ポート ]:** デフォルト値のままにするか、新しい値を指定します。
- b **[ キーストアパスワード ]:** 6 文字以上のパスワードを入力します。

パスワードは記録して安全な場所に保管してください。これは署名入り証明書を作成するときに必要になります。

自己署名証明書を作成すると、証明書リポジトリに保存されます。このパスワードにより、Web アクセスサーバーは証明書リポジトリにアクセスできます。

残りのフィールドは、証明書署名機関によって検証および署名される必要のある、SSL キーを生成するのに必要な情報を要求します。この情報は、証明書の有効性を確認するために、証明書のチェック担当者が使用します。

- a **[組織]**(省略可): 自分が所属する組織名を入力します(「ABC システム株式会社」など)。
  - b **[組織単位]**(省略可): 部または課の名前を入力します(「Northeast Sales」など)。
  - c **[市町村]**(省略可): 所在地の市町村名を入力します(「Suginami-ku」など)。
  - d **[州/都道府県]**(省略可): 都道府県名を入力します(「Tokyo」など)。
  - e **[国]**(必須): [国] ボックスに 2 文字の国コードを入力します(「JP」など)。
- 3 **[適用]** をクリックします。
  - 4 **[OK]** をクリックして **[Web アクセスサーバーの設定]** ウィンドウに戻ります。
  - 5 **[次へ]** をクリックして続行します。 **[概要]** ウィンドウが開きます。



## タスク 12: インストール情報の確認

[概要] ウィンドウが開いたら、表示された情報を確認します。

- 1 必要があれば、**[戻る]**をクリックして前のウィンドウに戻り、変更します。変更が完了したら、**[次へ]**をクリックして**[概要]**ウィンドウまで戻ります。
- 2 **[インストール]**をクリックして続行します。**[インストールの進捗状況]**ウィンドウが開きます。

## タスク 13: インストールの終了

**[インストールの進捗状況]** ウィンドウでインストールの進捗状況を確認できます。インストールプロセスが完了すると、インストールが成功したかどうかを示す情報が表示されます。

OVPI のインストールが正常に終了した場合は、**[完了]**をクリックします。

- UNIX システムの場合：インストールは終了です。
- Windows システムの場合：システムを再起動し、インストールを完了します。

OVPI のインストールが失敗した場合は、次の手順を実行します。

- 1 **[インストールの進捗状況]** ウィンドウの一番下にある**[詳細]**をクリックし、詳細情報を確認します。
- 2 サポートに問い合わせます(4 ページの「サポート」を参照してください)。

## タスク 14: (Windows の場合のみ) Windows システムの再起動

OVPI を使用する前に、システムを再起動する必要があります。

レポートパックやデータパイプをインストールするには、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』の手順を参照してください。

## 5 分散環境での OVPI のインストール

### インストールプログラムの起動

OVPI のインストールプログラムには、OVPI コンポーネントとリモートポーターをインストールするためのオプションが用意されています。OVPI のアップグレード前に実行する必要があるデータベースのアップグレードを行うには、[第 9 章「Sybase 15.0.2 へのアップグレード」](#)を参照してください。OVPI およびリモートポーターをアップグレードするには、[第 10 章「OVPI 5.30 へのアップグレード」](#)を参照してください。

以下の手順に従ってください。

- 1 ローカルシステムにログオンします。

**Windows システムの場合**

管理者アカウントを使用してログオンします。

**UNIX システムの場合**

`root` としてログオンします。

## 2 OVPI インストール DVD を DVD-ROM ドライブに挿入します。

### UNIX システムの場合

次の指示に従って DVD をマウントします。

オペレーティングシステム	コマンド
Solaris	<p>DVD を DVD-ROM ドライブに挿入すると、DVD は自動的にマウントされ、ファイルマネージャウィンドウが開きます。ウィンドウが開かない場合は、<b>root</b> としてログインし、次のように入力します。</p> <pre><b>mkdir /dvdrom</b> <b>mount -r /dev/dsk/dvd_devicename /dvdrom</b></pre> <p>この例では、<i>dvd_devicename</i> は DVD-ROM デバイスの名前です。</p>
HP-UX	<p>SAM ユーティリティを使用して DVD-ROM をマウントするか、または次のコマンドを入力します。</p> <pre><b>mkdir /dvdrom</b> <b>mount /dev/dsk/dvd_devicename /dvdrom</b></pre> <p>この例では、<i>dvd_devicename</i> は DVD-ROM デバイスの名前です。</p>
Red Hat Linux	<p>DVD を DVD-ROM ドライブに挿入すると、DVD は自動的にマウントされ、ファイルマネージャウィンドウが開きます。ウィンドウが開かない場合は、<b>root</b> としてログインし、次のように入力します。</p> <pre><b>mount -r /dev/dvdrom &lt;mount_directory&gt;</b></pre> <p>この例では、<i>mount_directory</i> は DVD-ROM の内容が保存されているディレクトリです。</p>

### Solaris システム

- a 次のコマンドを入力して *dvd\_label* を表示します。

```
ls -l /dvdrom
```

- b 次のコマンドを入力してディレクトリを変更します。

```
cd /dvdrom/dvd_label
```

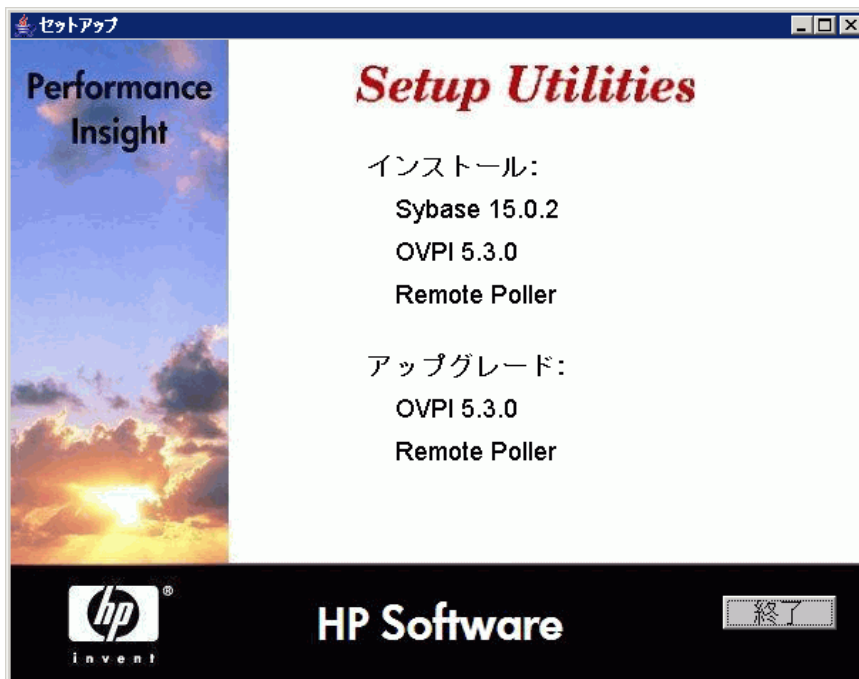
この例では、*dvd\_label* は DVD 名です。

- 3 インストールプログラムを起動します。

#### Windows システムの場合

OVPI インストール DVD を挿入します。セットアッププログラムが自動的に起動します。自動的に起動しない場合は、DVD の最上位のフォルダーにある `setup.exe` をダブルクリックします。

[セットアップユーティリティ] ウィンドウが開きます。



ウィンドウが正しく表示されない場合は、次の手順に従って Windows フォントのテキストサイズを変更します。

- a [コントロールパネル] ウィンドウから、[画面] アイコンをダブルクリックします。
- b [設定] タブを選択し、[詳細] をクリックします。
- c [全般] タブを選択し、[フォントサイズ] リストから [小さいフォント] を選択します。

#### UNIX システムの場合

セットアッププログラムを検索し、以下のコマンドを入力して起動します。

```
./setup
```

## 次の手順

分散型構成に **OVPI** をインストールするには、さまざまな方法があります。この手順では、第 1 章「**OVPI のインストールについて**」で説明した複雑で典型的な分散型構成に、**OVPI** コンポーネントを個別にインストールする方法について説明します。

分散環境へのインストールの順番は次のとおりです。

- まず中央データベースサーバーに **OVPI** データベーススキーマおよび **OVPI** パフォーマンスマネージャをインストールします。

**Web** アクセスサーバーをインストールします。複数の **Web** アクセスサーバーがある場合は、それぞれについてインストール手順を繰り返してください。

中央データベースサーバーにレポートパックをインストールします。中央サーバーがポーリングしていない場合は、中央データベースサーバーにはデータパイプをインストールしないでください。次に、レポートを各 **Web** アクセスサーバーに配布します。この作業は、インストールが完了するまで延期できます。

- 各サテライトデータベースサーバーに **OVPI** データベーススキーマおよび **OVPI** パフォーマンスマネージャをインストールします。

この時点で、サテライトデータベースサーバーでネットワークを検出することができます。

- 各サテライトデータベースサーバーにレポートパックおよびデータパイプをインストールします。
- リモートポーラーコンポーネントを各リモートポーリングシステムにインストールします。複数のリモートポーリングシステムがある場合は、それぞれについてインストール手順を繰り返してください。

この時点で、各サテライトデータベースサーバーのタイプ検出、分散環境における運用のためのレポートパックの設定、およびリモートポーリングシステムのポーリングポリシーの設定を実行できます。この作業は、インストールが完了するまで延期できます。

- **OVPI** クライアントアプリケーションを、**Web** アクセスサーバーにアクセスする各ワークステーションにインストールします。



## 中央サーバーへの OVPI のインストール

分散環境では、最初に中央サーバーに OVPI をインストールする必要があります。その後、サテライトサーバーをインストールし、中央サーバーにサテライトサーバーを登録します。中央サーバーに OVPI をインストールするには、[第 4 章「スタンドアロンサーバーへの OVPI のインストール」](#)の手順に従います。[97 ページのタスク 3](#)の手順で、[スタンドアロンサーバー]の代わりに[**セントラルサーバー**]オプションを選択します。

## サテライトサーバーへの OVPI のインストール

この項では、サテライトサーバーのデータベースサーバーに、OVPI データベーススキーマおよび OVPI パフォーマンスマネージャをインストールする手順について説明します。リモートデータベースを使用しているのであれば、この両方のコンポーネントを同じシステムにインストールする必要があります。

手順の大部分は、スタンドアロンシステムへの OVPI データベーススキーマおよび OVPI パフォーマンスマネージャのインストールと同じです。

## タスク 1: OVPI インストールプログラムの起動

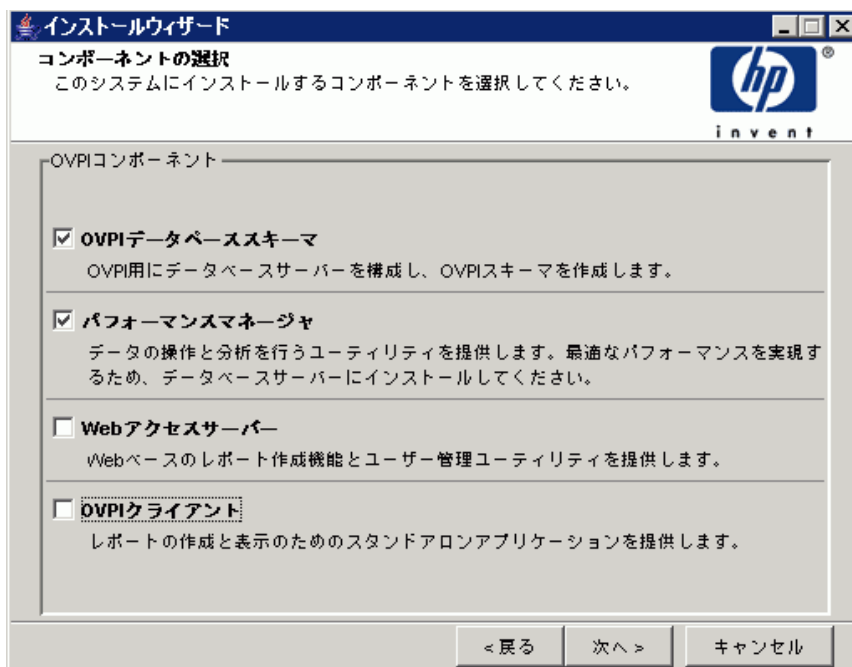
- 1 まだ **OVPI** インストールプログラムを起動していない場合は、ここで起動します。[セットアップユーティリティ] ウィンドウが開きます。
- 2 ウィンドウの [インストール] セクションから **[OVPI 5.3.0]** を選択します。  
[ようこそ] ウィンドウが開きます。



- 3 [ようこそ] ウィンドウを確認し、**[次へ]** をクリックして続行します。[使用許諾条件] ウィンドウが開きます。
- 4 使用許諾条件に同意し、**[次へ]** をクリックして続行します。続行するには、使用許諾条件に同意する必要があります。**[キャンセル]** をクリックすると、使用許諾条件に同意しないでインストールを終了するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

## タスク 2: インストールする OVPI コンポーネントの選択

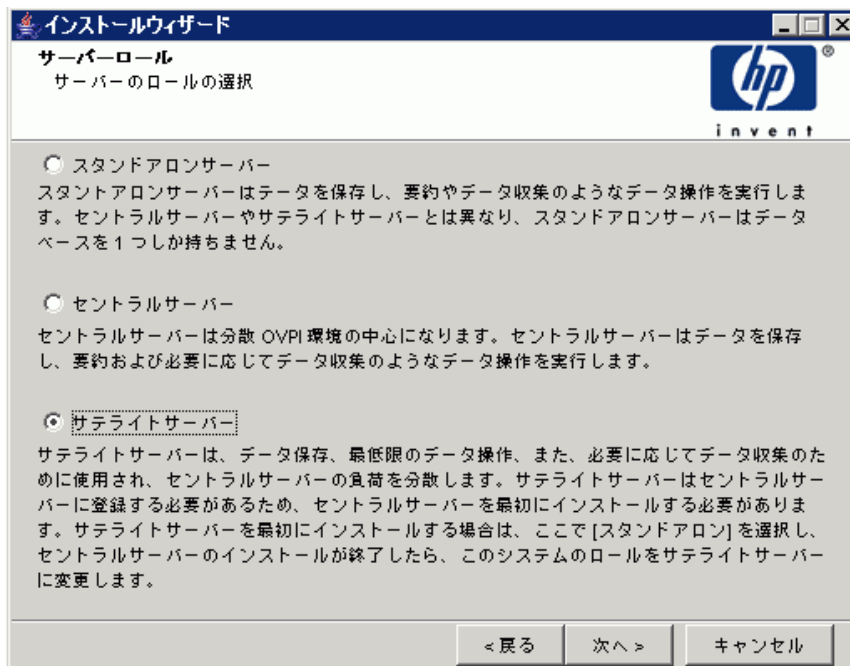
[コンポーネントの選択] ウィンドウが表示されます。



- 1 ウィンドウの [インストール] セクションで、**[OVPI データベーススキーマ]** および **[パフォーマンスマネージャ]** をクリックして選択します。他のチェックボックスをオフにします。
- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。

### タスク 3: データベースシステムの役割の選択

[サーバーロール] ウィンドウが開きます。



[サテライトサーバー] を選択し、[次へ] をクリックします。

後で役割を変更する場合は、OVPI 管理コンソールのシステム / ネットワークの管理アプリケーションを使用します。詳細は、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。

#### タスク 4: サテライトサーバーのホスト名とポート番号の指定

サテライトサーバーには、登録先の中央サーバーのホスト名およびポート番号（デフォルト値は 80）を指定するためのオプションがあります。これは、systems.xml ファイルに格納されている情報を同期させるために必要です。安全な通信を実現するために、SSL を有効にできます。インストールプロセスが終了すると、登録も完了します。

[次へ] をクリックして続行します。[セントラルサーバー登録] ウィンドウが開きます。

インストールウィザード

セントラルサーバー登録  
セントラルサーバーの登録に必要な情報を入力します。

hp  
invent

セントラルサーバーのホスト名:

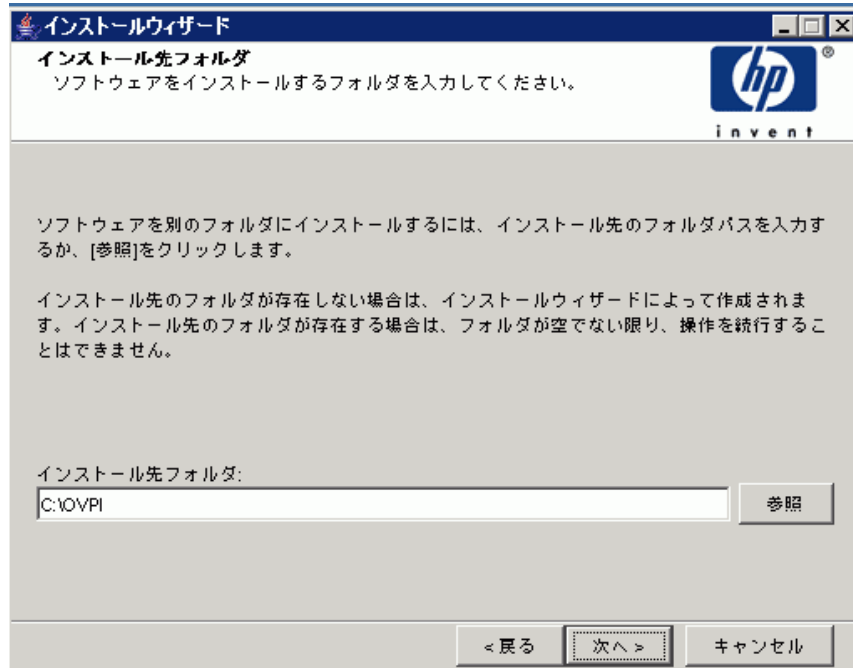
セントラルサーバーのポート番号:

u30BBセントラルサーバーは SSL を使うように設定されています

< 戻る 次へ > キャンセル

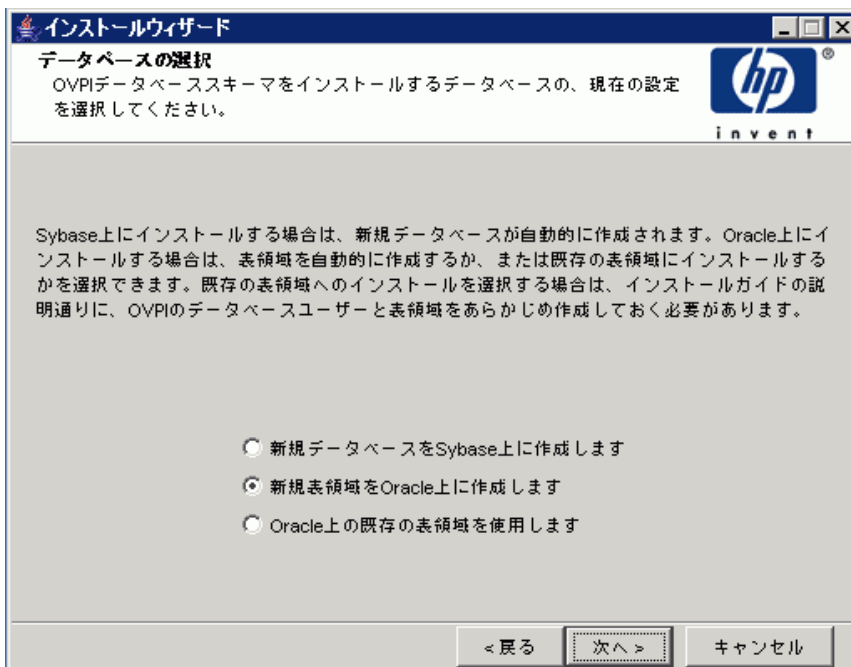
## タスク 5: OVPI ソフトウェアのインストール先ディレクトリの指定

[インストール先フォルダ] ウィンドウで、OVPI ソフトウェアのインストール先ディレクトリを指定します。インストール先ディレクトリは、NFS マウントディレクトリ、UNIX ソフトリンク、UNIX ハードリンクドライブ、Windows マップドライブのいずれでも構いません。



- 1 デフォルトのインストール先ディレクトリのままにするか、別のディレクトリを指定します。パス名には、スペースを入れることはできません。
  - インストール先ディレクトリが存在しない場合は、インストールプログラムによって作成されます。
  - インストール先ディレクトリがすでに存在していて、データが入っている場合は、そのディレクトリが空でないことを警告するメッセージが表示されます。
  - インストールプログラムがアクセスできないファイルシステム上のインストール先ディレクトリを指定した場合は、警告メッセージが表示されます。有効なディレクトリを指定するまで、インストールは続行できません。

- 2 [次へ] をクリックして続行します。[データベースの選択] ウィンドウが開きます。

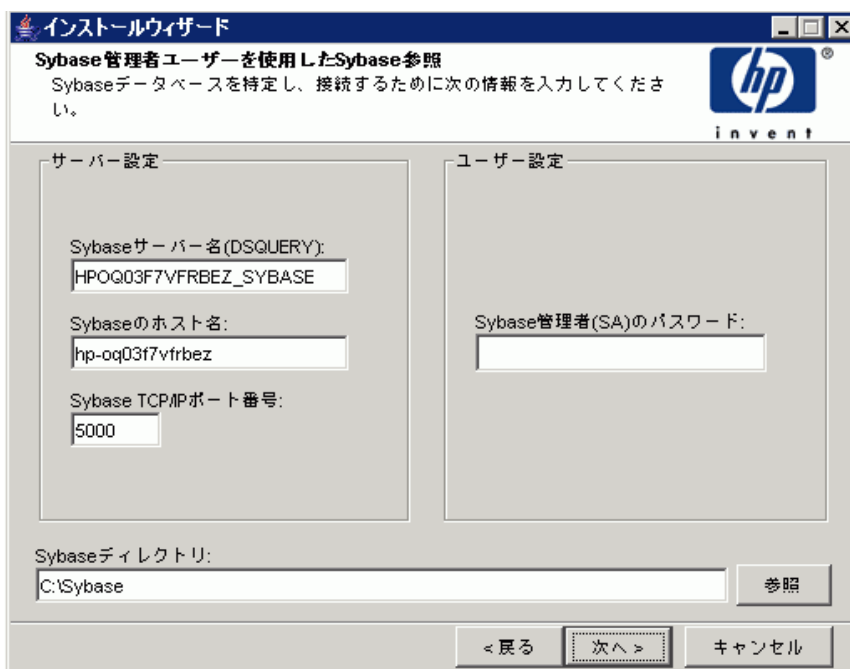


#### タスク 6: OVPI データベースインスタンスのインストール先となる RDBMS の選択

- 1 [データベースの選択] ウィンドウで、[ **新規データベースを Sybase 上に作成します** ] を選択します。

このオプションでは、インストールを正常に完了するために、`dpipes_db` データベースまたは `dsi_dpipes` ユーザーが存在している必要はありません。

- 2 [次へ] をクリックして続行します。[Sybase 管理者ユーザーを使用した Sybase 参照] ウィンドウが開きます。



### タスク 7: データベースの場所の確定と接続

[Sybase 管理者ユーザーを使用した Sybase 参照] ウィンドウで、Sybase データベースの場所を確定してデータベースに接続します。

- 1 次のパラメータをデフォルト値のままにするか、新しい値を入力します。
  - **[Sybase サーバー名 (DSQUERY)]:** クライアントアプリケーションがデフォルトで情報を検索する Sybase SQL Server の名前です (この名前は大文字と小文字を区別します)。このサーバーの名前は Sybase インタフェースファイル内で確認できます。このファイルは、Sybase SQL Server がインストールされているシステム上にあります。Sybase インタフェースファイルの詳細は、第 11 章「Sybase インタフェースファイル」を参照してください。
  - **[Sybase のホスト名]:** Sybase がインストールされているシステムの名前です。



- **[Sybase TCP/IP ポート番号 ]:** Sybase が他のシステム上のクライアントおよびサーバーと通信するために使用する TCP/IP ポート番号です。 <DSQUERY> 以外にも、インストール中に次の Sybase SQL Server にポート番号が割り当てられます。

Sybase サーバー	Windows	UNIX
<DSQUERY>_BS	5001	2053
<DSQUERY>_MS	5002	2054
<DSQUERY>_HS	5003	2055
<DSQUERY>_XP	5004	2056

各サーバーを機能させるためには、それぞれを手動で起動する必要があります。

- **[Sybase 管理者 (SA) のパスワード ]:** Sybase のインストール中に Sybase 管理者パスワードを NULL 値から実際のパスワードに変更した場合は、[Sybase 管理者 (SA) のパスワード ] ボックスにそのパスワードを入力します。

Sybase のインストール中に Sybase 管理者パスワードを変更していない場合は、このボックスは空白のまま構いません。

- **[Sybase ディレクトリ ]:** Sybase のインストール先ディレクトリです。別のディレクトリを選択するには、[ 参照 ] をクリックします。ディレクトリを選択したら、[ 開く ] をクリックして [Sybase SA 参照] ウィンドウに戻ります。

- 2 [次へ] をクリックして続行します。[Sybase のユーザーとデバイスの作成] ウィンドウが開きます。

インストールウィザード

Sybaseのユーザーとデバイスの作成

OVPIのユーザーとデバイスの作成に必要な情報を入力してください。

データベースデバイス: C:\Sybase\data 参照

データベースサイズ(MB): 800

トランザクションログ: C:\Sybase\data 参照

データベースの割合: 50%

一時領域: C:\Sybase\data 参照

データベースの割合: 50%

OVPIデータベースユーザー(dsi\_dpipes)のパスワード: \*\*\*\*\*

パスワードの確認: \*\*\*\*\*

クリックすると詳細設定が可能です。 詳細...

<戻る 次へ> キャンセル

#### タスク 8: Sybase ユーザーアカウントと新しいデータベースデバイスの作成

[Sybase のユーザーとデバイスの作成] ウィンドウで、OVPI データベースユーザーアカウントとデータベースデバイスを作成します。

インストールウィザードでは、Sybase Adaptive Server を使用して OVPI データベース用デバイスファイルが作成されます。Sybase 内には、OVPI データベース、トランザクションログ、一時領域用にそれぞれのファイルが作成されます。OVPI データベースは、データの保存にデバイスファイルを使用します (raw デバイスを使用する場合は、デバイスファイルは作成されません)。

デフォルトでは、**Sybase** のインストール先ディレクトリにある **dbfiles** というサブフォルダーにデバイスファイルがインストールウィザードで作成されます。インストールのこの時点でこのフォルダーの名前を別のものに変更することができます。名前には、スペースを入れることはできません。



すべての **Sybase** デバイスは **vstart=512** オプションで作成されます。これにより、**OVPI** でラベル付きファイルシステムの使用が可能になります。たとえば、データベースのサイズが **800MB** のとき、実際に使用できるのは **799MB** で、残りの **1MB** はラベルに割り当てられます。

1 次のパラメータをデフォルト値のままにするか、新しい値を入力します。

- **[データベースデバイス]** と **[データベースサイズ (MB)]**: データベースデバイスファイルの場所と名前、およびそのサイズを入力します。
- **[トランザクションログ]** と **[データベースの割合]**: トランザクションログファイルの場所とデータベース内で割り当てる領域の容量を入力します。
- **[一時領域]** と **[データベースの割合]**: 一時領域ファイルの場所とデータベース内で割り当てる領域の容量を入力します。

一時領域 (**dpipe\_temp**) とトランザクションログ (**dpipe\_log**) のサイズは、データベースデバイス (**dpipe\_db**) の約 **50%** にすることをお勧めします。たとえば、データベース (**dpipe\_db**) が **800MB** なら、一時領域 (**dpipe\_temp**) と一時ログ (**dpipe\_log**) はそれぞれ **400MB** にします。

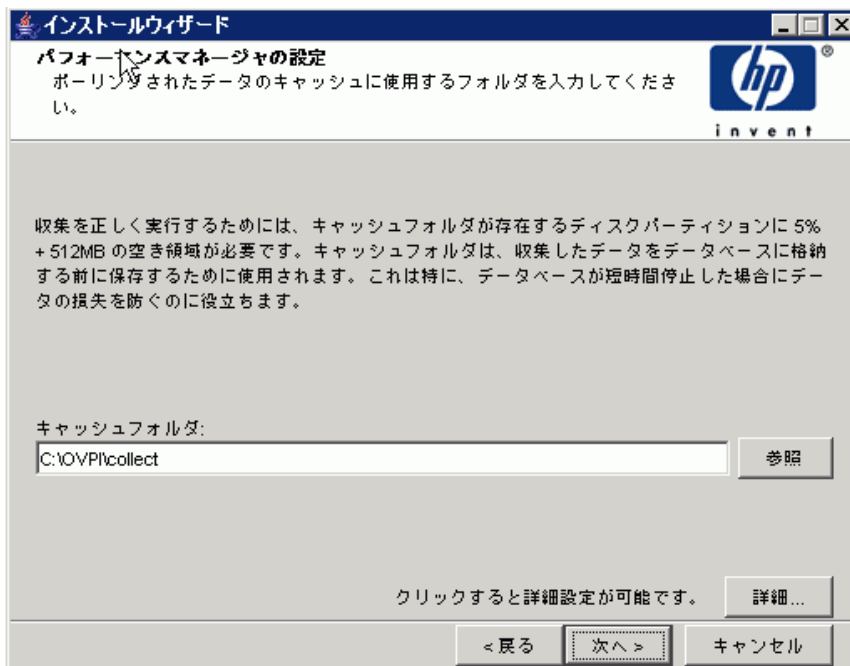
- **[OVPI データベースユーザー (dsi\_dpipe) のパスワード]**: **OVPI** データベースユーザーアカウント (**dsi\_dpipe**) のパスワードを入力します。

パスワードはアルファベットで始まり、**1** 文字以上 **30** 文字以内の長さでなければなりません。**6** 文字以上にしてください。有効な文字は、すべての英数字、シャープ記号 (**#**)、およびアンダースコア (**\_**) です。このパスワードは大文字と小文字を区別します。

- **[パスワードの確認]**: パスワードを再入力します。

- 2 (省略可能) 必要に応じて [ 詳細 ] をクリックすると、[OVPI 詳細設定] ウィンドウが表示されます。このウィンドウを使用して、以下の操作を行います。
  - OVPI データベースデバイス (dpipe\_db、dpipe\_temp、dpipe\_log) のファイルの追加と削除。

UNIX システムでのみ、これらのデバイス用 raw パーティションを使用できます ([ データベース ]、[ トランザクションログ ]、および [ 一時領域 ] タブ)。S0 および Veritas の raw パーティションをサポートしています。
  - Sybase の設定パラメータの変更 ([ パラメータ ] タブ)。134 ページの「[Sybase の設定パラメータの変更](#)」を参照してください。
- 3 [ 次へ ] をクリックして続行します。[ パフォーマンスマネージャの設定 ] ウィンドウが開きます。



136 ページの [タスク 10](#) に進みます。

## タスク 9: (省略可能) デフォルトのデータベースデバイスの変更

- 1 変更するデバイスに関連するタブ ([データベース]、[トランザクションログ]、または [一時領域]) を選択します。
- 2 データベースデバイスにファイルを追加するには、以下のいずれかを実行します。

Windows の場合 :

[追加] をクリックします。

UNIX の場合 :

[追加] をクリックして [データファイル] の矢印をクリックし、一覧からファイルを選択します。

デバイス名の横にある [サイズ (MB)] 列に、あらかじめ計算されたデバイスサイズが表示されます。**raw** パーティションを使用している場合は、この値を変更しないことをお勧めします。

- 3 ファイルシステムデータベースファイルの場合のみ : ファイルを編集するには、ファイル、パス、またはサイズのセルをダブルクリックします。
- 4 ファイルを削除するには、以下の手順に従います。
  - a ファイルをクリックし、[Tab] キーを押します。
  - b 上下矢印キーを押して選択を有効にし、上下矢印キーで削除するファイルを選択します。
  - c [削除] をクリックします。



各デバイスに対して少なくとも 1 つのファイルを作成する必要があります。

- d UNIX の場合のみ : データベースデバイスに **raw** パーティションを使用するには、以下の手順を実行します。
  - **raw** パーティションを使用するデバイスに関連したタブを選択します。
  - [このデータベースに **raw** パーティションを使用する] チェックボックスをオンにします。

インストールアプリケーションによって、マウント、使用、スワップ、`/etc/vfstab` ファイルへの追加のいずれも行われていないディスクパーティションが検出されます。こうすることで、まだマウント


されていなくても、管理者がマウントすることになっていてファイルシステムとして利用可能なファイルシステムを、インストールウィザードによって使用されることを防止します。

- e すべての変更が完了したら **[適用]** をクリックします。
- f **[OK]** をクリックして **[Sybase のユーザーとデバイスの作成]** ウィンドウに戻り、**[次へ]** をクリックしてインストールを続行します。

**[Sybase のユーザーとデバイスの作成]** ウィンドウに戻ると、次の状態になっています。

- **UNIX の場合のみ**：特定のデータベースデバイスに **raw** パーティションを選択している場合は、そのデータベースデバイスはウィンドウ上で使用できない状態が表示されます。
- いずれかのデバイスのファイルを追加または削除した場合は、ウィンドウに表示される割合とデータベースサイズが再計算されます。
- データベースデバイスに保存先ディレクトリの異なる複数のファイルがある場合は、そのデータベースデバイスのフィールドはウィンドウ上で使用できない状態が表示されます。

## Sybase の設定パラメータの変更

 これらのパラメータの値は、**Sybase** データベース管理者のみが変更することをお勧めします。

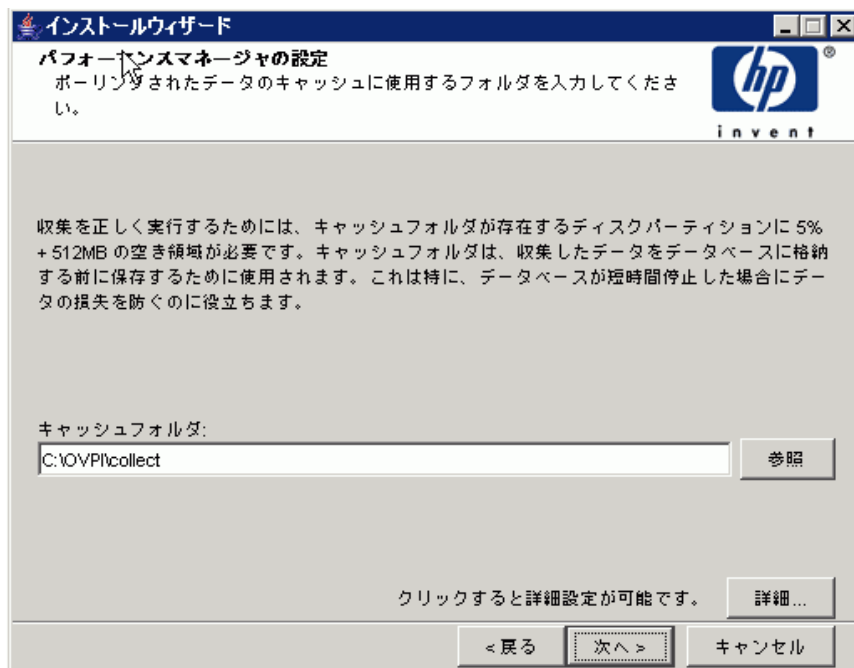
**Sybase** の設定パラメータを変更するには、以下の手順に従います。

- a **[パラメータ]** タブを選択します。**[パラメータ]** タブには以下のオプションがあります。
  - リカバリ間隔 (分単位)。システム障害時に **SQL Server** が各データベースのリカバリに要する最大分数を設定します。
  - 最大メモリー (MB)。 **SQL Server** がオペレーティングシステムから割り当てるメモリーのサイズを設定します。
  - ユーザー接続数。 **SQL Server** に同時に接続できるユーザー接続の最大数を設定します。グローバル変数 **@@max\_connections** はシステムの最大値を格納します。これはオペレーティングシステムによって異なります。
  - ロックの数。使用可能なロックの数を設定します。

- 最大オンラインエンジン。対称型マルチプロセッサ環境でのエンジンの数を制御します。
  - システムで 1 つの CPU を使用しているときの推奨値は 1 です。この値を大きくすると、内部競合のために Sybase の速度が低下する可能性があります。ただし、システムが複数の CPU を使う場合は、この値を増やすことで複数の CPU のアーキテクチャを活用することができます。
  - ネットワークパケットの最大サイズ (バイト単位)。クライアントプログラムが要求できるネットワークパケットの最大サイズを設定します。
  - ネットワークメモリ追加 (バイト単位)。そのサーバーのデフォルトのパケットサイズを超えるネットワークパケットを要求するクライアントに追加メモリーを割り当てます。
  - デバイスの数。SQL Server が使用できるデータベースデバイスの数を制限します。
- b すべての変更が完了したら **[適用]** をクリックします。
- 5 **[OK]** をクリックして **[Sybase のユーザーとデバイスの作成]** ウィンドウに戻ります。
- 6 **[次へ]** をクリックしてインストールを続行します。

## タスク 10: ポーリングの収集の設定

[パフォーマンスマネージャの設定] ウィンドウで、収集したデータをデータベースに格納する前に保存しておくキャッシュディレクトリを確認します。これにより、データベースが短時間シャットダウンされたときのデータ損失を防止できます。

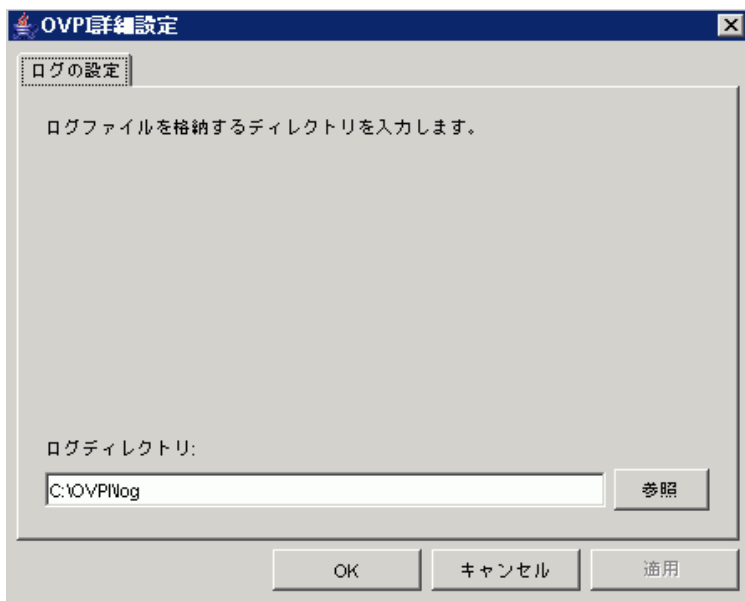


- 1 デフォルトのディレクトリのままにするか、ポーリングデータをキャッシュするために使用する完全修飾パスを入力します。

収集が正常に動作するには、キャッシュディレクトリがあるディスクパーティションの5%の空き領域に加えて、さらに512MBの空き領域が必要です。たとえば、ディスクパーティションが10GBの場合は、1GBの空き領域が必要です。



- 必要に応じて、**[詳細]** をクリックして **[OVPI 詳細設定]** ウィンドウを開き、ログファイルのディレクトリを指定することができます。



- デフォルトのパスのままにすると、**OVPI** をインストールしたディレクトリの下にログディレクトリ (指定するディレクトリにかかわらずここでログファイルが管理される) が作成されます。このディレクトリを変更するには、ログファイルを格納するディレクトリのパスを入力します。
- [OK]** をクリックして変更を適用し、**[パフォーマンスマネージャの設定]** ウィンドウに戻ります。
- [次へ]** をクリックして続行します。

## タスク 11: UNIX システムの場合のみ: オペレーティングシステムのアカウントの作成または変更

[パフォーマンスマネージャ用のオペレーティングシステムユーザー] ウィンドウで、**trendadm** という名称のオペレーティングシステムアカウントおよびグループを確認します。この **trendadm** は、OVPI が稼動する環境を保存するときに使用します。

インストールウィザード

パフォーマンスマネージャ用のオペレーティングシステムユーザー  
パフォーマンスマネージャは、オペレーティングシステムユーザーアカウント **trendadm** と、グループ **trendadm** を作成します

**trendadm** アカウントのパスワードとパスワードの確認を入力してください。入力したパスワードとパスワードの確認が一致しない限り、作業を続行することはできません。パスワードは必ず指定する必要があります。

パスワード:  
\*\*\*\*\*

パスワードの確認:  
\*\*\*\*\*

<戻る 次へ> キャンセル

この **trendadm** アカウントはオペレーティングシステムにログオンするために使用するもので、後で作成する Web アクセスサーバーアプリケーションのログオンに使用する **trendadm** アカウントと混同しないようにしてください。

オペレーティングシステムおよびグループアカウントがすでに存在するかどうかによって、ウィンドウで別の情報が要求されます。

- オペレーティングシステムアカウントおよびグループが存在しない場合は、OS ユーザーの作成用のウィンドウが開きます。

オペレーティングシステムのアカウントとグループを作成するには、以下の手順に従います。

- a 次の値を入力し、**trendadm** アカウントのパスワードを作成します。

- **[パスワード]**: パスワードの長さは 1 文字以上であれば、何文字でも構いません。すべての文字を使用できます。パスワードの作成に関する会社のポリシーに準拠することをお勧めします。

- **[パスワードの確認]**: パスワードを再入力します。

- b **[次へ]** をクリックして続行します。

- オペレーティングシステムアカウントおよびグループが存在する場合は、既存の OS ユーザー用のウィンドウが開きます。

オペレーティングシステムアカウントのユーザー環境を変更するには、以下の手順に従います。

- a 以下のいずれかをクリックします。

- **[ユーザー環境を変更する]**: このパラメータは、**trendadm** アカウントの **.profile** または **.cshrc** を **OVPI** 環境変数 (**COLLECT\_HOME**、**DPIPE\_HOME**、**DPIPE\_TMP**、および **TREND\_LOG**) で更新します。

- **[ユーザー環境を変更しない]**: このパラメータは、アカウントの **.profile** または **.cshrc** を **OVPI** 環境変数で更新しません。このオプションを選択した場合は、後から **OVPI** 環境変数を手作業で追加する必要があります。

- b **[次へ]** をクリックして続行します。

## タスク 12: Web アクセスサーバーの管理者とポートの指定

[Web アクセスサーバーの設定] ウィンドウで、Web アクセスサーバーがリスンする HTTP ポートのほかに、Web アクセスサーバー用の OVPI 管理者アカウントを作成します。

インストールウィザード

**Web アクセスサーバーの設定**

OVPI Webアクセスサーバーコンポーネントには、Webアクセスサーバー上のOVPI管理者ユーザーの作成と、リスン対象のHTTPポートが必要です。

ユーザー設定

OVPI Webアクセス管理者のユーザー名とパスワードを入力してください。

ユーザー名:

trendadm

パスワード:

\*\*\*\*\*

パスワードの確認:

\*\*\*\*\*

ポート設定

Webアクセスサーバーのリスン対象であるHTTPポートを入力してください。80以外のポートを選択すると、WebアクセスサーバーにアクセスするにはURLの中にそのポート番号を指定する必要があります。

HTTPポート:

80

クリックすると詳細設定が可能です。 詳細...

<戻る 次へ> キャンセル

1 以下のパラメータの値を入力します。

- **[ユーザー名]:** Web アクセスサーバー管理者のデフォルトのユーザー名をそのまま使用するか、新しい名前を入力します。このアカウントは Web アクセスサーバーへのログオンに使用します。

▶ このアカウントは **OVPI** の実行環境を保存するのに使用するもので、オペレーティングシステムへのログオンに使用する **trendadm** アカウント (**UNIX** のインストールのみ) と混同しないようにしてください。

ユーザー名とパスワードで使用できる最小および最大文字列長や文字に制限はありません。ユーザー名およびパスワードの作成に関する会社のポリシーに準拠することをお勧めします。

- **[パスワード]:** Web アクセスサーバー管理者アカウントのパスワードを入力します。

Web アクセスサーバーアプリケーションを使用して、OVPI のインストール後にパスワード規則を変更することができます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

- **[パスワードの確認]:** パスワードを再入力します。
- **[HTTP ポート]:** Web アクセスサーバーの管理者のデフォルトのポート (80) をそのまま使用するか、新しいポート番号を入力します。開いているポートならどのポートでも使用できます。

- 2 必要に応じて、**[詳細]** をクリックして **[詳細設定]** ダイアログボックスを開き、以下のタブを選択します。

**[ディレクトリ]:** すべての配布レポートを保存するレポートディレクトリの場所を変更します。

- a デフォルトのディレクトリのままにするか、新しいディレクトリを指定します。
- b **[適用]** をクリックします。
- c **[OK]** をクリックして **[Web アクセスサーバーの設定]** ウィンドウに戻ります。

**[OVPI ユーザー]:** OVPI クライアントへのログオンに使用するユーザーアカウントの作成と変更を行います。通常ユーザーアカウントまたは管理者アカウントを作成できます。通常ユーザーアカウントで OVPI クライアントにアクセスできます。管理者アカウントは、Web アクセスサーバーの管理機能 (**[管理]** リンク) にアクセスできます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

ユーザーアカウントを追加または変更するには、以下の手順に従います。

- a **[ユーザーの追加]** をクリックします。デフォルトのユーザー名 (new-user)、パスワード (new-user)、役割 (user) が、作成したユーザーアカウントとともに表示されます。
- b 名前またはパスワードをダブルクリックして値を削除し、新しい値を入力します。役割として **[ユーザー]** または **[管理者]** を選択します。
- c **[適用]** をクリックします。

ユーザーアカウントを削除するには、以下の手順に従います。

- a ユーザー名を選択して **[ユーザーの削除]** をクリックします。
- b **[適用]** をクリックし、**[OK]** をクリックして **[Web アクセスサーバーの設定]** ウィンドウに戻ります。

OVPI のインストール後に、Web アクセスサーバーを使用してユーザーアカウントを作成、変更または削除することもできます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

**[SSL の設定 ]:** SSL 通信を有効にすると、Web アクセスサーバーとサポートされている Web ブラウザ、レポートビューア、レポートビルダおよび管理コンソール間の安全な通信を実現できます。SSL を有効にするには、自己署名証明書を作成します。この証明書により SSL を有効にできますが、この自己署名証明書の有効期限は 90 日間です。90 日間の期限が切れる前に、この証明書を認証機関に送って署名入りデジタル証明書を受け取るか、別の自己署名証明書を作成する必要があります。署名入りデジタル証明書を受け取ったら、Web アクセスサーバーアプリケーションを使用してインポートする必要があります。また、Web アクセスサーバーを使用して、OVPI のインストール後に SSL の設定を変更することもできます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

SSL 通信を有効にして自己署名証明書を作成するには、以下の手順に従います。

- a **[SSL を有効にする]** チェックボックスをクリックしてオンにします。

このオプションを選択しても、標準の HTTP リスナーは無効にはなりません。これで、安全な SSL ポートと安全の確保されていない HTTP ポートが両方とも有効になります。

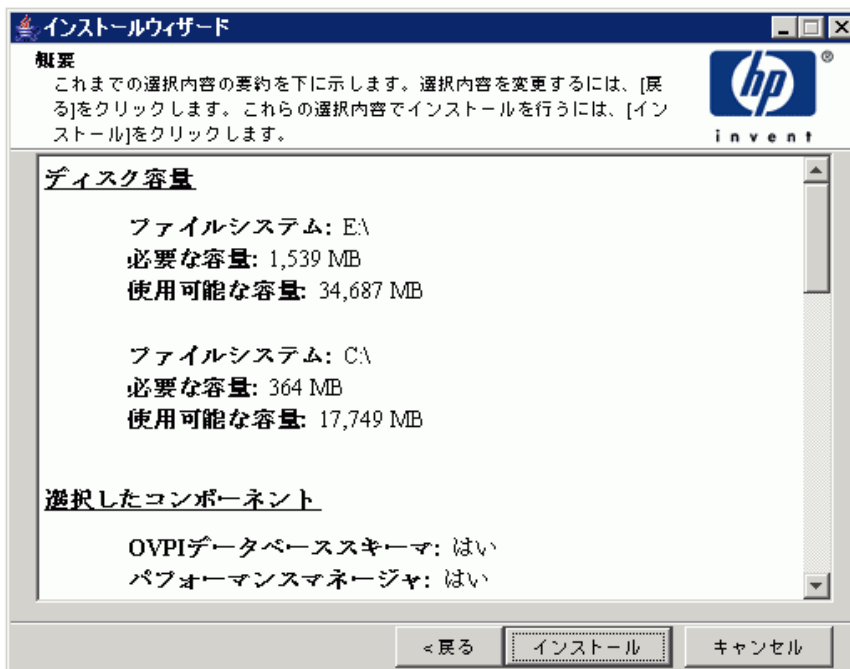
— **[SSL ポート ]:** デフォルト値のままにするか、新しい値を指定します。

— **[ キーストアパスワード ]:** 6 文字以上のパスワードを入力します。  
パスワードは記録して安全な場所に保管してください。これは署名入り証明書を作成するときに必要になります。

自己署名証明書を作成すると、証明書リポジトリに保存されます。このパスワードにより、Web アクセスサーバーは証明書リポジトリにアクセスできます。

- b 残りのフィールドは、証明書署名機関によって検証および署名される必要のある、SSL キーを生成するのに必要な情報を要求します。この情報は、証明書の有効性を確認するために、証明書のチェック担当者が使用します。
- **[ 組織 ]**: 省略可能。自分が所属する組織名を入力します ( 「ABC システム株式会社」 など ) 。
  - **[ 組織単位 ]**: 省略可能。部または課の名前を入力します ( 「Northeast Sales」 など ) 。
  - **[ 市町村 ]**: 省略可能。所在地の市町村名を入力します ( 「Suginami-ku」 など ) 。
  - **[ 州 / 都道府県 ]**: 省略可能。都道府県名を入力します ( 「Tokyo」 など ) 。
  - **[ 国 ]**: 必須。[ 国 ] ボックスに 2 文字の国コードを入力します ( 「JP」 など ) 。
- c **[ 適用 ]** をクリックします。
- d **[ OK ]** をクリックして **[ Web アクセスサーバーの設定 ]** ウィンドウに戻ります。

- 3 **[次へ]** をクリックして続行します。**[概要]** ウィンドウが開きます。



### タスク 13: インストール情報の確認

**[概要]** ウィンドウで、インストールの選択内容を確認します。

- 1 必要があれば、**[戻る]** をクリックして前のウィンドウに戻り、変更します。変更が完了したら、**[次へ]** をクリックして**[概要]** ウィンドウまで戻ります。
- 2 **[インストール]** をクリックして続行します。**[インストールの進捗状況]** ウィンドウが開きます。



## タスク 14: インストールの終了

[インストールの進捗状況] ウィンドウでインストールの進捗状況を確認できます。インストールプロセスが完了すると、インストールが成功したかどうかを示す情報が表示されます。

- OVPI のインストールが正常に終了した場合は、**[完了]** をクリックします。  
UNIX システムの場合：インストールは終了です。  
Windows システムの場合：システムを再起動し、インストールを完了します。
- OVPI のインストールが失敗した場合は、次の手順を実行します。
  - a [インストールの進捗状況] ウィンドウの一番下にある **[詳細]** をクリックし、詳細情報を確認します。
  - b サポートに問い合わせます(4 ページの「[サポート](#)」を参照してください)。

## タスク 15: 必要に応じたその他の OVPI コンポーネントのインストール

Web アクセスサーバーをインストールするには、146 ページの「[Web アクセスサーバーのインストール](#)」に進んでください。

リモートポーターをインストールするには、156 ページの「[リモートポーターコンポーネントのインストール](#)」に進んでください。

クライアントアプリケーションをインストールするには、153 ページの「[OVPI クライアントのみのインストール](#)」に進んでください。

# Web アクセスサーバーのインストール


データベースをインストールし稼動してから、Web アクセスサーバーをインストールします。

インストール中に、リモート管理サーバーのホスト名およびポート番号を要求されます。これによって、インストールプログラムがデータベースシステムからデータベースの情報をダウンロードします。データベースをまだインストールしていない場合は、インストールが続行されます。ただし、インストール後に管理コンソールを使用してデータベースシステムの設定をする必要があります。

手順の大部分は、スタンドアロンシステムへの Web アクセスサーバーのインストールと同じです。

## タスク 1: OVPI インストールプログラムの起動

- 1 まだ OVPI インストールプログラムを起動していない場合は、ここで起動します。
- 2 [セットアップ] ウィンドウが開きます。ウィンドウの [インストール] セクションから **[OVPI 5.3.0]** を選択します。
- 3 [ようこそ] ウィンドウが開きます。[ようこそ] ウィンドウを確認し、**[次へ]** をクリックして続行します。
- 4 [使用許諾条件] ウィンドウが開きます。使用許諾条件に同意し、**[次へ]** をクリックして続行します。

 続行するには、使用許諾条件に同意する必要があります。**[キャンセル]** をクリックすると、使用許諾条件に同意しないでインストールを終了するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

## タスク 2: インストールする OVPI コンポーネントの選択

[コンポーネントの選択] ウィンドウが表示されます。このウィンドウで、インストールするコンポーネントを選択します。

- 1 ウィンドウの [インストール] セクションから、**[Web アクセスサーバー]** をクリックして選択します。他のコンポーネントの選択は解除します。
- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。

### タスク 3: OVPI コンポーネントのインストール先ディレクトリの指定

すでに別の **OVPI** コンポーネントをこのシステムにインストールしている場合は、ディレクトリ情報は提供済みです。タスク 4 に進みます。

[インストール先フォルダ] ウィンドウで、**OVPI** ソフトウェアのインストール先ディレクトリを指定します。インストール先ディレクトリは、**NFS** マウントディレクトリ、**UNIX** ソフトリンク、**UNIX** ハードリンクドライブ、**Windows** マップドライブのいずれでも構いません。

- 1 デフォルトのインストール先ディレクトリのままにするか、別のディレクトリを指定します。パス名には、スペースを入れることはできません。
  - インストール先ディレクトリが存在しない場合は、インストールプログラムによって作成されます。
  - インストール先ディレクトリがすでに存在していて、データが入っている場合は、そのディレクトリが空でないことを警告するメッセージが表示されます。
  - インストールプログラムがアクセスできないファイルシステム上のインストール先ディレクトリを指定した場合は、警告メッセージが表示されます。有効なディレクトリを指定するまで、インストールは続行できません。
- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。[データベースの選択] ウィンドウが開きます。

### タスク 4: Web アクセスサーバーの管理者とポートの指定

[Web アクセスサーバーの設定] ウィンドウが開きます。このウィンドウを使用して、Web アクセスサーバーがリスンする **HTTP** ポートと、Web アクセスサーバー用の **OVPI** 管理者アカウントを作成します。

- 1 以下のパラメータの値を入力します。
  - **[ユーザー名]:** Web アクセスサーバー管理者のデフォルトのユーザー名をそのまま使用するか、新しい名前を入力します。このアカウントは Web アクセスサーバーへのログオンに使用します。
    - ▶ このアカウントは **OVPI** の実行環境を保存するのに使用するもので、オペレーティングシステムへのログオンに使用する **trendadm** アカウント (**UNIX** のインストールのみ) と混同しないようにしてください。

ユーザー名とパスワードで使用できる最小および最大文字列長や文字に制限はありません。ユーザー名およびパスワードの作成に関する会社のポリシーに準拠することをお勧めします。

- **[パスワード]: Web** アクセスサーバー管理者アカウントのパスワードを入力します。

Web アクセスサーバーアプリケーションを使用して、OVPI のインストール後にパスワード規則を変更することができます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

- **[パスワードの確認]:** パスワードを再入力します。
- **[HTTP ポート]: Web** アクセスサーバーの管理者のデフォルトのポート (80) をそのまま使用するか、新しいポート番号を入力します。開いているポートならどのポートでも使用できます。

- 2 必要に応じて、**[詳細]** をクリックして **[詳細設定]** ダイアログボックスを開き、以下のタブを選択します。

- **[ディレクトリ]:** レポートディレクトリの場所を変更するには、**ディレクトリ** (下記) を参照してください。
- **[OVPI ユーザー]:** ユーザーアカウントを作成および変更するには、**OVPI ユーザー** (下記) を参照してください。
- **[SSL の設定]:** SSL 通信を有効にするには、149 ページの **「SSL の設定」** を参照してください。

- 3 **[次へ]** をクリックして続行します。

### ディレクトリ

レポートディレクトリには、配布されたすべてのレポートが保存されます。レポートディレクトリの場所を変更するには、以下の手順に従います。

- 1 デフォルトのディレクトリのままにするか、新しいディレクトリを指定します。
- 2 **[適用]** をクリックします。
- 3 **[OK]** をクリックして **[Web アクセスサーバーの設定]** ウィンドウに戻ります。

## OVPI ユーザー

ユーザーアカウントは、**OVPI** クライアント (管理コンソール、レポートビルダ、レポートビューア、および **Web** アクセスサーバー) へのログオンに使用されます。

通常のユーザーアカウントまたは管理者アカウントを作成できます。通常のユーザーアカウントで **OVPI** クライアントにアクセスできます。管理者アカウントは、**Web** アクセスサーバーの管理機能 ([管理] リンク) にアクセスできます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

ユーザーアカウントを追加または変更するには、以下の手順に従います。

- 1 **[ユーザーの追加]** をクリックします。デフォルトのユーザー名 (**new-user**)、パスワード (**new-user**)、役割 (**user**) が、作成したユーザーアカウントとともに表示されます。
- 2 名前またはパスワードをダブルクリックして値を削除し、新しい値を入力します。役割として **[ユーザー]** または **[管理者]** を選択します。
- 3 **[適用]** をクリックします。

ユーザーアカウントを削除するには、以下の手順に従います。

- 1 ユーザー名を選択します。
- 2 **[ユーザの削除]** をクリックします。
- 3 **[適用]** をクリックします。
- 4 **[OK]** をクリックして **[Web アクセスサーバーの設定]** ウィンドウに戻ります。

OVPI のインストール後に、**Web** アクセスサーバーを使用してユーザーアカウントを作成、変更または削除することもできます。詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

## SSL の設定

SSL を使用すると、**Web** アクセスサーバーとサポートされている **Web** ブラウザ、レポートビューア、レポートビルダおよび管理コンソール間の安全な通信を実現できます。

SSL を有効にするには、自己署名証明書を作成します。この証明書により SSL を有効にできますが、この自己署名証明書の有効期限は 90 日間です。90 日間の期限が切れる前に、この証明書を認証機関に送って署名入りデジタル証明書を受け取るか、別の自己署名証明書を作成する必要があります。

署名入りデジタル証明書を受け取ったら、Web アクセスサーバーアプリケーションを使用してインポートする必要があります。また、Web アクセスサーバーを使用して、OVPI のインストール後に SSL の設定を変更することもできます。詳細は、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。

SSL 通信を有効にして自己署名証明書を作成するには、以下の手順に従います。

1 **[SSL を有効にする]** チェックボックスをクリックしてオンにします。

このオプションを選択しても、標準の HTTP リスナーは無効にはなりません。これで、安全な SSL ポートと安全の確保されていない HTTP ポートが両方とも有効になります。

— **[SSL ポート]**: デフォルト値のままにするか、新しい値を指定します。

— **[キーストアパスワード]**: 6 文字以上のパスワードを入力します。パスワードは記録して安全な場所に保管してください。これは署名入り証明書を作成するときに必要になります。

自己署名証明書を作成すると、証明書リポジトリに保存されます。このパスワードにより、Web アクセスサーバーは証明書リポジトリにアクセスできます。

残りのフィールドは、証明書署名機関によって検証および署名される必要のある、SSL キーを生成するのに必要な情報を要求します。この情報は、証明書の有効性を確認するために、証明書のチェック担当者が使用します。

— **[組織]**: 省略可能。自分が所属する組織名を入力します(「ABC システム株式会社」など)。

— **[組織単位]**: 省略可能。部または課の名前を入力します(「Northeast Sales」など)。

— **[市町村]**: 省略可能。所在地の市町村名を入力します(「Suginami-ku」など)。

— **[州/都道府県]**: 省略可能。都道府県名を入力します(「Tokyo」など)。

— **[国]**: 必須。[国] ボックスに 2 文字の国コードを入力します(「JP」など)。

- 2 **[適用]** をクリックします。
- 3 **[OK]** をクリックして **[Web アクセスサーバーの設定]** ウィンドウに戻ります。

### リモートデータベースに関する情報の指定

[リモート管理サーバーの設定] ウィンドウが開きます。このウィンドウを使用して、検索に必要な情報を指定し、リモート **OVPI** データベースに接続するために必要なシステムの情報をダウンロードします。

- 1 以下のパラメータの値を入力します。
  - **[リモート管理サーバーのホスト]**: データベースホストの名前を入力します。
  - **[リモート管理サーバーのポート]**: データベースホストの **HTTP** ポート番号を入力します。

システムがデータベースに接続してデータベース情報を取得できない場合は、警告メッセージが表示されます(インストールを続行する場合は、インストール後に管理コンソールを使用してデータベース接続を設定する必要があります)。

- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。

## タスク 5: インストール情報の確認

[概要] ウィンドウで、インストールの選択内容を確認します。

- 1 必要があれば、**[戻る]** をクリックして前のウィンドウに戻り、変更します。変更が完了したら、**[次へ]** をクリックして [概要] ウィンドウまで戻ります。
- 2 **[インストール]** をクリックして続行します。[インストールの進捗状況] ウィンドウが開きます。

## タスク 6: インストールの終了

[インストールの進捗状況] ウィンドウでインストールの進捗状況を確認できます。インストールプロセスが完了すると、インストールが成功したかどうかを示す情報が表示されます。

- OVPI のインストールが正常に終了した場合は、**[完了]** をクリックします。
  - UNIX システムの場合：インストールは終了です。
  - Windows システムの場合：システムを再起動し、インストールを完了します。
- OVPI のインストールが失敗した場合は、次の手順を実行します。
  - a [インストールの進捗状況] ウィンドウの一番下にある **[詳細]** をクリックし、詳細情報を確認します。
  - b サポートに問い合わせます (4 ページの「**サポート**」を参照してください)。



Windows システムの場合のみ：Web アクセスサーバーをインストールしたシステムにハードウェア障害が発生した場合は、Web アクセスサーバーを新しいシステムに再インストールします。レポートを配布した場合（設定作業）は、OVPI データベースをインストールしたシステムで `deploytool` コマンドを実行し、Web アクセスサーバーにレポートを再配布します。`deploytool` コマンドの詳細は、『Performance Insight Reference Guide』を参照してください。

## タスク 7: 必要に応じたその他の OVPI コンポーネントのインストール

クライアントアプリケーションをインストールするには、153 ページの「**OVPI クライアントのみのインストール**」を参照してください。

リモートポーターをインストールするには、156 ページの「**リモートポーターコンポーネントのインストール**」を参照してください。



# OVPI クライアントのみのインストール

OVPI クライアントは、OVPI とそのユーザー間のインタフェースを提供するもので、ネットワーク接続されたシステム上のグループとしてインストールされます。OVPI クライアントの一覧は、18 ページの「[OVPI クライアント](#)」を参照してください。

## タスク 1: OVPI インストールプログラムの起動

- 1 まだ OVPI インストールプログラムを起動していない場合は、ここで起動します。
- 2 [セットアップ] ウィンドウが開きます。ウィンドウの [インストール] セクションから **[OVPI 5.3.0]** を選択します。
- 3 [ようこそ] ウィンドウが開きます。[ようこそ] ウィンドウを確認し、**[次へ]** をクリックして続行します。
- 4 [使用許諾条件] ウィンドウが開きます。使用許諾条件に同意し、**[次へ]** をクリックして続行します。




続行するには、使用許諾条件に同意する必要があります。**[キャンセル]** をクリックすると、使用許諾条件に同意しないでインストールを終了するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

## タスク 2: インストールする OVPI コンポーネントの選択

[コンポーネントの選択] ウィンドウが表示されます。このウィンドウで、インストールするコンポーネントを選択します。

- 1 ウィンドウの [インストール] セクションから、**[OVPI クライアント]** をクリックして選択します。他のコンポーネントの選択は解除します。
- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。

### タスク 3: OVPI ソフトウェアのインストール先ディレクトリの指定

-  すでに別の **OVPI** コンポーネントをこのシステムにインストールしている場合は、ディレクトリ情報は提供済みです。154 ページの **タスク 4** に進みます。

[インストール先フォルダ] ウィンドウで、**OVPI** ソフトウェアのインストール先ディレクトリを指定します。インストール先ディレクトリは、**NFS** マウントディレクトリ、**UNIX** ソフトリンク、**UNIX** ハードリンクドライブ、**Windows** マップドライブのいずれでも構いません。

- 1 デフォルトのインストール先ディレクトリのままにするか、別のディレクトリを指定します。パス名には、スペースを入れることはできません。
  - インストール先ディレクトリが存在しない場合は、インストールプログラムによって作成されます。
  - インストール先ディレクトリがすでに存在していて、データが入っている場合は、そのディレクトリが空でないことを警告するメッセージが表示されます。
  - インストールプログラムがアクセスできないファイルシステム上のインストール先ディレクトリを指定した場合は、警告メッセージが表示されます。有効なディレクトリを指定するまで、インストールは続行できません。
- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。[データベースの選択] ウィンドウが開きます。

### タスク 4: Web アクセスサーバーにアクセスするのに必要な情報の指定

[リモートの **Web** アクセスサーバーの設定] ウィンドウが開きます。このウィンドウを使用して、**Web** アクセスサーバーをインストールする場所についての情報を入力します。

- 1 次のパラメータをデフォルト値のままにするか、新しい値を入力します。
  - **[Web アクセスサーバーホスト]:** Web アクセスサーバーの名前を入力します。
  - **[Web アクセスサーバーポート]:** Web アクセスサーバーのポート番号を入力します。
- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。

## タスク 5: インストール情報の確認

[概要] ウィンドウで、インストールの選択内容を確認します。

- 1 必要があれば、**[戻る]** をクリックして前のウィンドウに戻り、変更します。変更が完了したら、**[次へ]** をクリックして [概要] ウィンドウまで戻ります。
- 2 **[インストール]** をクリックして続行します。[インストールの進捗状況] ウィンドウが開きます。

## タスク 6: インストールの終了

[インストールの進捗状況] ウィンドウでインストールの進捗状況を確認できます。インストールプロセスが完了すると、インストールが成功したかどうかを示す情報が表示されます。

- OVPI のインストールが正常に終了した場合は、**[完了]** をクリックします。
  - UNIX システムの場合：インストールは終了です。
  - Windows システムの場合：システムを再起動し、インストールを完了します。
- OVPI のインストールが失敗した場合は、次の手順を実行します。
  - a [インストールの進捗状況] ウィンドウの一番下にある **[詳細]** をクリックし、詳細情報を確認します。
  - b サポートに問い合わせます (4 ページの「サポート」を参照してください)。

## タスク 7: 必要に応じたその他の OVPI コンポーネントのインストール

リモートポラーをインストールするには、156 ページの「リモートポラーコンポーネントのインストール」に進んでください。

# リモートポラーコンポーネントのインストール

お使いのシステムに **OVPI** パフォーマンスマネージャをインストール済みの場合は、リモートポラーコンポーネントをインストールする必要はありません。リモートポラーコンポーネントは **OVPI** パフォーマンスマネージャと一緒にインストールされています。リモートポラーシステムはパフォーマンスマネージャを使用しません。

## タスク 1: OVPI インストールプログラムの起動

- 1 まだ **OVPI** インストールプログラムを起動していない場合は、ここで起動します。117 ページの「**インストールプログラムの起動**」を参照してください。
- 2 [セットアップ] ウィンドウが開きます。ウィンドウの [インストール] セクションから [**リモートポラー**] を選択します。
- 3 [ようこそ] ウィンドウが開きます。[ようこそ] ウィンドウを確認し、[**次へ**] をクリックして続行します。
- 4 [使用許諾条件] ウィンドウが開きます。使用許諾条件に同意し、[**次へ**] をクリックして続行します。続行するには、使用許諾条件に同意する必要があります。[**キャンセル**] をクリックすると、使用許諾条件に同意しないでインストールを終了するかどうかを確認するメッセージが表示されます。

## タスク 2: OVPI コンポーネントのインストール先ディレクトリの指定



すでに別の **OVPI** コンポーネントをこのシステムにインストールしている場合は、ディレクトリ情報は提供済みです。**タスク 3** に進みます。

[インストール先フォルダ] ウィンドウで、**OVPI** ソフトウェアのインストール先ディレクトリを指定します。インストール先ディレクトリは、**NFS** マウントディレクトリ、**UNIX** ソフトリンク、**UNIX** ハードリンクドライブ、**Windows** マップドライブのいずれでも構いません。

- 1 デフォルトのインストール先ディレクトリのままにするか、別のディレクトリを指定します。パス名には、スペースを入れることはできません。
  - インストール先ディレクトリが存在しない場合は、インストールプログラムによって作成されます。

- インストール先ディレクトリがすでに存在していて、データが入っている場合は、そのディレクトリが空でないことを警告するメッセージが表示されます。
  - インストールプログラムがアクセスできないファイルシステム上のインストール先ディレクトリを指定した場合は、警告メッセージが表示されます。有効なディレクトリを指定するまで、インストールは続行できません。
- 2 **[次へ]** をクリックして続行します。[データベースの選択] ウィンドウが開きます。

### タスク 3: データベースに関する情報の指定

[リモート管理サーバーの設定] ウィンドウが開きます。このウィンドウを使用して、検索に必要な情報を指定し、リモート **OVPI** データベースに接続するために必要なシステムの情報をダウンロードします。

- 1 以下のパラメータの値を入力します。
  - **[リモート管理サーバーのホスト]**: データベースホストの名前を入力します。
  - **[リモート管理サーバーのポート]**: データベースホストの **HTTP** ポート番号を入力します。

この情報を使用して、パフォーマンスマネージャが稼働している **OVPI** サーバーと、リモートポーラーシステムを自動的に接続することができます。最初に接続したときに、情報ブロックが **OVPI** サーバーからダウンロードされ保存されます。

### タスク 4: ポーリングの収集の設定

[パフォーマンスマネージャの設定] ウィンドウが開きます。このウィンドウを使用して、収集したデータをデータベースに格納する前に保存しておくために使用するキャッシュディレクトリを確認します。これにより、データベースが短時間シャットダウンされたときのデータ損失を防止できます。

- 1 デフォルトのディレクトリのままにするか、ポーリングデータをキャッシュするために使用する完全修飾パスを入力します。
  - ▶ 収集が正常に動作するには、キャッシュディレクトリがあるディスクパーティションの **5%** の空き領域に加えて、さらに **512MB** の空き領域が必要です。たとえば、ディスクパーティションが **10GB** の場合は、**1 GB** の空き領域が必要です。

- 2 必要に応じて、**[詳細]**をクリックして**[OVPI 詳細設定]** ウィンドウを開き、ログファイルのディレクトリを指定することができます。
  - a デフォルトのパスのままにすると、**OVPI** をインストールしたディレクトリの下にログディレクトリ (指定するディレクトリにかかわらずここで特定のログファイルが管理される) が作成されます。このディレクトリを変更するには、ログファイルを格納するディレクトリのパスを入力します。
  - b **[OK]** をクリックして変更を適用し、**[パフォーマンスマネージャの設定]** ウィンドウに戻ります。
- 3 **[次へ]** をクリックして続行します。

#### タスク 5: UNIX システムの場合のみ : オペレーティングシステムのアカウントの作成または変更

[パフォーマンスマネージャ用のオペレーティングシステムユーザー] ウィンドウが開きます。このウィンドウを使用して、**trendadm** という名称のオペレーティングシステムアカウントおよびグループを確認します。この **trendadm** は、**OVPI** が移動する環境を保存するときに使用します。



この **trendadm** アカウントはオペレーティングシステムにログオンするために使用するもので、後で作成する **Web** アクセスサーバーアプリケーションのログオンに使用する **trendadm** アカウントと混同しないようにしてください。

オペレーティングシステムおよびグループアカウントがすでに存在するかどうかによって、ウィンドウで別の情報が要求されます。

- オペレーティングシステムアカウントおよびグループが存在しない場合は、**OS** ユーザーの作成用のウィンドウが開きます。

次の値を入力し、**trendadm** アカウントのパスワードを作成します。

- a **[パスワード]**: パスワードの長さは 1 文字以上であれば、何文字でも構いません。また、すべての文字を使用できます。パスワードの作成に関する会社のポリシーに準拠することをお勧めします。
- b **[パスワードの確認]**: パスワードを再入力します。

**[次へ]** をクリックして続行します。

- オペレーティングシステムアカウントおよびグループが存在する場合は、既存の OS ユーザー用のウィンドウが開きます。

以下のいずれかをクリックします。

- **[ユーザー環境を変更する]**: このパラメータは、trendadm アカウントの .profile または .cshrc を OVPI 環境変数 (COLLECT\_HOME、DPIPE\_HOME、DPIPE\_TMP、および TREND\_LOG) で更新します。
- **[ユーザー環境を変更しない]**: このパラメータは、アカウントの .profile または .cshrc を OVPI 環境変数で更新しません。このオプションを選択した場合は、後から OVPI 環境変数を手作業で追加する必要があります。

**[次へ]** をクリックして続行します。

#### タスク 6: インストール情報の確認

[概要] ウィンドウで、インストールの選択内容を確認します。

- 1 必要があれば、**[戻る]** をクリックして前のウィンドウに戻り、変更します。変更が完了したら、**[次へ]** をクリックして [概要] ウィンドウまで戻ります。
- 2 **[インストール]** をクリックして続行します。[インストールの進捗状況] ウィンドウが開きます。

#### タスク 7: インストールの終了

[インストールの進捗状況] ウィンドウでインストールの進捗状況を確認できます。インストールプロセスが完了すると、インストールが成功したかどうかを示す情報が表示されます。

- OVPI のインストールが正常に終了した場合は、**[完了]** をクリックします。
  - UNIX システムの場合: インストールは終了です。
  - Windows システムの場合: システムを再起動し、インストールを完了します。
- OVPI のインストールが失敗した場合は、次の手順を実行します。
  - a [インストールの進捗状況] ウィンドウの一番下にある **[詳細]** をクリックし、詳細情報を確認します。
  - b サポートに問い合わせます (4 ページの「サポート」を参照してください)。

リモートポーラーは、ポーリングポリシーを設定するまでデバイスのポーリングを実行しません。ポーリングポリシーは、管理コンソールのポーリングポリシーアプリケーションで設定します。詳細は、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。

## OVPI クライアントのみのインストール

OVPI クライアントは、スタンドアロン環境または分散環境のシステムに、他の OVPI コンポーネントをインストールせずに単独でインストールすることができます。このインストールは「クライアントのみのインストール」という方法で、ユーザーはローカルのワークステーションからレポート作成や管理のために Web アクセスサーバーにアクセスすることができます。

クライアントのみのインストールをした場合は、管理コンソールの [ツール] メニューから使用可能なカタログマネージャ、MIB ブラウザ、SNMP 検出、タイプ検出、およびパッケージマネージャが使用できません。また、新しいデータテーブルまたはプロパティテーブルを登録することも、収集データをデータベースに自動的に追加することもできません。全機能を有効にするには、OVPI パフォーマンスマネージャもインストールする必要があります。

クライアントのみのインストールは、153 ページの「OVPI クライアントのみのインストール」の手順に従ってください。



## 6 インストール後の作業

### サービスパックの適用

OVPI のインストールが終了したら、OVPI システム用のサービスパックを確認する必要があります。サービスパックがある場合は、最新のサービスパックをダウンロードして適用してください。最新のサービスパックにはそれ以前のサービスパックが含まれます。

サービスパックにアクセスするには **HP Passport ID** が必要です。**HP Passport ID** の取得の方法については、4 ページの「サポート」を参照してください。

このリリース用の最新のサービスパックを検索するには、以下の手順に従ってください。

- 1 次の URL にアクセスします。  
**[www.openview.hp.com/downloads/index.html](http://www.openview.hp.com/downloads/index.html)**
- 2 **[Software patches]** をクリックします。  
HP Passport のサインインウィンドウが開きます。
- 3 HP Passport ID を入力してログオンします。
- 4 **Performance Insight** のソフトウェアパッチに移動し、サービスパックをダウンロードします。

### 分散システムでの共通キャラクタセットの使用

分散型構成では、中央データベースサーバー、サテライトデータベースサーバー、およびポーリングシステムが異なるプラットフォームにインストールされていることがあります。オペレーティングシステム間でデフォルトのデータベースキャラクタセットが異なる場合があるため、必ずすべてのデータベースインス

ダンスと OVPI クライアントが共通のキャラクタセットを使用するようにしてください。

## 証明書管理アプリケーションのルート権限

証明書管理アプリケーションは、`/opt/OV/bin` ディレクトリに保存されている `ovcert` および `ovconfchg` の各プログラムを使用します。これらのプログラムは、システム上のセキュリティ証明書の管理に使用されます。これらのプログラムの実行にはルートの権限が必要です。通常、ルートの権限を持たない `trendadm` ユーザーが証明書管理アプリケーションを起動します。`trendadm` ユーザープロファイルを使用してこのアプリケーションを起動している場合は、次のコマンドを使用して `ovswitchuser.sh` スクリプトを実行します。

```
/opt/OV/bin/ovswitchuser.sh -existinguser trendadm  
-existinggroup trendadm
```

詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』を参照してください。

## 設定作業の実行

すぐに実行する必要のある設定作業は、次のとおりです。

- 1 中央データベースサーバーにレポートパックをインストールし、それを Web アクセスサーバーに配布します。

レポートパックは、パフォーマンスデータを分析するレポートの集まりです。データパイプには、データ収集のときに使用する OVPI 用の指令が含まれています。データパイプをインストールすると、OVPI が特定のポーリング間隔で特定のタイプのパフォーマンスデータを収集するように設定されます。レポートパックをインストールすると、OVPI がデータパイプによって収集されたデータを要約して集約するように設定されます。レポートパックとデータパイプのインストールには、管理コンソールクライアントアプリケーションに付属している OVPI パッケージマネージャを使用します。さまざまな種類のレポートが選択できます。上級ユーザーは、独自のレポートを作成することもできます。レポートパックをインストールする前に、レポートパックのユーザーガイドを参照してください。Web アクセスサーバーが 2

台以上あるときは、各 Web アクセスサーバーにレポートを配布します。中央サーバーがポーリングしていない場合は、中央データベースサーバーにはデータパイプをインストールしないでください。

- 2 サテライトデータベースサーバーでネットワークを検出し、ポーリング予定のノードを探します。検出プロセスでは、特定の IP アドレスのデバイスがあるかどうか、デバイスが **SNMP** による管理が可能かどうか、またその場合、そのデバイスがどういった種類か（ルーター、ハブ、スイッチ）を検索するユーティリティを実行します。この情報を使用して、**OVPI** データベースインスタンスのテーブルに書き込みまたは更新をします。
- 3 サテライトデータベースサーバーにレポートパックおよびデータパイプをインストールします（配布はしません）。必ず、中央データベースサーバーにインストールしたレポートパッケージと同じレポートパッケージをサテライトデータベースサーバーにインストールしてください。サテライトデータベースサーバーをポーリングデバイスにしないときは、ポーリングを無効にします。
- 4 サテライトデータベースサーバーでタイプ検出を実行します。
- 5 分散型構成では、分散型構成用のレポートパックとポーリングポリシーを設定します。たとえば、リモートポーラーコンポーネントがインストールされているシステムからデータを収集するように、サテライトデータベースサーバーのレポートパッケージポーリングポリシーを変更する必要があります。
- 6 設定作業には、このほかにも以下のものがあります。
  - 特定の時間に機能を実行するようにスケジューリングする **trendtimer** ユーティリティの設定
  - データコレクションの作成（データの種類とソース）
  - ポーリングポリシーの設定
  - ユーザーとグループの設定
  - データを表示するためのビューの作成
  - **Web** アクセスサーバーの設定
  - **OVPI** データベースの設定
  - レポートのスケジュール設定と生成

すべての設定作業についての詳細は、『**HP OpenView Performance Insight 管理ガイド**』に記載されています。**OVPI** のインストールが終了したらすぐにこのガイドを読むようにしてください。

# システムのバックアップ

OVPI のインストール後、データベースおよびインストールした OVPI の両方のバックアップを行ってください。手順については、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。

## OVPI の稼動とデータ収集の確認

OVPI が稼動しデータを収集していることを確認するには、以下を実行します。

- Windows システムの場合
  - a [コントロールパネル] ウィンドウから、**[管理ツール]** をダブルクリックします。
  - b [管理ツール] ウィンドウが開きます。
  - c **[サービス]** アイコンをダブルクリックします。
  - d サービスの一覧から次の OVPI サービスを探します。
    - OVPI Timer
    - OVPI\_HTTP\_Serverステータスは **[開始]** になっているはずです。
  - e サービスが停止しているときは、サービス名をマウスで右クリックし、表示されるショートカットメニューから **[開始]** をクリックします。
- UNIX システムの場合

コマンド行で以下を入力します。

```
ps -ef | grep trendtimer
```

この出力は、次のようになります。

```
trendadm 1755      1  0  Apr 13  ?0:10 /usr/OVPI/bin/  
trendtimer -s /usr/OVPI/lib/trendtimer.sched
```

プロセスがリスト内に表示されない場合、OVPI が稼動していません。プログラムのパスは OVPI がインストールされている場所によって異なります。

また、jboss プロセス (Windows の OVPI HTTP Server サービス) を確認します。jboss は OVPI による正常なデータ収集には必要ありませんが、Web サーバーを使用する機能に必要なものです。たとえば、レポートの表示で必要になります。

以下のいずれかのコマンドを入力します。

- **ps -ef | grep java**

この出力は、次のようになります。

```
root 22284 22271 0 06:28:04 ?10:11 /opt/OV/nonOV/jdk/a/  
bin/java -Dprogram.name=run.sh -server -Xms32m -Xmx256m  
.....
```

- **ps -ef | grep jboss**

この出力は、次のようになります。

```
root 11250 11191 0 Jul10 pts/1 00:06:30 /opt/OV/  
nonOV/jdk/a/bin/java -Dprogram.name=run.sh -server -Xms32m  
-Xmx256m -Dtrend.home=/usr/OVPI -Dfile.encoding=UTF-8  
-Djava.awt.headless=true .....
```

プロセスがリスト内に表示されない場合、Web サーバーが稼動していません。プログラムのパスは OVPI がインストールされている場所によって異なります。

## OVPI の開始と停止

『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』に、各 OVPI コンポーネントの開始および停止の手順が記載されています。

# OVPI のインストールのトラブルシューティング

## OVPI のログファイル

OVPI のログファイルはすべて `$DPIPE_HOME/log/` にあります。

インストール中に使用されるログファイルは `install.log` という名前です。インストール中のトラブルは、このログファイルで確認します。

OVPI のログファイルの使用方法については、『**HP OpenView Performance Insight Troubleshooting Guide**』を参照してください。このガイドは、サポートサイトからオンラインでも利用できます(4 ページの「サポート」を参照してください)。

## Windows の場合のみ : NNM の統合

NNM が稼動している Windows システムに OVPI をインストールする際、OVPI のインストール中に **ERROR** または **WARNING** のメッセージが表示される場合があります。これは無視して構いません。

- インストール中に次のエラーが表示される場合があります。

```
failed to copy the file, msvcr70.dll, into the OVPI Obino
directory
```

- インストール終了後、[詳細] ウィンドウの [エラー] タブに次のメッセージが表示されます。

```
msiexec failed with exit status: 1603
```

[警告] タブに次のメッセージのどちらかまたは両方が表示されます。

```
Higher version of package might have been installed.Failed to
install
```

```
packageHPOvXpl-02.50.100-WinNT4.0-release.msi:{C9C24CC5-23CE-
4B55-8BC0-6D5785924842}
```

```
Higher version of package might have been installed.Failed to
install
```

```
packageHPOvJxpl-02.50.100-WinNT4.0-release.msi:{48C97C18-5AFA-
40FE-B51D-A4EECB02808}
```

## 7 OVPI のアンインストール

RDBMS をアンインストールする前に、OVPI をアンインストールする必要があります。

OVPI をアンインストールすると、OVPI が使用しているデータベースから OVPI に関連する表領域と `dsi_dpipe` ユーザーが削除されます。データベースそのものは削除されません。

### OVPI のアンインストールで事前に必要な作業

OVPI をアンインストールする前に、以下の作業を実行します。

- OVPI Timer の停止
- OVPI HTTP Server の停止
- OVPI プロセス完了の待機
- Sybase がまだ動作していることの確認

次の環境変数が保存されているディレクトリの場所を確認しておきます。これらのディレクトリは、アンインストール後に手動で削除する必要があります。

- `DPIPE_HOME`
- `DPIPE_TMP`
- `TREND_LOG`
- `COLLECT_HOME`

# OVPI のアンインストール手順

OVPI アンインストールウィザードを使用して、OVPI をアンインストールします。このウィザードは、OVPI のインストールによってシステムに追加されたファイルと、すべての OVPI コンポーネントをローカルシステムから削除します。ユーザーあるいはアプリケーションによって作成されたファイル（たとえばログファイルやレポート）は削除されません。

アンインストールウィザードの起動方法以外は、Windows システムと UNIX システムの OVPI のアンインストール手順は同じです。

## タスク 1: OVPI アンインストールウィザードの起動

- 1 ローカルシステムにログオンします。

Windows システムの場合：

- a 管理者アカウントを使用してログオンします。
- b Windows のデスクトップから、**[スタート]** をクリックします。[プログラム]、[HP OpenView]、[Performance Insight] の順に選択し、**[アンインストール]** をクリックします。

UNIX システムの場合：

- a `root` としてログオンします。
- b 次のコマンドを入力します。

```
$DPIPE_HOME/bin/uninstall
```

この場合、`$DPIPE_HOME` は OVPI がインストールされているディレクトリです。

- 2 [よろこ] ウィンドウが開きます。**[次へ]** をクリックして続行します。
- 3 OVPI をアンインストールしようとするシステムに OVPI データベーススキーマがインストールされている場合は、**タスク 2** に進みます。
- 4 OVPI をアンインストールしようとするシステムに OVPI データベーススキーマがインストールされていない場合は、**タスク 3** に進みます。



## タスク 2: Sybase 管理者パスワードの入力 ( ローカル Sybase データベースの場合のみ )。

[Sybase 管理者のパスワード] ウィンドウが開きます。以下のいずれかを実行します。

- Sybase 管理者パスワードを設定している場合は、[Sybase 管理者 (SA) のパスワード] ボックスにパスワードを入力し、[次へ] をクリックします。
- Sybase 管理者パスワードを設定していない場合は、[Sybase 管理者 (SA) のパスワード] ボックスを空白のままにし、[次へ] をクリックして続行します。

## タスク 3: 確認とアンインストール

[概要] ウィンドウが開きます。このウィンドウで、アンインストールするコンポーネントを確認します。

- 1 必要があれば、[戻る] をクリックして前のウィンドウに戻り、変更します。変更が完了したら、[次へ] をクリックして [概要] ウィンドウまで戻ります。
- 2 [アンインストール] をクリックして続行します。

## タスク 4: アンインストールの終了

[アンインストールの進捗状況] ウィンドウが開きます。ウィンドウにアンインストール中に発生した状況が表示されます。終了後、ウィンドウにはアンインストールが正常に終了したのかどうかが表示されます。

- OVPI のアンインストールが正常に終了した場合は、次の手順を実行します。
  - a [完了] をクリックします。
    - UNIX システムの場合: アンインストールは終了です。
    - Windows システムの場合: システムを再起動し、アンインストールを完了します。
  - b 172 ページの「OVPI のアンインストール後の作業」に進みます。
- OVPI のアンインストールが失敗した場合は、次の手順を実行します。
  - a [アンインストールの進捗状況] ウィンドウの一番下にある [詳細] をクリックし、詳細情報を確認します。
  - b サポートに問い合わせます (4 ページの「サポート」を参照してください)。

# OVPI の手動アンインストール (Windows システムの場合)

Windows システムで OVPI のアンインストールに失敗した場合は、手動で OVPI をアンインストールします。次の場合、OVPI のアンインストールが失敗する場合があります。

- OVPI プロセスが実行中の場合。ファイルの削除は失敗し、アンインストール終了後に警告が表示されます。
- アンインストール中に電源障害のような致命的な問題が発生した場合。
- OVPI データベースが稼動していないか、アンインストールの処理中にデータベースに接続できない場合。

## タスク 1: OVPI サービスの停止

- 1 [コントロールパネル] ウィンドウから、**[管理ツール]** をダブルクリックします。  
[管理ツール] ウィンドウが開きます。
- 2 **[サービス]** アイコンをダブルクリックします。
- 3 [サービス] ウィンドウから **[OVPI Timer]** を右クリックし、表示されるメニューから **[停止]** を選択します。
- 4 [サービス] ウィンドウから **[OVPI\_HTTP\_Server]** を右クリックし、表示されるメニューから **[停止]** を選択します。

## タスク 2: Web アクセスサーバーの削除

- 1 コマンドプロンプトウィンドウを開きます。
- 2 次のディレクトリに移動します。

```
installation_directory\nonOV\PiJBoss\4.0.5\bin
```

この場合、*installation\_directory* は OVPI がインストールされているディレクトリです。

- 3 次のコマンドを実行します。

```
JavaService.exe -uninstall OVPI_HTTP_Server
```

### タスク 3: Windows レジストリエントリの削除

レジストリエディタを使用して、次の Windows レジストリエントリを削除します。

[HKEY\_LOCAL\_MACHINE] > [SOFTWARE] > [Hewlett-Packard] > [HP  
OpenView] の順に開き、次のエントリを削除します。

Performance Insight

### タスク 4: OVPI Timer サービスの削除

- 1 コマンドプロンプトウィンドウを開きます。
- 2 次のディレクトリに移動します。

```
OVPI_HOME\bin
```

この場合、*OVPI\_HOME* は OVPI がインストールされているディレクトリです。

- 3 次のコマンドを入力します。

```
trendtimer -r
```

### タスク 5: 特定の環境変数の削除

- 1 [コントロールパネル] ウィンドウから [**システム**] をダブルクリックします。  
[システムのプロパティ] ダイアログボックスが開きます。
- 2 [**詳細**] タブをクリックし、[**環境変数**] ボタンをクリックします。[環境変数]  
ダイアログボックスが開きます。
- 3 以下の変数を削除します。
  - COLLECT\_HOME
  - DPIPE\_HOME
  - DPIPE\_TMP
  - TREND\_LOG
- 4 PATH 環境変数を編集し、OVPI に関連するものをすべて削除します。
- 5 完了したら、[**OK**] をクリックします。

### タスク 6: システムの再起動

## OVPI のアンインストール後の作業

OVPI の再インストール時のトラブルを防止するために、次のディレクトリを削除することをお勧めします。

- OVPI ディレクトリ
- .ovpi ディレクトリ

## OVPI のインストール先ディレクトリの削除

OVPI ディレクトリは、OVPI をインストールしたディレクトリです。

OVPI アンインストールウィザードによって、OVPI ディレクトリから OVPI インストールプログラムによってインストールされたファイルが削除されます。このウィザードでは、このディレクトリに保存されている作成されたファイル（ログファイル）、ユーザーが作成したファイル、インストールされたレポートパックに配布されたレポートは削除されません。



保存しておく必要のあるレポートやデータが OVPI ディレクトリの中にある場合は、続行する前にそれらのファイルを別の場所に移動しておいてください。

OVPI ディレクトリを削除するには、以下の手順に従います。

- UNIX システムの場合：
  - a OVPI がインストールされているシステムで新しいシェルウィンドウを開きます。
  - b 次のコマンドを入力します。

```
rm -rf $DPIPE_HOME/ovpi
```

この場合、`$DPIPE_HOME` は OVPI がインストールされているディレクトリです。たとえば、`/data` ディレクトリに OVPI をインストールした場合は、次のコマンドを入力します。

```
rm -rf /data/ovpi
```

- Windows システムの場合：以下のいずれかを実行します。
  - Windows エクスプローラで、**Performance Insight** ディレクトリを見つけ、右クリックします。表示されるメニューから **[削除]** を選択します。

— コマンドプロンプトウィンドウから、次のコマンドを入力します。

```
rmdir /s $DPIPE_HOME
```

この場合、**\$DPIPE\_HOME** は **OVPI** がインストールされているディレクトリです。

## 不要なディレクトリの削除

次の環境変数を保存しているディレクトリを手動で削除します。

- **DPIPE\_TMP**
- **TREND\_LOG**
- **COLLECT\_HOME**

## .ovpi ディレクトリの削除

.ovpi ディレクトリには、ユーザーのカスタム設定が保存されています。このディレクトリは、ユーザーがレポートビルダ、レポートビューア、または **Web** アクセスサーバーを実行したことがある場合のみ存在します。



.ovpi ディレクトリは、ユーザー自身が削除する必要があります。

.ovpi ディレクトリは隠しファイルです。このため、削除するにはディレクトリが見えるようにする必要があります。Windows でディレクトリの表示を変更し、隠しファイルおよび隠しディレクトリを表示します。ウィンドウで [ツール] > [フォルダ オプション] と選択し、[表示] タブで [すべてのファイルとフォルダを表示する] ラジオボタンを選択します。

.ovpi ディレクトリを削除するには、以下の手順を実行します。

- **UNIX システムの場合：**

.ovpi ディレクトリは **UNIX** ホームディレクトリにあります。

- a **OVPI** がインストールされているシステムで新しいシェルウィンドウを開きます。
- b ホームディレクトリから次のコマンドを入力します。

```
rm -rf .ovpi
```

- Windows システムの場合：

.ovpi ディレクトリは %SystemDrive%\Documents and Settings\ ユーザー名にあります。このディレクトリに移動し、以下のいずれかを実行します。

- Windows エクスプローラで、.ovpi ディレクトリを右クリックし、表示されるメニューから **[削除]** を選択します。
- コマンドプロンプトウィンドウから、次のコマンドを入力します。

```
rmdir /S .ovpi
```

## RDBMS のアンインストール

続いて RDBMS をアンインストールします。第 8 章「[Sybase RDBMS のアンインストール](#)」を参照してください。

## 8 Sybase RDBMS のアンインストール

### Windows にインストールした Adaptive Server 15.0.2 のアンインストール

- 1 アンインストールプログラムを実行する前に、すべてのサーバーをシャットダウンします。  
[コントロールパネル]の[サービス]オプションを使用してすべてのサービスを停止します。自動で起動されるようになっているサービスがある場合は、手動で起動するように変更します。システムを再起動して、メモリーにロードされている DLL を開放します。
- 2 [スタート]>[プログラム]>[Sybase]>[Adaptive Server Enterprise]>[Server Config]と選択し、[サーバーの削除]をクリックします。
- 3 [コントロールパネル]の[アプリケーションの追加と削除]を使用してアンインストールプログラムを起動します。
- 4 アンインストールプログラムの最初の画面が表示されたら、[次へ]をクリックして続行します。
- 5 [コンポーネントの選択]ウィンドウが開きます(すべてのコンポーネントが選択されています)。  
コンポーネントの選択を解除するには、チェックボックスをクリックしてチェックマークを外します。[次へ]をクリックして続行します。  
このマシンに SySAM Network License Server がインストールされている場合は、他の Sybase 製品によって使用されている可能性があります。このライセンスサーバーが使用されていないことがわかっている場合を除き、このコンポーネントのチェックマークは外します。
- 6 [概要]ウィンドウにアンインストールの内容が表示されます。[次へ]をクリックして続行します。

- 7 アンインストールプロセスが実行中であることを示すウィンドウが表示され  
ます。進捗バーは表示されません。  
場合によっては、インストール後にファイルが変更されたことを示し、削除  
する必要があるかを確認するためにポップアップが複数回表示されます。
- 8 アンインストール後にユーザーが作成したファイルが残った場合は、アンイ  
ンストーラーはそれらを削除するように指示します。
- 9 アンインストールプロセスが完了すると、最終ウィンドウが表示されます。  
**[完了]**をクリックするとアンインストールプログラムが終了します。
- 10 アンインストールプログラムは環境変数 (**DSLISTEN** および **DSQUERY**) を  
削除しません。[コントロールパネル]の[システム]オプションを使用して  
環境変数を削除してください。



# UNIX にインストールした Adaptive Server 15.0.2 のアンインストール

- 1 アンインストールプログラムを実行する前に、すべてのサーバーをシャットダウンします (Sybase 停止について書かれているインストールガイドの内容に変更があっても、Sybase の停止は同じです)。
- 2 アンインストールプログラムは `uninstall/ASESuite` にあります。  
以下の手順に従ってアンインストールプログラムを起動します。
  - a `SYBASE` ディレクトリに移動します。
  - b 次を入力し、アンインストールプログラムを実行します。

**`SYBASE/uninstall/ASESuite/uninstall`**

- 3 アンインストールプログラムの最初の画面が表示されたら、**[次へ]** をクリックして続行します。
- 4 [コンポーネントの選択] ウィンドウが開きます (すべてのコンポーネントが選択されています)。

コンポーネントの選択を解除するには、チェックボックスをクリックしてチェックマークを外します。**[次へ]** をクリックして続行します。

このマシンに **SySAM Network License Server** がインストールされている場合は、他の **Sybase** 製品によって使用されている可能性があります。このライセンスサーバーが使用されていないことがわかっている場合を除き、このコンポーネントのチェックマークは外します。

- 5 [概要] ウィンドウにアンインストールの内容が表示されます。**[次へ]** をクリックして続行します。
- 6 アンインストールプロセスが実行中であることを示すウィンドウが表示されます。進捗バーは表示されません。  
場合によっては、インストール後にファイルが変更されたことを示し、削除する必要があるかを確認するためにポップアップが複数回表示されます。
- 7 アンインストール後にユーザーが作成したファイルが残った場合は、アンインストーラーはそれらを削除するように指示します。
- 8 アンインストールプロセスが完了すると、最終ウィンドウが表示されます。**[完了]** をクリックするとアンインストールプログラムが終了します。



## 9 Sybase 15.0.2 へのアップグレード

Sybase 15.0.2 で追加された新機能を使用するには、Sybase を 15.0.2 にアップグレードする必要があります。

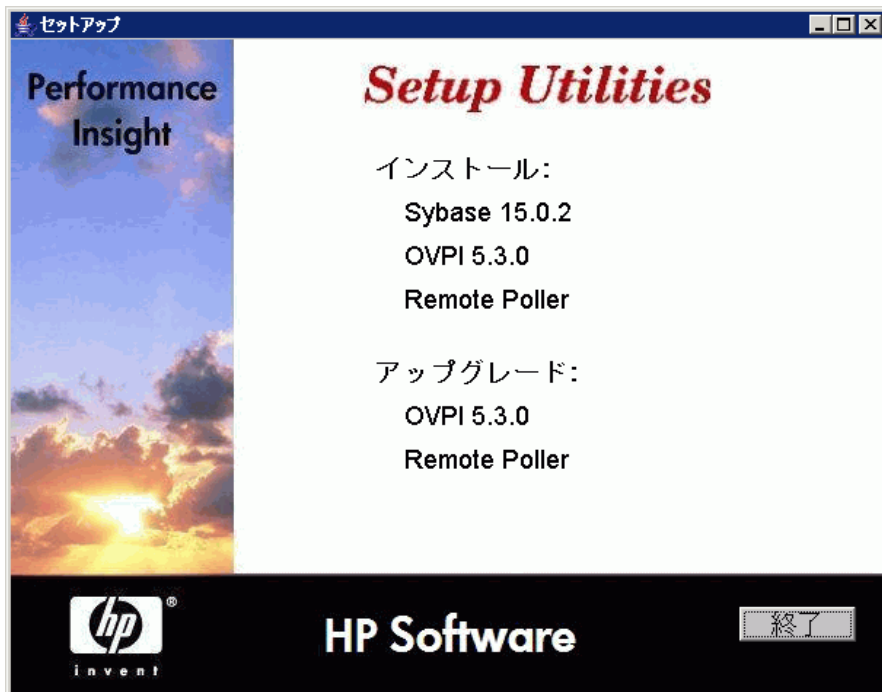
OVPI インストーラーを使用して、HP-UX および Solaris の各システムをアップグレードします。アップグレードウィザードは Windows システムでは使用できません。Windows システムをアップグレードするには、189 ページの「[Windows システムでの Sybase のアップグレード](#)」を参照してください。

### HP-UX、Linux、および Solaris システムでの Sybase のアップグレード

まず、システムに最新の Java のパッチが適用されていることを確認します (32 ページの「[実行中の Java 用パッチの確認](#)」を参照してください)。

アップグレードウィザードを使用して、Sybase をアップグレードします。以下の手順に従ってください。

- 1 製品 DVD からセットアップユーティリティを実行します。次の画面が表示されます。



- 2 [アップグレード]で、[Sybase 15.0.2]をクリックします。[ようこそ]画面が開きます。



- 3 **[次へ]** をクリックします。[Sybase 管理者のパスワード] ウィンドウが開きます。

The screenshot shows a Windows-style dialog box titled "HP ソフトウェアアップグレードウィザード". The main heading is "Sybase管理者のパスワード". Below the heading, there is a message: "Sybaseの管理者パスワードを入力します。この情報はSybase Adaptive Serverへのログオンにのみ使用され、保持されません。" To the right of this text is the HP logo and the word "invent". A text input field is labeled "Sybase管理者(SA)のパスワード:". At the bottom of the dialog, there are three buttons: "<戻る", "次へ >", and "キャンセル". The "次へ >" button is highlighted with a dotted border.

- 4 パスワードを入力します。[Sybase の設定] ウィンドウが開きます。

HP ソフトウェアアップグレードウィザード

**Sybase の設定**

Sybaseのインストール設定を入力します。詳細設定を入力するには[詳細]をクリックします。

インストールパス:  
C:\Sybase 参照

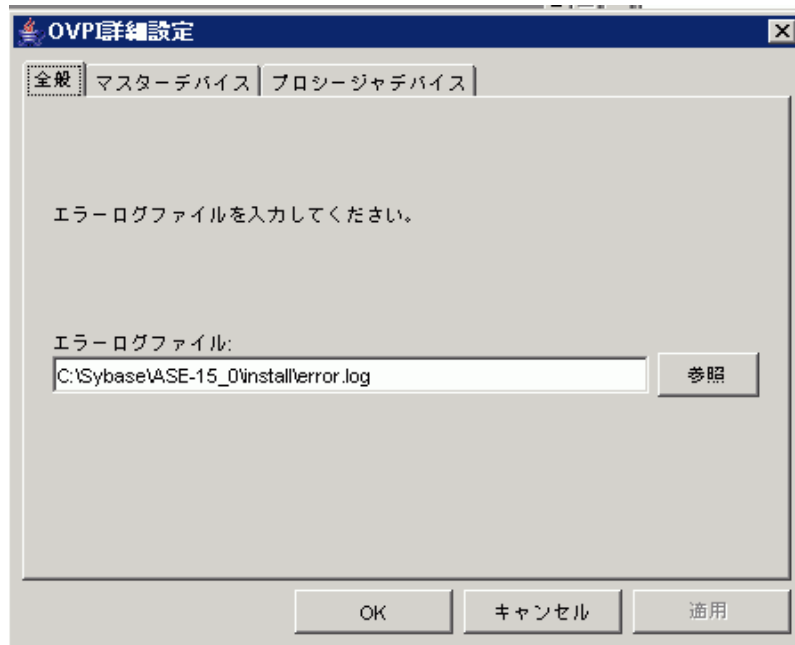
サーバー名 (DSQUERY):  
PIDW2

TCP/IPポート:  
5000

右のボタンをクリックすると詳細設定が可能です。 詳細 ...

< 戻る 次へ > キャンセル

- 5 必要な情報を入力し、**[次へ]**をクリックします。**[OVPI 詳細設定]** ウィンドウが開きます。**Sybase 15.0.1** から **15.0.2** へのアップグレードの場合は、**[詳細]** ボタンは押せなくなっています。



**[全般]** タブで、エラーログファイルを参照し、**[適用]** をクリックします。



- 6 [マスターデバイス] タブで、必要な情報を入力し、[適用] をクリックします。

The screenshot shows a dialog box titled "OVP詳細設定" (OVP Detailed Settings) with a close button (X) in the top right corner. The dialog has three tabs: "全般" (General), "マスターデバイス" (Master Device), and "プロシージャデバイス" (Procedure Device). The "マスターデバイス" tab is selected. The main area contains the following text and input fields:

- マスターデバイスの設定を入力します。
- デバイス名:
- デバイスファイル:
- デバイスのサイズ(MB):

At the bottom of the dialog, there are three buttons: "OK", "キャンセル" (Cancel), and "適用" (Apply).

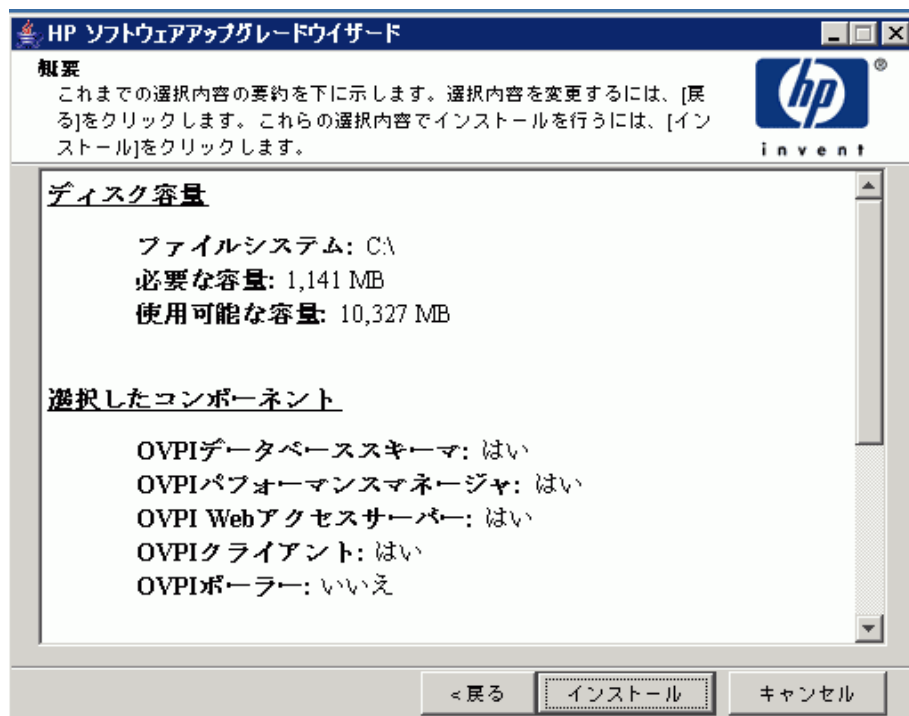
- 7 [プロシージャデバイス] タブで、必要な情報を入力し、[適用] をクリックします。

The screenshot shows a dialog box titled 'OVPI詳細設定' (OVPI Detailed Settings) with a close button (X) in the top right corner. The dialog has three tabs: '全般' (General), 'マスターデバイス' (Master Device), and 'プロシージャデバイス' (Procedure Device), with the latter being the active tab. The main area contains the following text and input fields:

- プロシージャデバイスの設定を入力します。
- デバイス名:
- デバイスファイル:
- デバイスのサイズ(MB):

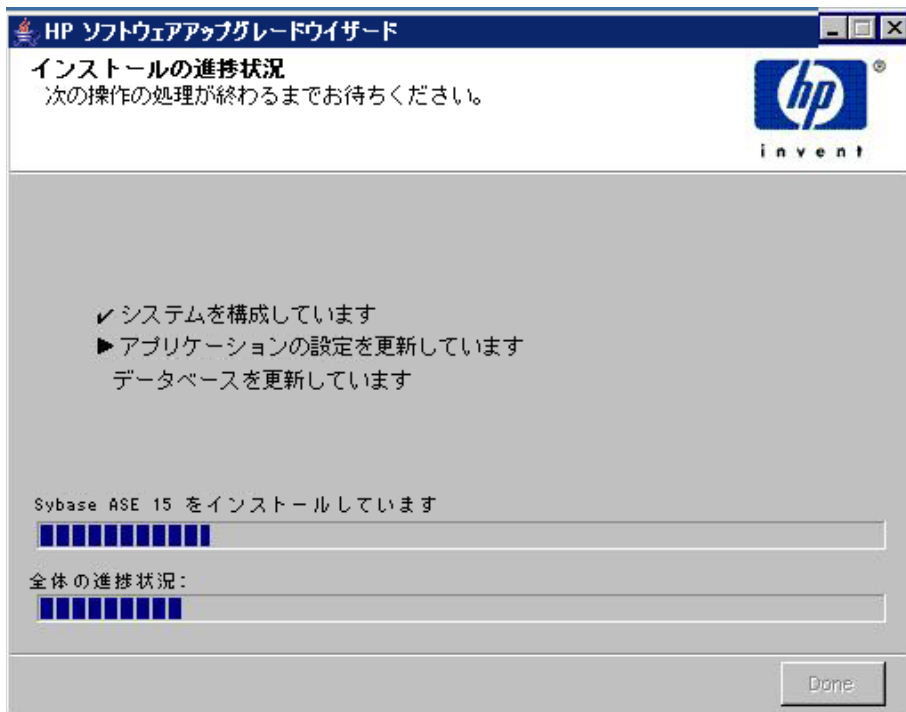
At the bottom of the dialog, there are three buttons: 'OK', 'キャンセル' (Cancel), and '適用' (Apply).

[概要] ウィンドウが開きます。



- 8 選択内容を確認します。修正するときは、[戻る] ボタンを使用します。[インストール] をクリックします。

[インストールの進捗状況] ウィンドウが開きます。



インストールは完了します。

アップグレードウィザードでアップグレードが完了できない場合は、手動でアップグレードします(189 ページの「Windows システムでの Sybase のアップグレード」を参照してください)。

# Windows システムでの Sybase のアップグレード

## Sybase 11.9 から 15.0.2 へのアップグレード

アップグレードウィザードは **Windows** システムでは使用できません。次の手動による手順を使う必要があります。

- 1 **trendtimer** を停止し、すべての **OVPI** プロセスが停止するまで待ちます。
- 2 既存の **Sybase 11.9** システム環境から、以下の手順を実行します。
  - a ファイル **C:\Sybase\SERVER\_NAME.cfg** のバックアップを行います。
  - b **isql** にログインして次のコマンドを実行し、パラメータの値を保存します。

```
sp_configure 'recovery interval in minutes'  
go  
sp_configure 'total memory'  
go  
sp_configure 'number of user connections'  
go  
sp_configure 'number of locks'  
go  
sp_configure 'max online engines'  
go  
sp_configure 'max network packet size'  
go  
sp_configure 'additional network memory'  
go  
sp_configure 'number of devices'  
go  
sp_configure 'procedure cache'  
go  
  
sp_configure 'number of open objects'  
go  
sp_configure 'number of open indexes'  
go  
  
sp_cacheconfig 'default data cache'  
go
```

### 3 Sybase 11.9 の dpipe\_db データベースのダンプを取得します。

#### a Sybase バックアップサーバーを設定して起動します。



バックアップサーバーはデフォルトで設定されています。Sybase 11.9 のインストーラーを使用すると、バックアップサーバーがデフォルトで設定されます。[サービス] ウィンドウで、利用可能なサービス一覧に <MachineName\_BS> というサービス名があることを確認します。

バックアップサーバーが見つからない場合は作成します。バックアップサーバーを作成するには、以下の手順に従います。

- 'Programs - Sybase - Server Config' を起動します。
- 左側のペインで [バックアップサーバー] を選択します。
- 右側のペインで [バックアップサーバーの作成] をクリックします。
- [バックアップサーバー名] ウィンドウで [続行] をクリックします。
- [ネットワークアドレス] をクリックし、[追加] をクリックします。
- [接続の入力] ウィンドウで、「マシン名, ポート番号」の形式 (machine\_name, 5001 など) で接続情報を追加します。
- [OK]、[OK]、[続行] と順にクリックします。

バックアップサーバーが準備できました。

#### b sa ユーザーとして isql にログインし、次のコマンドを実行します。ダンプファイルの有効なパスを指定する必要があります。

```
dump transaction dpipe_db with no_log
go

dump database dpipe_db to 'C:\DUMP\dpipe_db.dmp'
go
```

### 4 Sybase11.9 をアンインストールします。

### 5 必要な場合は、Windows 2003 にアップグレードします。OVPI 5.30 は、Windows 2003 のみに対応しています。

- 6 **OVPI 5.30** インストーラーを使用して **Sybase 15.0.2** をインストールします。サーバー名とポート番号は必ず、**Sybase 11.9** で使用していたものと同じにしてください。
- 7 バックアップサーバーを手動で設定します。これはデフォルトでは作成されません。
  - a [プログラム] > [Sybase] > [Adaptive Server Enterprise] > [Server Config] を起動します。
  - b 左側のペインで [**バックアップサーバー**] を選択します。
  - c 右側のペインで [**バックアップサーバーの作成**] をクリックします。バックアップサーバーの名前は SYB\_BACKUP とします。
  - d [バックアップサーバー名] ウィンドウで [**続行**] をクリックします。
  - e [**ネットワークアドレス**] をクリックし、 [**追加**] をクリックします。
  - f [接続入力] ウィンドウで、「マシン名, ポート番号」の形式 (machine\_name,5001 など) で接続情報を追加します。
  - g [**OK**]、 [**OK**]、 [**続行**] と順にクリックします。

バックアップサーバーが準備できました。
- 8 **Sybase 15.0.2** に dpipe\_db データベースを作成します。
  - a データデバイス、ログデバイス、および **temp** デバイスを作成します。このデバイスのサイズは、バージョン **11.9** のときと同じにします。ファイルのパス名およびデバイスのサイズを次のコマンドで変更します。サイズは **2K** ページ換算です。たとえば、**409600** は **800MB** のことです。



**Sybase** ホームディレクトリに dbfiles フォルダを作成します。この dbfiles フォルダの作成後に、dpipe\_db データベースを作成します。

**sa** ユーザーとして **isql** にログインし、次のコマンドを実行します。

```
print 'Creating the device dpipe_db0'
declare @vdevno int
select @vdevno = max(vdevno) + 1 from
master.dbo.sysdevices
disk init
name='dpipe_db0',physname='E:\sybase\dbfiles\dpipe_db0.dat',
vdevno = @vdevno ,size=409600
```

```

go

print  'Creating device dpipe_log0'
declare @vdevno int
select @vdevno = max(vdevno) + 1 from
master.dbo.sysdevices

disk init
name='dpipe_log0',physname='E:\sybase\dbfiles\dpipe_log0.
dat', vdevno = @vdevno ,size=204800
go

print  'Creating device dpipe_temp0'
declare @vdevno int
select @vdevno = max(vdevno) + 1 from
master.dbo.sysdevices

disk init
name='dpipe_temp0',physname='E:\sybase\dbfiles\dpipe_temp
0.dat', vdevno = @vdevno ,size=204800
go

```

- b **dpipe\_db** データベースを作成します。サイズは **Sybase 11.9** の **dpipe\_db** と同じにします。

```

create database dpipe_db on dpipe_db0 = 800 log on
dpipe_log0 = 400
go
alter database tempdb on dpipe_temp0 = 400
go

```

- 9 **Sybase 15.0.2** の設定値を復元します。

バージョン **11.9** のメモリー総量パラメータは、バージョン **15.0.2** では「最大メモリー」といいます。

バージョン **11.9** のプロシージャキャッシュ割合パラメータは、バージョン **15.0.2** では「プロシージャキャッシュサイズ」といいます。



プロシージャキャッシュサイズパラメータを設定する前に、割合からサイズの値を計算します。次の式で算出します。

$$\text{プロシージャキャッシュサイズ} = \text{メモリー総量} \times \text{プロシージャキャッシュ割合} \div 100$$

**isql** にログインし次のコマンドを実行します。値 **A** を、先ほど **Sybase 11.9** に保存した値 (上記の手順 **2** の **b** 参照) に置き換えます。

```
sp_configure 'allow updates to system tables', 1
go
sp_configure 'recovery interval in minutes', A
go
sp_configure 'max memory', A
go
sp_configure 'number of user connections', A
go
sp_configure 'number of locks', A
go
sp_configure 'max online engines', A
go
sp_configure 'max network packet size', A
go
sp_configure 'additional network memory', A
go
sp_configure 'number of devices', A
go
sp_configure 'procedure cache', A
go
sp_configure 'allow updates to system tables', 0
go

sp_configure 'number of open objects', A
go
sp_configure 'number of open indexes', A
go
sp_configure 'number of open partitions', 3000
go

sp_cacheconfig 'default data cache', A
go
```

- 10 ダンプを Sybase 15.0.2 にロードします。

```
load database dpipe_db from 'C:\DUMP\dpipe_db.dmp'  
go
```

エラーが発生する場合は、SYB\_BACKUP サーバーに接続されていない可能性があります。SYB\_BACKUP のエントリが C:\Sybase\ini\sql.ini ファイルに記載されていることを確認してください。C:\Sybase は Sybase をインストールしたフォルダーです。

```
online database dpipe_db  
go
```

- 11 dpipe\_db および dsi\_dpipe を設定します。適切なパスワードを dsi\_dpipe ユーザーに必ず設定してください。

```
print 'Setting bulkcopy, trunc and override options'  
exec sp_dboption dpipe_db, bulkcopy, true  
go  
exec sp_dboption dpipe_db, trunc, true  
go  
reconfigure with override  
go
```

```
print 'Adding a default user'  
exec sp_addlogin dsi_dpipe, PASSWORD  
go
```

```
print 'Adding required system roles to user.'  
go  
exec sp_role 'grant', 'sa_role', dsi_dpipe  
go  
exec sp_role 'grant', 'sso_role', dsi_dpipe  
go
```

```
print 'Making the user the default for dpipe_db'  
go  
exec sp_defaultdb dsi_dpipe, dpipe_db  
go
```

```
use dpipe_db  
go
```

```
print 'Making dsi_dpipe the owner of dpipe_db database'
```

```
exec sp_changedbowner dsi_dpiped, true
checkpoint
go

exit
```

## Sybase 15.0.1 から 15.0.2 へのアップグレード

Sybase 15.0.1 から 15.0.2 へのアップグレードは、以下の手順に従う必要があります。

- 1 管理者アカウントを使用してローカルシステムにログオンします。
- 2 isql プロンプトで次のコマンドを実行し、現在使用している Sybase Adaptive Server のバージョンが 15.x になっていることを確認します。  
1> **select @@version**  
2> **go**
- 3 サーバーが実行中であることを確認します。コマンドプロンプトで次のコマンドを実行すると、バージョン文字列を取得できます。  
**%SYBASE%\%SYBASE\_ASE%\bin\sqlsrvr -v**
- 4 Sybase ディレクトリのバックアップを行います。バージョン 15.0.2 の Adaptive Server をインストールすると、現在使用している Adaptive Server ソフトウェアが上書きされます。
- 5 OVPI インストール DVD を DVD-ROM ドライブに挿入します。
- 6 製品の DVD メディアの \Data\sybase ディレクトリに移動し、setup.exe をダブルクリックします。InstallShield ウィザードが開きます。
- 7 [ようこそ] ウィンドウを確認し、[次へ] をクリックして続行します。[エンドユーザー使用許諾契約] ウィンドウが開きます。
- 8 使用許諾条件に同意し、[次へ] をクリックします。
- 9 デフォルトのディレクトリ (C:\Sybase) のまま、[次へ] をクリックします。[インストール先ディレクトリの設定] ダイアログボックスが開きます。[はい] をクリックして続行します。

- 10 ニーズに最も適したセットアップタイプを選択し、**[次へ]**をクリックします。**[概要]**ウィンドウが開きます。
- 11 **[概要]**ウィンドウで、インストールの選択内容を確認します。必要があれば、**[戻る]**をクリックして前のウィンドウに戻り、変更します。変更が完了したら、**[次へ]**をクリックして**[概要]**ウィンドウまで戻ります。**[次へ]**をクリックして続行します。**[インストールの進捗状況]**ウィンドウが開きます。
- 12 Sybase ディレクトリへのファイルのロードが終了すると、新しい **Adaptive Server** を設定するように要求されます。**[Adaptive Server の設定]** および **[Unified Agent の設定]** チェックボックスをオフにし、**[次へ]**をクリックします。**[終了]**をクリックします。  
Sybase 15.0.2 がインストールされます。
- 13 **Adaptive Server** を再起動します。サーバーを再起動するには、以下の手順に従います。
  - a **[コントロールパネル]**ウィンドウから、**[管理ツール]**アイコンをダブルクリックします。**[管理ツール]**ウィンドウが開きます。
  - b **[サービス]**アイコンをダブルクリックします。**[サービス]**ウィンドウが開きます。
  - c Sybase SQLserver\_localhost を選択します (*localhost* は Sybase SQL Server の名前)。
  - d サービス名を右クリックし、表示されるショートカットメニューから **[停止]**を選択します。サービスが停止した後、サービス名をマウスで右クリックし、表示されるショートカットメニューから **[開始]**をクリックします。
  - e **[サービス]**ウィンドウと**[コントロールパネル]**ウィンドウを閉じます。
- 14 isql プロンプトで以下のコマンドを実行します。

```
1> select @@version
2> go
```

これで Sybase サーバーはバージョン 15.0.2 になっているはずですが。

# 10 OVPI 5.30 へのアップグレード

現在使用している OVPI が次のいずれかのバージョンであれば、OVPI 5.30 にアップグレードできます。

- OVPI 5.1 Service Pack 9 以上
- OVPI 5.1.1 Service Pack 9 以上
- OVPI 5.1.2 Service Pack 4 以上
- OVPI 5.20

OVPI 5.30 へのアップグレードは、スタンドアロン環境と分散環境のどちらでも可能です。この項で説明するインストールプロセスはすべての環境に適用されます。ただし、分散型構成では、最初にデータベーススキーマをアップグレードする必要があります。手順は第 9 章「[Sybase 15.0.2 へのアップグレード](#)」に記載されています。データベースがアップグレードされていれば、分散しているコンポーネントを任意の順序でインストールできます。

リモートポラーは OVPI とは別にアップグレードしますが、手順は同じです。

# アップグレード前の作業

OVPI 5.30 にアップグレードする前に、次の作業を完了しておく必要があります。

## タスク 1: Java パッチが実行されていることの確認

OVPI 5.30 には **Java 1.4.2.13** が搭載されています。**Java** はアップグレード時にシステムに自動的にロードされ、**OVPI** でインストールされた以前のバージョンの **Java** は置き換えられます。

オペレーティングシステムに必要な適切な **Java** パッチをインストールする必要があります (32 ページの「[実行中の Java 用パッチの確認](#)」を参照してください)。

## タスク 2: Sybase データベースのアップグレード

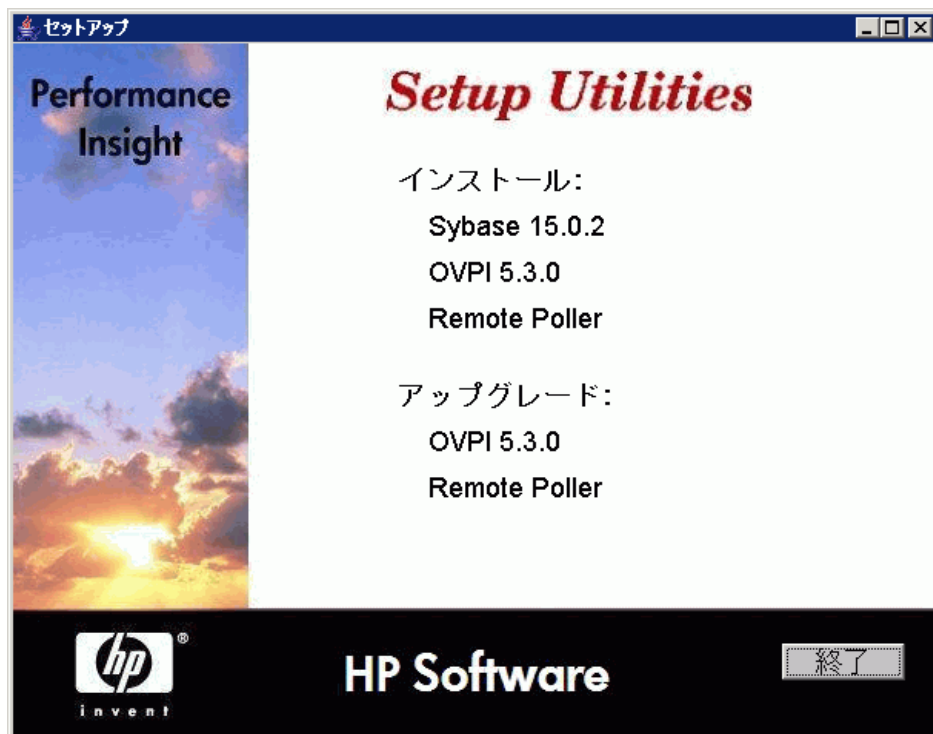
Sybase 15.0.2 にデータベースをアップグレードする必要があります。**Sybase** データベースのアップグレードの詳細は、[第 9 章「Sybase 15.0.2 へのアップグレード」](#)を参照してください。

## タスク 3: OVPI Timer の停止

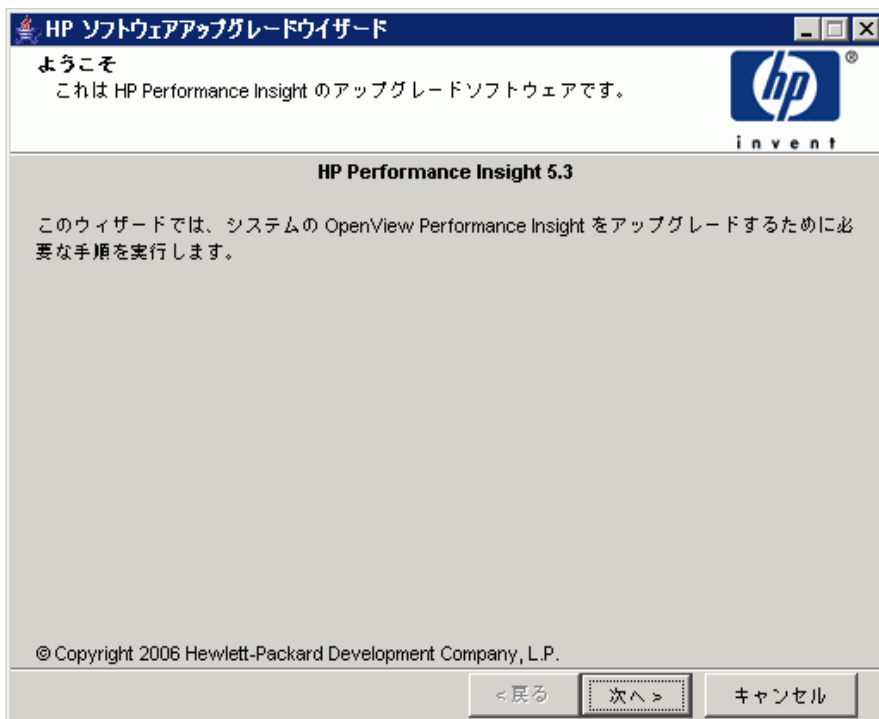
**OVPI Timer** を停止し、すべての **OVPI** プロセスが停止するまで待ちます。**OVPI Timer** の開始と停止の詳細は、『[HP OpenView Performance Insight 管理ガイド](#)』を参照してください。

# ウィザードを使用したアップグレード

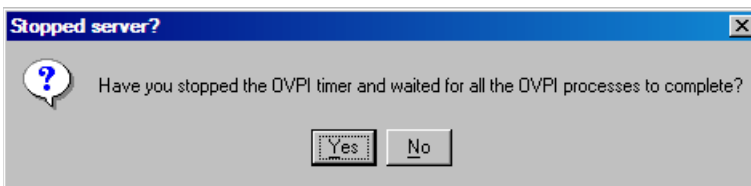
- 1 製品 DVD からセットアップユーティリティを実行します。次の画面が表示されます。



- 2 **[Upgrade 5.3.0]** を選択します。インストールウィザードが開きます。



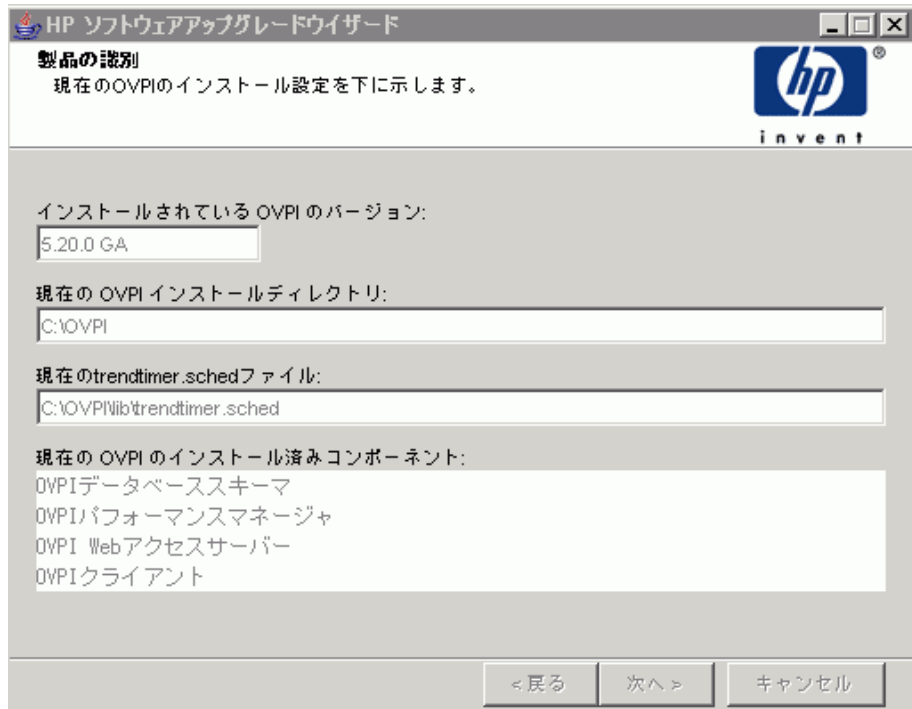
- 3 **[次へ]** をクリックします。[使用許諾条件] ウィンドウが開きます。
- 4 使用許諾条件に同意し、**[次へ]** をクリックします。確認ダイアログボックスが表示されます。



- 5 **OVPI Timer** を停止し、すべての **OVPI** プロセスが停止するまで待った後であれば、**[Yes]** をクリックします。

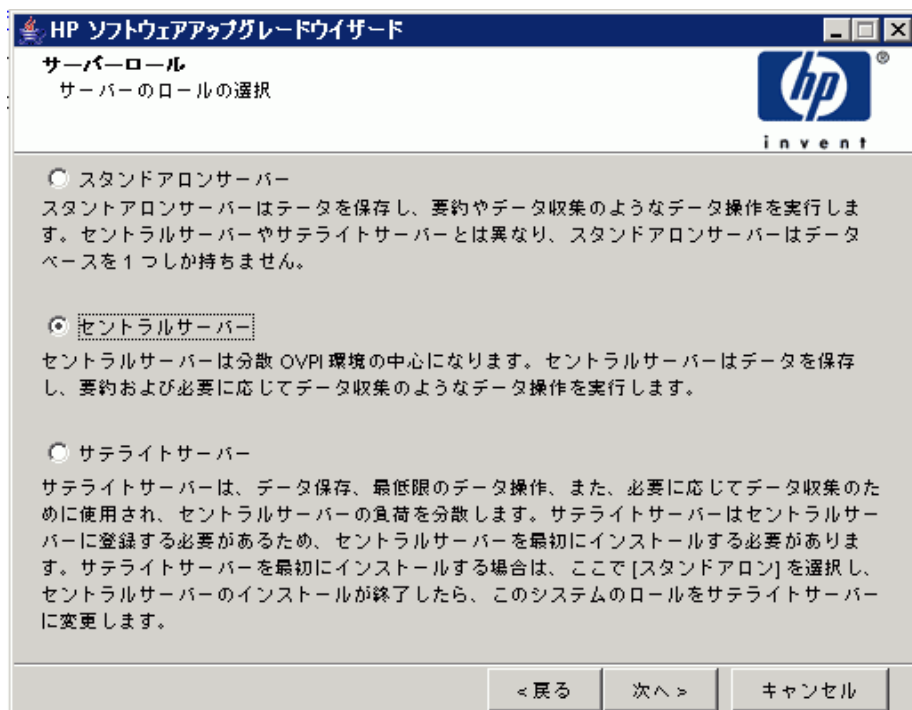


- 6 **[次へ]** をクリックします。[製品の識別] ウィンドウが開きます。



[製品の識別] ウィンドウには、インストール済みの既存のコンポーネントなど、現在インストールされている製品の情報が表示されます。

- 7 [次へ] をクリックします。[サーバーロール] ウィンドウが開きます。



8 OVPI をインストールする環境を選択します。

[サテライトサーバー]を選択すると、[セントラルサーバー登録]ウィンドウが開きます。ホスト名とポート番号を入力します。SSL が有効にする場合は、チェックボックスをオンにします。

インストールウィザード

セントラルサーバー登録  
セントラルサーバーの登録に必要な情報を入力します。

hp  
invent

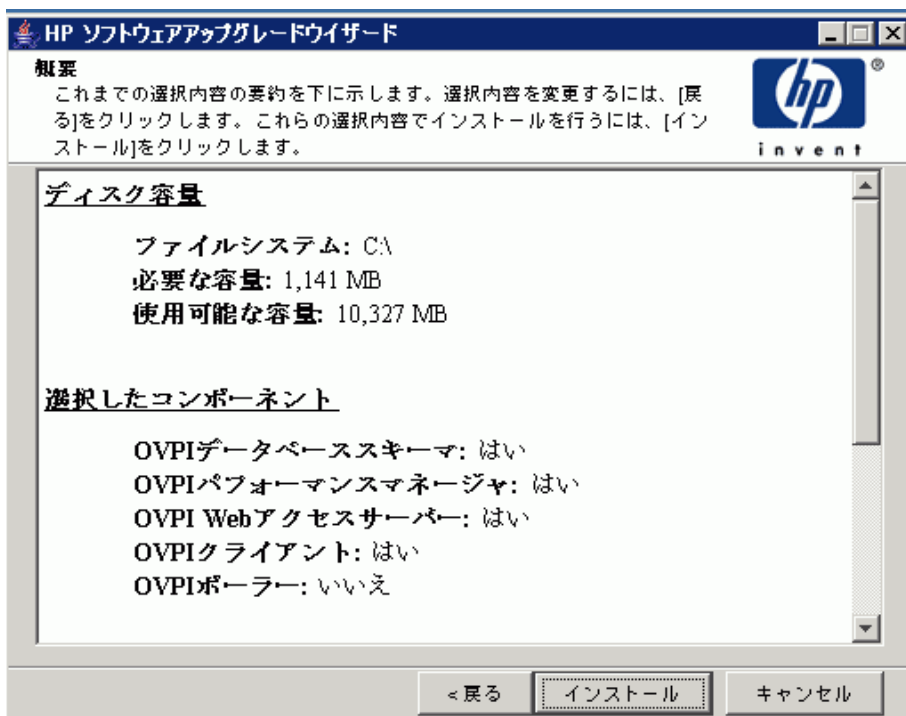
セントラルサーバーのホスト名:

セントラルサーバーのポート番号:

w30BBセントラルサーバーは SSL を使うように設定されています

< 戻る    次へ >    キャンセル

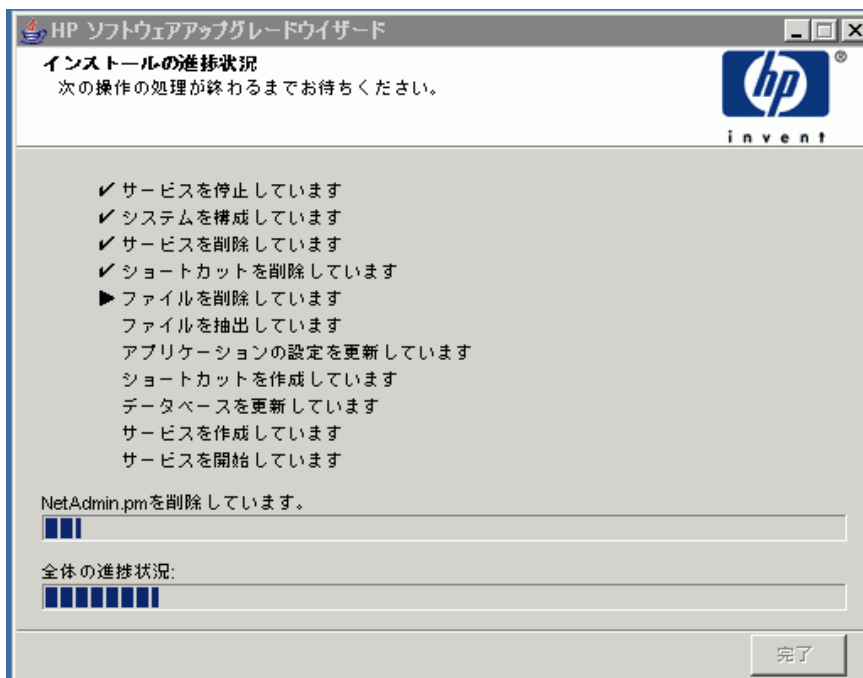
- 9 [次へ]をクリックします。[概要]ウィンドウが開きます。



[概要]ウィンドウには、実行されるインストールの情報が表示されます。この時点で[戻る]ボタンを使用すれば、変更可能です。

ウィザードでインストール項目を特定することで、OVPIの特定のコンポーネントのみをインストールできます。選択内容によって、インストーラーが実行するアクションおよびウィザードが表示するウィンドウが異なります。

- 10 **[インストール]** をクリックします。[インストールの進捗状況] ウィンドウが開きます。



インストールは終了です。

## レポートパックのアップグレード

OVPI をアップグレードした後、レポートパックを OCT07RP バージョンにアップグレードし、OVPI Timer を開始する必要があります。

# リモートポーラーのアップグレード

OVPI では、OVPI のインストールとは別に、リモートポーラーのインストールやアップグレードを実行できます。

リモートポーラーをアップグレードするためのインストールプロセスは、[データベースの役割] ウィンドウが表示されない点以外、OVPI をアップグレードするプロセスと同じです。

## アップグレード後の作業

OVPI 5.30 にアップグレードした後、OVPI Timer プログラムを起動します。Timer の起動方法の詳細は、『HP OpenView Performance Insight 管理ガイド』を参照してください。

# 11 Sybase インタフェースファイル

この章の情報は、参考用として提供されています。**Sybase** インタフェースファイルの変更は、管理コンソールのシステム管理アプリケーションを使用して行う必要があります。このアプリケーションの使用方法の詳細については、『**Performance Insight Reference Guide**』を参照してください。

**Sybase** では**インタフェースファイル**というファイルを使用してネットワーク上の **SQL Server** を検索します。この付録では、**dsedit** を使用してこのファイルを作成または変更する方法について説明します。

**Sybase** インタフェースファイルは次の場所にあります。

- **UNIX** の場合

インタフェースファイルは、**SYBASE** 環境変数で指定した **Sybase** ホームディレクトリにあります (**/usr/Sybase** など)。詳細は、**208** ページの「**UNIX** システムでの **Sybase** インタフェースファイルの作成」を参照してください。

- **Windows** の場合

インタフェースファイルは **C:\Sybase\ini\sql.ini** にあります。**C:** は **Sybase** ディレクトリのある場所です。詳細は、**211** ページの「**Windows** システムでの **Sybase** インタフェースファイルの作成」を参照してください。



**SQL Server** の名前を入力するときは、必ず **Sybase** インタフェースファイルのエントリと完全に同じ名前にしてください。

# UNIX システムでの Sybase インタフェースファイルの作成

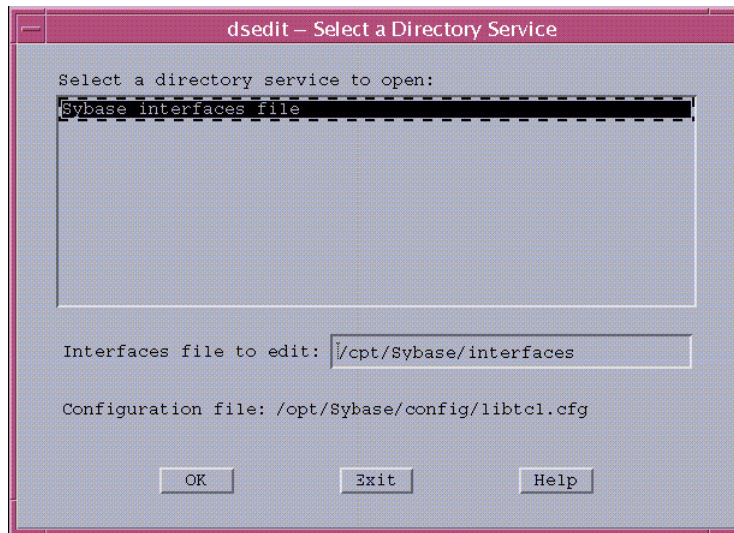
`dsedit` ユーティリティを使用して、UNIX システムの Sybase 用に Sybase インタフェースファイルを作成します。

Sybase インタフェースファイルを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 新しいシェルウィンドウを開きます。
- 2 次のコマンドを入力します。

```
$SYBASE/bin/dsedit
```

[`dsedit - Select a Directory Service`] ダイアログボックスが開きます。

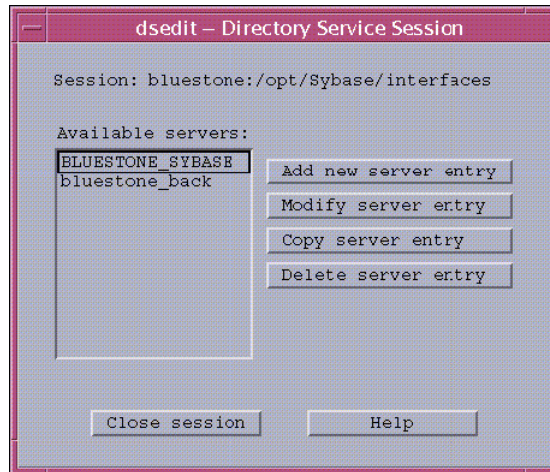


- 3 [Select a directory service to open] ボックスで [Sybase interfaces file] を選択します。
- 4 [Interfaces file to edit] ボックスでインタフェースファイルのパスと名前を確認します。



5 **[OK]** をクリックします。

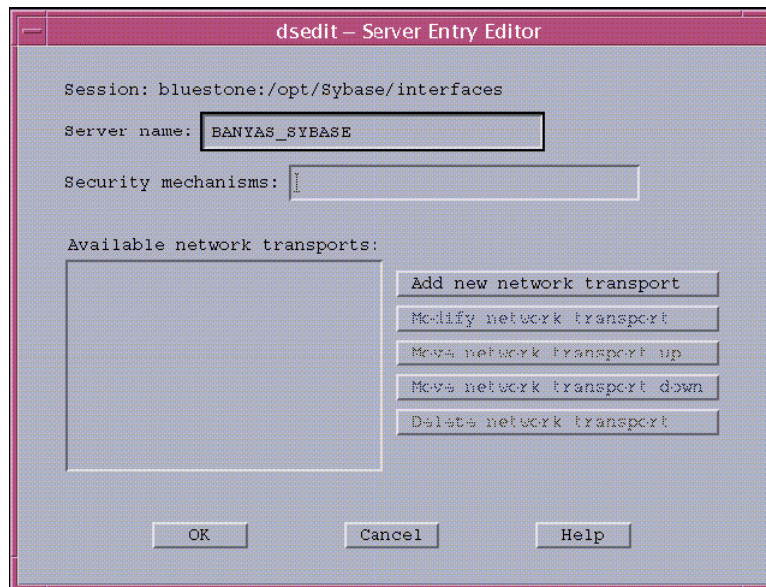
**[dsedit - Directory Service Session]** ダイアログボックスが開きます。



6 **[Available servers]** ボックスから、**Syabase** サーバーを選択します。

7 **[Add new server entry]** をクリックします。

**[dsedit - Server Entry Editor]** ダイアログボックスが開きます。

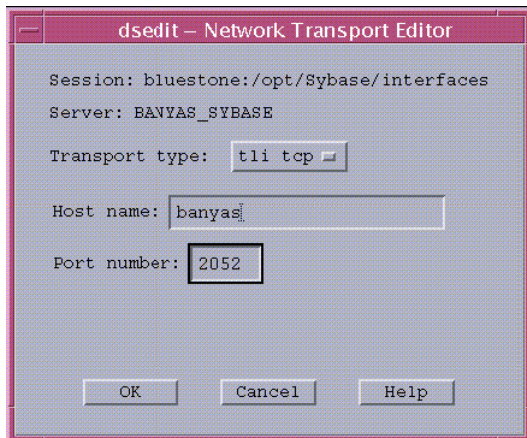


- 8 [Server name] ボックスに、サーバーのホスト名ではなく、Sybase のセカンダリサーバーの名前を入力します(この例では **BANYAS\_SYBASE**)。

▶ UNIX プラットフォームでの Sybase サーバー名は通常、*hostname\_SYBASE* です。Windows プラットフォームでの Sybase サーバー名は通常、ホスト名と同じです。

- 9 [Add new network transport] をクリックします。

[dsedit - Network Transport Editor] ダイアログボックスが開きます。



- 10 [Transport type] リストで、[tli tcp] をクリックします。
- 11 [Host name] ボックスにセカンダリサーバーのホスト名を入力します。
- 12 [Port number] ボックスに、セカンダリサーバーで Sybase 接続のために設定されているポート番号を入力します。

▶ UNIX システムにインストールされている OVPI サーバーのポート番号は通常、2052 です。Windows システムにインストールされている OVPI サーバーのポート番号は通常、5000 です。

- 13 [OK] をクリックして [dsedit - Network Transport Editor] ダイアログボックスを閉じます。
- 14 [OK] をクリックして [dsedit - Server Entry Editor] ダイアログボックスを閉じます。

- 15 [Close session] をクリックして [dsedit - Directory Service Session] ダイアログボックスを閉じます。
- 16 [Exit] をクリックして [dsedit - Select a Directory Service] ダイアログボックスを閉じます。
- 17 [はい] をクリックして dsedit を終了します。

編集した内容は、the \$SYBASE/interfaces ファイルを表示することで確認できます。

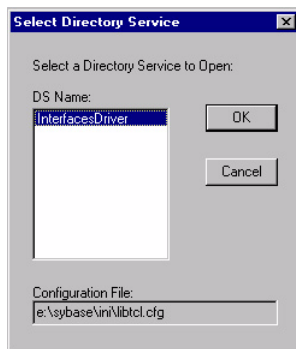
## Windows システムでの Sybase インタフェースファイルの作成

dsedit ユーティリティを使用して、Windows システムの Sybase 用に Sybase のセカンダリサーバーインタフェースファイルをインストールします。

Sybase インタフェースファイルを作成するには、以下の手順に従います。

- 1 [スタート]、[プログラム]、[Sybase Dsedit] の順に選択します。

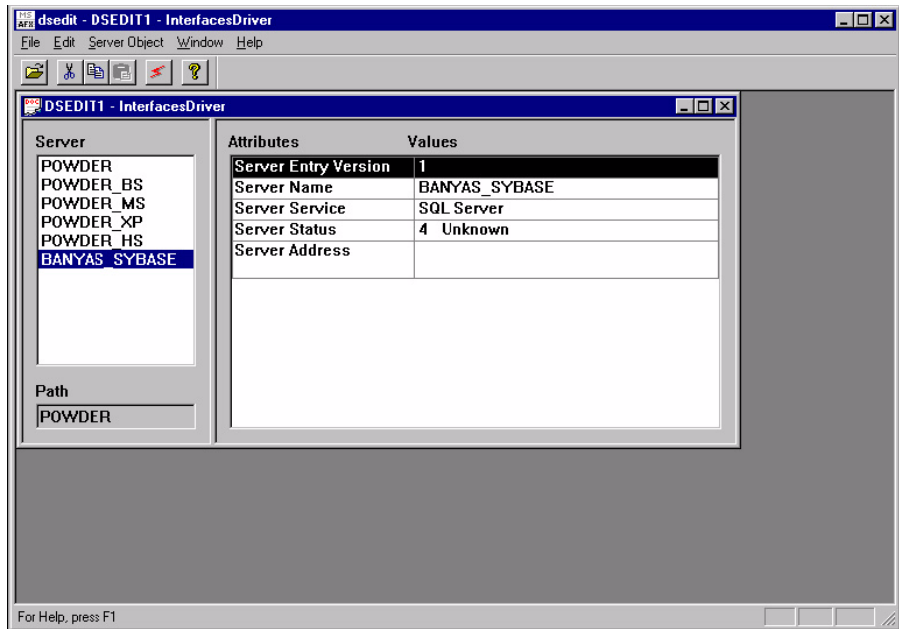
Sybase インタフェースファイルを作成するには、以下の手順に従います。



- 2 [DS Name] ボックスで [InterfacesDriver] を選択します。

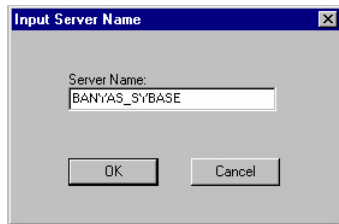
3 [OK] をクリックします。

[DSEdit1 - InterfacesDriver] ウィンドウが開きます。



4 [Server Object] メニューから [Add] を選択します。

[Input Server Name] ダイアログボックスが開きます。

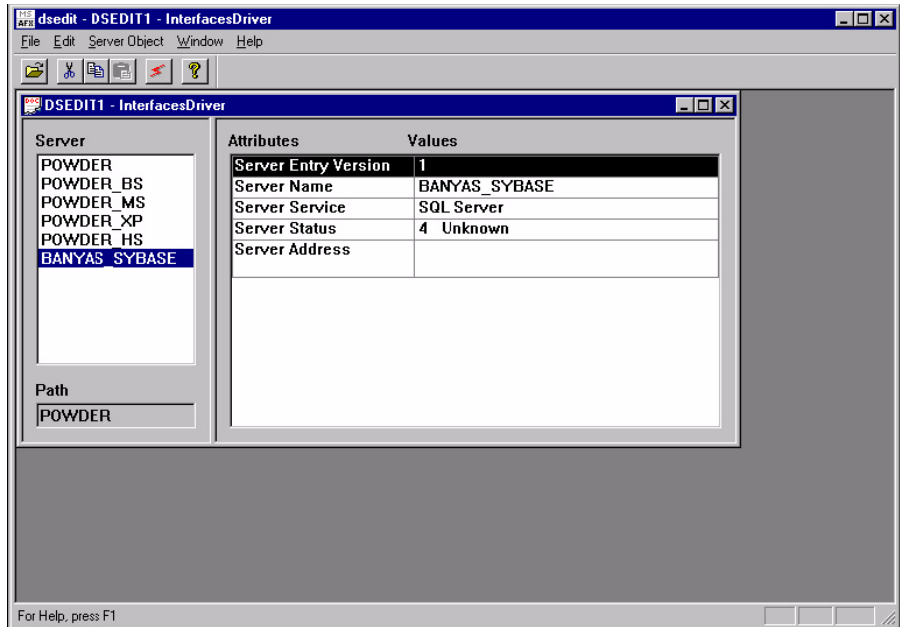


5 [Server Name] ボックスにデータベースサーバー名を入力します(この例では UNIX プラットフォームの **BANYAS\_SYBASE**)。

▶ UNIX プラットフォームでの Sybase サーバー名は通常、*servername\_SYBASE* です。Windows プラットフォームでの Sybase サーバー名は通常、ホスト名と同じです。

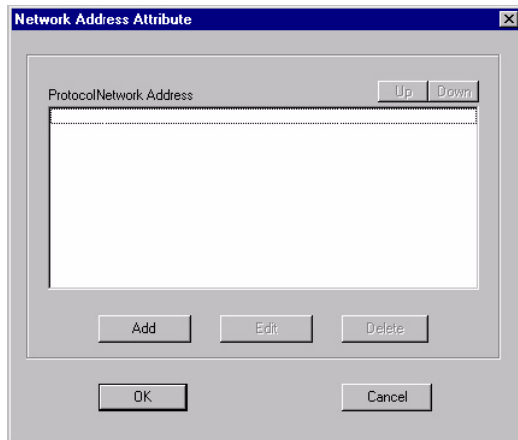
6 [OK] をクリックします。

[DSEdit1 - InterfacesDriver] ウィンドウが再度開き、追加したサーバー名が強調表示されます。



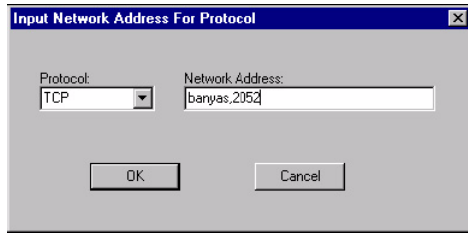
7 [Attributes] 列で [Server Address] 属性をダブルクリックします。

[Network Address Attribute] ダイアログボックスが開きます。



8 **[Add]** をクリックします。

**[Input Network Address For Protocol]** ダイアログボックスが開きます。



9 以下の手順に従います。

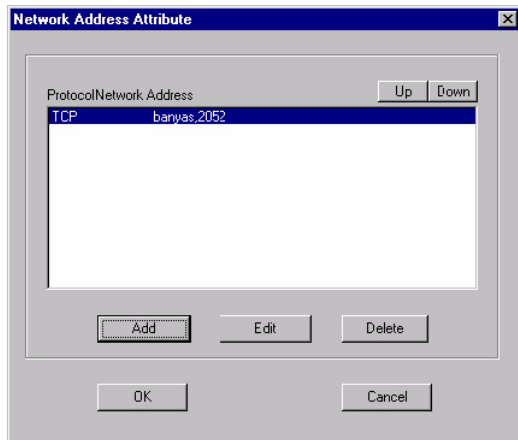
a **[Protocol]** リストで、**[TCP]** をクリックします。

b **[Network Address]** ボックスに、サーバーのホスト名（この例では banyas）、コンマ、サーバーがリスンするポート番号（この例では 2052）の順で入力します。

▶ UNIX システムにインストールされている OVPI サーバーのポート番号は通常、2052 です。Windows システムにインストールされている OVPI サーバーのポート番号は通常、5000 です。

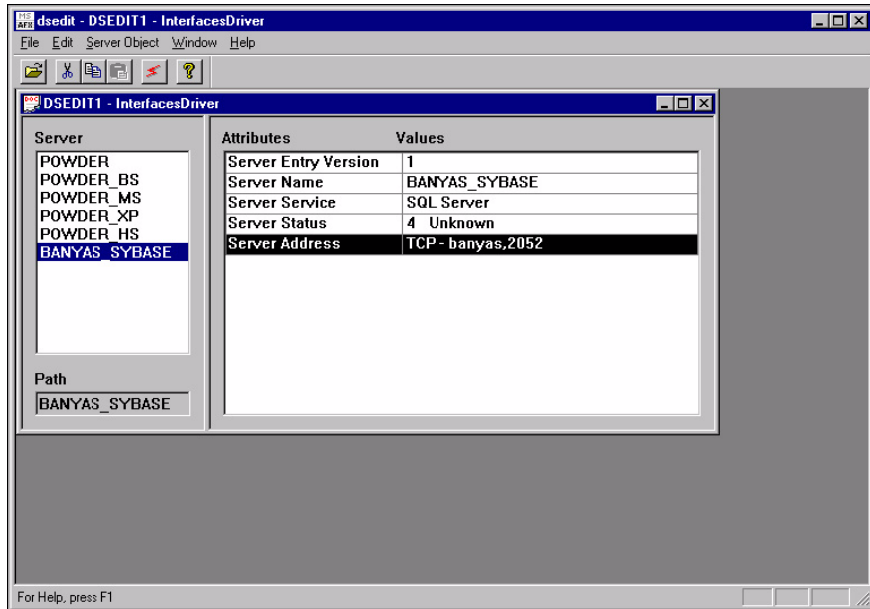
10 **[OK]** をクリックします。

**[Network Address Attribute]** ダイアログボックスが開き、入力した内容が表示されます。



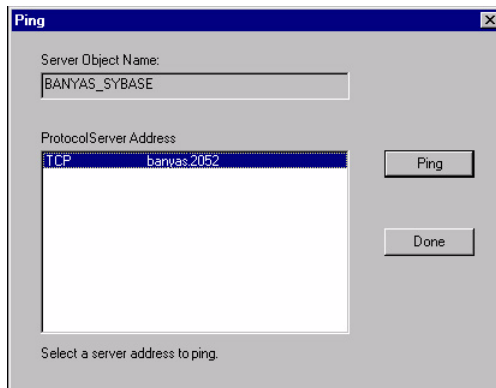
11 **[OK]** をクリックします。

**[DSEDIT1 - InterfacesDriver]** ウィンドウが開き、追加した情報が強調表示されます。



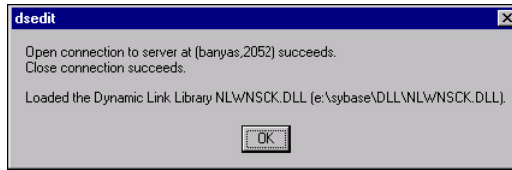
12 **[Ping]** アイコンをクリックして、指定したサーバーへの接続をテストします。

**[Ping]** ダイアログボックスが開きます。



13 **[Ping]** をクリックします。

指定したサーバーに正常に接続できた場合は、**dsedit** のウィンドウに次のようなメッセージが表示されます。



▶ サーバーが認識されないことを示すメッセージが表示される場合は、サーバーのホスト名やポート番号を間違えて指定したか、サーバーが停止しています。サーバーのホスト名とポート番号を確認してください。それでもうまくいかない場合は、サポートに問い合わせます(4 ページの「サポート」を参照してください)。

14 **[OK]** をクリックしてメッセージを閉じます。

15 **[Done]** をクリックして **[Ping]** ダイアログボックスを閉じます。

16 **dsedit** ユーティリティの **[File]** メニューから **[Exit]** を選択します。



# 索引

## C

Common Desktop Environment, 38

## D

DVD のマウント (UNIX), 77, 92, 118

## H

HP Passport ID, 161

## J

Java 関連パッチ, 32

## N

Network Node Manager, 37, 166

## O

### OVPI

アンインストール

事前に必要な作業, 167

開始と停止, 165

OVPI 管理者アカウント, 112, 140, 147

OVPI クライアント, 18

管理コンソール, 19

レポートビューア, 19

レポートビルダ, 19

### OVPI コンポーネント

OVPI クライアント, 18

Web アクセスサーバー, 18

データベース管理ソフトウェア, 17

パフォーマンスマネージャ, 17

リモートポーラー, 20

OVPI データベース, 17

OVPI データベースインスタンス, 17

OVPI のアンインストール

UNIX での, 168

Windows での, 168

事前に必要な作業, 167

OVPI の開始, 165

OVPI の機能, 11

OVPI の構成

例, 34

OVPI の停止, 165

## S

SNMP セキュリティパック, 36

SSL, 114, 142, 149

有効にする, 149

### Sybase

データベースに接続, 100, 128

デフォルトのポート番号, 33

Sybase データベースに接続, 100, 128

[Sybase のユーザーとデバイスの作成] ウィンドウ , 102, 130

Sybase ユーザーとデバイスのウィンドウ , 130

## U

### UNIX

OVPI のアンインストール , 168  
サポートされているデスクトップ , 38

### UNIX システム

DVD のマウント , 77, 92, 118

## W

Web アクセス , 35

Web アクセスサーバー , 18  
デフォルトのポート番号 , 33  
ブラウザの要件 , 35

[Web アクセスサーバーの設定] ウィンドウ , 112, 140, 147

### Windows

OVPI のアンインストール , 168

## あ行

### アカウント

管理者 , 113, 141, 149  
ユーザー , 149

アンインストールウィザード  
起動 , 168

[インストール先フォルダ] ウィンドウ , 98, 147, 154, 156

### インストールに関する問題

ポーリングおよび SNMP の接続性 , 35  
レポートを利用するクライアントの接続性 , 35

[インストールの進捗状況] ウィンドウ , 82, 86, 116, 144, 145, 151, 152, 155, 159

インストールの前提条件 , 40

### インストール前の作業

HP Compaq ユーザー , 38  
Network Node Manager との統合 , 37  
Red Hat Linux システム , 38  
SNMP セキュリティパックのインストール , 36  
Web アクセスの計画 , 35  
オペレーティングシステムソフトウェアの更新 , 30  
国際化の計画 , 38  
ポートの識別 , 33

### ウィザード

アンインストール , 168

### ウィンドウ

Sybase のユーザーとデバイスの作成 , 102, 130  
Web アクセスサーバーの設定 , 112, 140, 147  
インストール先フォルダ , 98, 147, 154, 156  
インストールの進捗状況 , 82, 86, 116, 144, 145, 151, 152, 155, 159  
概要 , 144, 151, 155, 159  
データベース管理者を使用した Sybase 参照 , 100, 128  
データベースの選択 , 99, 127, 147, 154, 157  
パフォーマンスマネージャの設定 , 104, 108, 132, 136, 157  
リモート管理サーバーの設定 , 151, 157

### 運用環境

スタンドアロン , 9  
図 , 10  
分散 , 11, 12, 14

オペレーティングシステム  
更新, 30  
リリースレベルのパッチ, 30  
オペレーティングシステムソフトウェアの更新, 30

## か行

[概要] ウィンドウ, 144, 151, 155, 159  
管理コンソール, 19  
デフォルトのポート番号, 33  
管理者アカウント, 113, 141, 149  
キャッシュディレクトリ, 108, 136, 157  
共通のキャラクタセット, 162  
国際化, 38

## さ行

サーバー  
データベース, 17  
分散, 11  
サービスパック, 161  
サテライトデータベースサーバー, 12  
システムのバックアップ, 164  
システムの要件  
サポートされているデスクトップ  
(UNIX), 38  
デフォルトのポート番号  
例, 34  
スタンドアロン環境, 9  
図, 10  
設定作業, 162

## た行

チェックリスト, 40

中央データベースサーバー, 11  
追加  
ユーザーアカウント, 113, 141, 149  
データベースインスタンス, 17  
[データベース管理者を使用した Sybase  
参照] ウィンドウ, 100, 128  
データベース管理ソフトウェア, 17  
データベースサーバー, 17  
サテライト, 12  
中央, 11  
リモート, 18  
データベースシステムの役割, 97, 124  
データベースセグメント  
変更, 105, 133  
[データベースの選択] ウィンドウ, 99, 127,  
147, 154, 157  
デスクトップ (UNIX)  
インストールでサポートされている, 38  
デフォルトのポート番号, 33  
例, 34

## な行

ネットワーク接続性, 33

## は行

パッチ  
Java 関連, 32  
リリースレベル, 30  
パフォーマンスマネージャ, 17  
[パフォーマンスマネージャの設定] ウィン  
ドウ, 104, 108, 132, 136, 157  
表領域, 99, 102, 130

- ファイアウォール
  - OVPI ポート , 33
  - インストールに関する問題 , 35
- ブラウザの要件
  - Web アクセスサーバー , 35
- 分散環境 , 11
  - いつ使うのか , 15
  - インストールの順番 , 120
  - 機能 , 11
  - 共通のキャラクタセット , 162
  - サーバー , 11
- 変更
  - データベースセグメント , 105, 133
- ポート
  - ネットワーク接続性 , 33
- ポート番号
  - 例 , 34
- ポーリング , 20
- ポーリングおよび SNMP の接続性 , 35

## や行

- 役割
  - データベースシステム , 97, 124
- 有効にする
  - SSL , 149
- ユーザーアカウント , 149
  - 削除 , 114, 142, 149
- ユーザーアカウントの削除 , 114, 142, 149

## ら行

- [ リモート管理サーバーの設定 ] ウィンドウ ,  
151, 157
- リモートデータベースサーバー , 18
- リモートポラー , 20